

大正八年四月府令第四十八號臺灣公立簡易實業學校規則附則第五項ノ規定ハ本令ニ之ヲ準用ス

臺灣總督府工業講習所が前述の如く臺北工業學校となつた外、大正八年四月公立臺中商業學校及公立嘉義農林學校が設置せられた。

農業教育を施す實業學校が正式に認めらるることとなつたので從來の農事試驗場内の教育部は廢止せられ、農業講習生制度は存在せざることとなつた。

結業試驗場に於ける結業講習生制度も亦同一の理由に依り大正十年に至つて廢止せられた。

大正十年二月二十四日臺灣總督府令第二十二號を以て左の如く臺灣公立簡易實業學校規則中に改正が行はれた。

大正八年府令第四十八號臺灣公立簡易實業學校規則中左ノ通改正ス

第一條 簡易實業學校ヲ設置セムトスルトキハ設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

一 學校ノ名稱(實業ノ種別ヲ現ハスヘシ)

二 位置

郡市街庄大字地番ヲ記スヘシ

三 學校特殊ノ目的

四 學級數

五 修業年限

六 授業料額

七 教科目

八 授業開始期日

九 校地、校舎、寄宿舎及職員宿舍ニ關スル事項

校地ニ付テハ地番甲數ヲ記シタル圖面、建物ニ付テハ配置圖ヲ添附スヘシ但シ建物ヲ新築、増築又ハ改築スル場合ハ短計圖及設計仕様書ヲ添附スヘシ

十 實習地ニ關スル事項(農學校ニ限ル)

郡市街庄大字地番甲數ヲ記スヘシ

十一 一年ノ收支豫算

簡易實業學校ヲ公學校ニ併置スル場合ニ於テハ前項ノ外併置スヘキ公學校名ヲ加フ

第一項第一號乃至第十號又ハ前項ノ事項ヲ變更セムトスルトキハ設立者ニ於テ事由ヲ具シ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

第二條、第四條及第二十一條ヲ削ル

第三條中第一項ヲ左ノ如ク改メ第二項第七號中「ノ金額及納入」及第八號中「廳長ニ於テ」ヲ削ル

簡易實業學校ノ細則ハ設立者ニ於テ市街庄、市街庄組合又ハ街庄組合ニ在リテハ州知事、其ノ他ニ在リテハ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ之ヲ定ムヘシ、之ヲ變更セムトスルトキ亦同シ

第五條 簡易實業學校ヲ廢止セムトスルトキハ左ノ事項ヲ具シ設立者ニ於テ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

一 事由

二 廢止期日

三 生徒ノ處分方法

第六條 簡易實業學校ノ設立者ヲ變更セムトスルトキハ事由及協定事項ヲ具シ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

第七條 州知事ニ於テ第三條ノ規定ニ依リ認可ヲ爲シタルトキハ之ヲ臺灣總督ニ報告スヘシ

第十四條第二項中「廳長」ヲ「州知事又ハ廳長」ニ、「使用スルコトヲ得」ヲ「使用セシムルコトヲ得」ニ改ム

第十六條第一項中「廳長」ヲ「州知事又ハ廳長」ニ改ム

第二十二條第一項中「五圓内」ヲ「九圓内」ニ改メ第二項ヲ削ル

附則第五號ヲ削ル

附則

本令ハ大正十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

大正十年三月九日臺灣總督府令第二十六號を以て左の如く臺灣公立實業學校規則中に改正が行はれた。

大正八年府令第六十六號臺灣公立實業學校規則中左ノ通り改正ス

第一條 臺灣教育令ニ依ル公立實業學校ニ關シテハ本令ニ依ル

第三條第一項及第三項中「電工科」ヲ「電氣科」ニ改ム

第五條中「臺灣總督」ヲ「州知事」ニ改メ左ノ一項ヲ加フ

州知事ニ於テ前項ノ認可ヲ爲シタルトキハ之ヲ臺灣總督ニ報告スヘシ

「第二章」ヲ「第三章」ニ改メ以下順次繰下ケ左ノ一章ヲ加フ

第二章 設置及廢止

第五條ノ二 公立實業學校ヲ設置セムトスルトキハ設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

一 學校ノ名稱(實業ノ種類ヲ現ハスヘシ)

二 位置

郡市街庄大字字地番ヲ記スヘシ

三 學級數

四 生徒定員

五 授業開始期日

六 校地、校舎、寄宿舎及職員宿舍ニ關スル事項

校地ニ付テハ地番甲數ヲ記シタル圖面、建物ニ付テハ配置圖ヲ添附スヘシ但シ建物ヲ新築、増築又ハ改築

スルトキハ矩計圖及設計仕様書ヲ添附スヘシ

七 實習地ノ位置及其ノ甲數(農林學校ニ限ル)

位置ハ郡市街庄大字字地番ヲ記スヘシ

八 一年ノ收支概算

前項第一號乃至第七號ノ事項ヲ變更セムトスルトキハ設立者ニ於テ事由ヲ具シ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

第五條ノ三 公立實業學校ヲ廢止セムトスルトキハ設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

一 事由

二 廢止期日

三 生徒ノ處分方法

第五條ノ四 公立實業學校ノ設置又ハ廢止ヲ認可シタルトキハ臺灣總督之ヲ告示ス

第六條第三項中「十二時内」ヲ「九時内」ニ改ム

第十一條第一項中「臺灣總督」ヲ「州知事」ニ改ム

第十三條 公立實業學校ノ生徒數ハ六百人内トス

第二十四條及第二十五條ノ生徒數ハ前項ノ生徒數ニ之ヲ算入セス

第十四條 學級ハ同學年ノ生徒ヲ以テ之ヲ編成スヘシ

一 學級ノ生徒數ハ工業學校ニ在リテハ三十五人内其ノ他ノ學校ニ在リテハ五十人内トス

第十六條 教員ノ數ハ一學級毎ニ二人以上ヲ置クモノトス但シ一學級毎ニ一人ハ他ノ職ヲ兼ニス又ハ他ノ職ヨリ兼ネサルコトヲ要ス

前項ノ外第二外國語ノ爲ニハ其ノ一國語毎ニ一人、特殊ノ技能ヲ要スルモノノ爲ニハ一人又ハ數人ヲ増スモノトス

第十七條第一項中「校舍、」ノ下「體操場、」ヲ加ヘ同項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

前項ノ外農林學校ハ實習地ヲ備フヘシ

第十八條ヲ削ル

第二十一條 第二學年以上ニ入學ヲ志願スル者アルトキハ相當ノ年齢ニ達シ前各學年ノ課程ヲ修業シタル者ト同等

以上ノ學力ヲ有スル者ニ限り第十九條ノ時期ニ於テ入學ヲ許スコトヲ得

前項ノ學力ハ前各學年ノ各教科目及其ノ程度ニ由リテ試験ヲ行ヒ之ヲ檢定スヘシ但シ試験ノ必要ナシト認メタル科目ニ付テハ之ヲ行ハサルコトヲ得

第二十一條ノ二 生徒ニシテ退學シタル者一年内ニ再入學ヲ志願シタルトキハ試験ニ由ラスシテ原學年以下ノ學年

ニ入學ヲ許スコトヲ得

第三十條中「十二圓」ヲ「十八圓」ニ、「四圓」ヲ「六圓」ニ、「徵收ス」ヲ「徵收スヘシ」ニ改ム

第三十一條第一項中「徵收ス」ヲ「徵收スヘシ」ニ、「同第二項中「徵收セス」ヲ「徵收スルコトヲ得」ニ改ム

第三十二條 生徒中成績優等ナル者ノ授業料ハ之ヲ徵收セサルコトヲ得其ノ人員ハ州知事ノ認可ヲ受ケ學校長之ヲ定ム

別記第一號表ヲ左ノ如ク、同第二號表中其ノ二「電工科」ヲ「電氣科」ニ改メ、同表其ノ一乃至其ノ六中各學年修身ノ項程度ノ欄ニ「作法」ヲ加ヘ、體操、實修及計ノ項毎週教授時數ノ欄、英語ノ項程度ノ欄、並ニ其ノ三土木建築科第一學年實修ノ項程度ノ欄ヲ左ノ如ク、同第三號表ヲ左ノ如ク改ム

第一號表

臺灣公立農林學校教科目、其ノ程度及每週教授時數表



計	實	體	英
	修	操	語
三九	一一	二	
			發音、綴字、講讀、會話、習字
三九	一四	二	
			講讀、會話、習字
三九	一八	二	
			同上

其ノ二 電氣科

計	實	體	英
	修	操	語
三九	一一	二	
			發音、綴字、講讀、會話、習字
三九	一三	二	
			講讀、會話、習字
三九	一八	二	
			同上

其ノ三 土木建築科

計	實	體	英
	修	操	語
三九	一一	二	
	工具練習、簡單ナル 手、仕口、測量		發音、綴字、講讀、會話、習字
三九	一四	二	
			講讀、會話、習字
三九	一八	二	
			同上

其ノ四 應用化學科

計	實	體	英
	修	操	語
三九	一一	二	
			發音、綴字、講讀、會話、習字
三九	一四	二	
			講讀、會話、習字
三九	一七	二	
			同上

其ノ五 家具科

計	實	體	英
	修	操	語
三九	一一	二	
			發音、綴字、講讀、會話、習字
三九	一四	二	
			講讀、會話、習字
三九	二四	二	
			同上

其ノ六 金屬細工科

計	實	體	英
	修	操	語
三九	一三	二	
			發音、綴字、講讀、會話、習字
三九	一六	二	
			講讀、會話、習字
三九	二六	二	
			同上

第三號表

臺灣公立商業學校教科目、其ノ程度及每週教授時數表

教科目	第一學年			第二學年			第三學年		
	時數	教授	程度	時數	教授	程度	時數	教授	程度
修身	二		道德ノ要旨、商業者ノ心得、作法	一		同上	一		同上
國語及漢文	一〇		話方、講讀、作文、語法、習字	八		同上	七		同上、文法
英語	四		發音、綴字、講讀、會話、習字	四		講讀、會話、文法、作文、習字	五		同上
數學	五		算術(珠算、筆算)	五		代數(珠算、商業算術)	四		同上、幾何
理科	三		植物、動物、生理及衛生、礦物	三		物理、化學			
歷史	一		本邦歷史	二		外國歷史、商業歷史一斑、東亞南洋商業歷史			
地理及商品	二		本邦地誌	二		外國地誌、商業地理一斑、東亞南洋商業地理			二 内外重要商品、東亞南洋ノ重要商品
商業要項及商業實踐	二		商業要項	三		同上	五		同上、商業實踐
簿記	二		商業簿記	三		同上	四		工業簿記、銀行簿記
經濟							二		大意
法規							二		商業ニ關スル法規
圖畫	一		臨畫、寫生畫、考案畫	一		同上、用器畫			

體操	計		
	第二外國語	體操、教練、遊技	支那語又ハ馬來語
三	(二)	三五	(三七)
三	同上	同上	同上
三	同上	同上	同上

第二外國語ハ隨意科目トス

附則

本令ハ大正十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際現ニ在學スル生徒ニ課スヘキ教科目及其ノ程度並每週教授時數ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依リ又ハ之ヲ斟酌スルコトヲ得

大正十年四月二十五日勅令第三百三十六號を以て左の如く臺灣公立實業學校官制中に改正が行はれた。

臺灣公立實業學校官制中左ノ通改正ス

第一條 臺灣公立實業學校ハ臺灣教育令ニ依ル實業學校トス

臺灣公立實業學校ニ左ノ職員ヲ置ク

學校長 奏任

教諭 判任

生徒監

書記 判任

第三章 臺灣の教育

第三編 新領土其他に於ける教育

1000

教諭ハ之ヲ奏任ト爲スコトヲ得但シ其ノ員數ハ當該學校ニ於ケル學級數六學級迄ハ三人以内トシ三學級ヲ増ス毎ニ一人ヲ加フルコトヲ得

第三條 學校長ハ州知事ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス  
判任教諭ノ進退ハ州知事之ヲ臺灣總督ニ具狀ス

第八條 臺灣公立實業學校ノ教諭及書記ノ定員ハ各學校ニ付臺灣總督之ヲ定ム  
臺灣公立實業學校ノ職員ノ俸給ハ國庫ノ負擔トス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際現ニ存スル臺灣公立實業學校ハ大正十年四月一日ヨリ本令施行ノ日迄ノ當該學校ノ費用ニ關シテハ大正十年四月一日ヨリ之ヲ本令ニ依ル臺灣公立實業學校ト看做シ第八條第二項ノ規定ヲ適用ス

右は今回地方自治制度の整頓に依り地方税規則が廢止せられ、其代りに上級自治體として州及廳地方費が認めらるることとなつたに伴ひ、公立實業學校即ち臺灣教育令に依る本島人に對する實業教育機關は之を州立とし、學校職員の俸給は之を國庫の負擔とする趣旨を以て公立實業學校官制中に改正が行はれたのである。

同日又勅令第三百三十八號を以て左の如く臺灣公立簡易實業學校官制中に改正が行はれた。

臺灣公立簡易實業學校官制中左ノ通改正ス

第一條中「訓導」ヲ削ル

第二條第一項中「臺灣總督」ヲ「州知事又ハ廳長」ニ、同條第二項中「廳長」ヲ「郡守若ハ市尹又ハ廳長」ニ改ム

第四條及第六條ヲ削リ第五條ヲ第四條トス

第五條 臺灣公立簡易實業學校ノ職員ノ定員ハ臺灣總督之ヲ定ム

臺灣公立簡易實業學校ノ職員ノ俸給其ノ他ノ諸給與ハ州又ハ廳地方費ノ負擔トス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

右は今回地方自治制度が整理せられ、地方税規則が廢止せられ、其代りに上級自治體として州及廳地方費が認められ、又下級自治體として市街庄が認めらるることとなつたに伴ひ、公立簡易實業學校は市街庄等各種の自治體に於て之を設立せしむることとし、學校職員の俸給其他の諸給與は之を州又は廳地方費の負擔とする趣旨を以て公立簡易實業學校官制中に改正が行はれたのである。

第二節 内地人に對する實業教育

大正八年四月一日勅令第六十四號を以て左の如く臺灣總督府商業學校官制中に改正が行はれた。

臺灣總督府商業學校官制中左ノ通改正ス

第一條中「專任八人内 一人奏任 七人判任」ヲ「專任十二人内 二人奏任 十人判任」ニ、「專任一人」ヲ「專任二人」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正八年四月二十一日勅令第三百三十二號を以て左の如く臺灣總督府工業學校官制中に改正が行はれた。

臺灣總督府工業學校官制中左ノ通改正ス

第一條中「二人判任」ヲ「十人内 一人奏任」ニ改メ「生徒監」ノ次ニ「書記專任一人判任」ヲ加フ

第五條 書記ハ學校長ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正八年四月二十六日左の如く臺灣總督府令第五十四號を以て臺灣總督府商業學校規則中の改正、臺灣總督府令第五十五號を以て臺灣總督府工業學校規則中に改正が行はれた。

○臺灣總督府令第五十四號

大正六年<sup>五</sup>月府令第二十二號臺灣總督府商業學校規則中左ノ通改正ス

第十二條ニ左ノ一項ヲ加フ

臺灣神社例祭日ニハ職員及生徒學校ニ參集シ學校長ハ臺灣神社ニ關スル誨告ヲ爲シ一同北白川宮能久親王ヲ奉祀

セル神社ニ參拜又ハ遙拜ヲ爲スヘシ

第二十四條第一號中「成業」ヲ「改善」ニ改ム

第二十七條第二項ヲ削ル

第二十八條中「闕席」ヲ「休學」ニ改ム

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○臺灣總督府令第五十五號

大正七年<sup>十</sup>月府令第七十五號臺灣總督府工業學校規則中左ノ通改正ス

第十二條第二項ヲ左ノ如ク改メ同第三項及第四項ヲ削ル

臺灣神社例祭日ニハ職員及生徒學校ニ參集シ學校長ハ臺灣神社ニ關スル誨告ヲ爲シ一同北白川宮能久親王ヲ奉祀

セル神社ニ參拜又ハ遙拜ヲ爲スヘシ

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正九年二月三日左の如く臺灣總督府令第五號を以て臺灣總督府商業學校規則中の改正、臺灣總督府令第六號を以て臺灣總督府工業學校規則中の改正が行はれた。

○臺灣總督府令第五號

大正六年<sup>五</sup>月府令第二十二號臺灣總督府商業學校規則中左ノ通改正ス

第二十七條 商業學校ノ授業料ハ每學年三十圓トシ各學期十圓ヲ徵收ス

第二十八條 授業料ハ生徒ノ學籍ニ入りタル學期分ヨリ之ヲ除キタル學期分迄徵收ス

第二十三條ノ規定ニ依リ休學全學期ニ互ルトキハ當該學期分ノ授業料ハ之ヲ徵收セス

附則



本令ハ大正九年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

○臺灣總督府令第六號

大正七年<sup>十</sup>月府令第七十五號臺灣總督府工業學校規則中左ノ通改正ス

第二十七條 工業學校ノ授業料ハ每學年二十四圓トシ各學期八圓ヲ徵收ス

第二十八條 授業料ハ生徒ノ學籍ニ入りタル學期分ヨリ之ヲ除キタル學期分迄徵收ス

第二十三條ノ規定ニ依リ休學全學期ニ互ルトキハ當該學期分ノ授業料ハ之ヲ徵收セス

附則

本令ハ大正九年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

大正九年四月十五日左の如く勅令第九十九號を以て臺灣總督府商業學校官制中の改正、勅令第百號を以て臺灣總督府工業學校官制中の改正が行はれた。

○勅令第九十九號

臺灣總督府商業學校官制中左ノ通改正ス

第一條中「專任十二人内 <sup>二人奏任</sup> 十人判任」ヲ「專任十六人内 <sup>三人奏任</sup> 十三人判任」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○勅令第百號

臺灣總督府工業學校官制中左ノ通改正ス

第一條中「專任十人内 <sup>一人奏任</sup> 九人判任」ヲ「專任十七人内 <sup>三人奏任</sup> 十四人判任」ニ、「專任一人」ヲ「專任二人」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十年四月二十五日勅令第百三十七號を以て左の如く臺灣實業學校官制が定められた。

臺灣實業學校官制

第一條 臺灣實業學校ニ左ノ職員ヲ置ク

學校長 奏任

教諭 判任

生徒監

書記 判任

教諭ハ之ヲ奏任ト爲スコトヲ得但シ其ノ員數ハ當該學校ニ於ケル學級數六學級迄ハ三人以内トシ三學級ヲ増ス毎ニ一人ヲ加フルコトヲ得

第二條 學校長ハ州知事ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

判任教諭ノ進退ハ州知事之ヲ臺灣總督ニ具狀ス

第三條 教諭ハ生徒ノ教育ヲ掌ル

第三章 臺灣の教育

- 第四條 生徒監ハ教諭ノ中ヨリ臺灣總督之ヲ命ス  
生徒監ハ學校長ノ指揮ヲ承ケ生徒ノ訓育ヲ掌ル
- 第五條 書記ハ學校長ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス
- 第六條 臺灣實業學校ノ教諭及書記ノ定員ハ各學校ニ付臺灣總督之ヲ定ム
- 臺灣實業學校ノ費用ハ州又ハ市ノ負擔トス但シ職員ノ俸給ハ國庫ノ負擔トス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

臺灣總督府工業學校官制及臺灣總督府商業學校官制ハ之ヲ廢止ス

本令施行ノ際現ニ存スル臺灣總督府工業學校及臺灣總督府商業學校ハ大正十年四月一日ヨリ本令施行ノ日迄ノ當該學校ノ費用ニ關シテハ大正十年四月一日ヨリ之ヲ本令ニ依ル臺灣實業學校ト看做シ第六條第二項ノ規定ヲ適用ス

本令施行ノ際現ニ臺灣總督府工業學校又ハ臺灣總督府商業學校ノ學校長、教諭又ハ書記ノ職ニ在ル者ハ別ニ辭令書ヲ用キス各臺灣實業學校ノ學校長、教諭又ハ書記ニ同官等俸給ヲ以テ任セラレタルモノトス

從來官立實業學校として臺灣總督府工業學校及臺灣總督府商業學校があり、之に關して臺灣總督府工業學校官制及臺灣總督府商業學校官制が定められて居たが、今回地方自治制度の整頓に依り地方税規則が廢止せられ、其代りに上級自治體として州及廳地方費が認められ、又下級自治體として市街庄が認めらるることとなつたに伴ひ、實業學校は之を州又ハ市の設立とし、學校職員ノ俸給は之を國庫の負擔とする趣旨を以て臺灣實業學校官制が定められ、從來の臺灣總督府工業學校官制及臺灣總督府商業學校官制は廢止せられたのである。今回官立より公立に移管せられた内地人に對する

實業學校を臺灣公立實業學校と稱せずして、之を臺灣實業學校と稱したのは前に述べた如く本島人に對する實業學校として臺灣公立實業學校なるものがあるので、此との混雜を避けんが爲に其名稱を異にしたのである。

大正十年四月二十七日臺灣總督府令第八十九號を以て左の如く臺灣商業學校規則が定められた。

臺灣商業學校規則左ノ通相定ム

臺灣商業學校規則

第一章 總則

- 第一條 商業學校ハ本島ノ内外ニ於テ商業ニ従事セムトスル内地人ノ男子ニ須要ナル教育ヲ爲スヲ以テ目的トス
- 第二條 商業學校ニ豫科及本科ヲ置ク
- 第三條 商業學校ノ修業年限ハ豫科二年、本科三年トス
- 第四條 本令及特ニ規定スルモノノ外必要ナル事項ハ州知事ノ認可ヲ受ケ學校長之ヲ定ム
- 州知事ニ於テ前項ノ認可ヲ爲シタルトキハ之ヲ臺灣總督ニ報告スヘシ

第二章 設置及廢止

第五條 商業學校ヲ設置セムトスルトキハ設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

一 學校ノ名稱

二 位置

郡市街庄大字地番ヲ記スヘシ

第三章 臺灣の教育

第三編 新領土其他に於ける教育

三 學級數

四 各科ノ生徒定員

五 第八條第三項乃至第八項ノ學科目及其ノ每週教授時數ニ關スル事項

六 授業開始期日

七 校地、校舎、寄宿舎及職員宿舍ニ關スル事項

校地ニ付テハ地番甲數ヲ記シタル圖面、建物ニ付テハ配置圖ヲ添附スヘシ但シ建物ヲ新築、増築又ハ改築  
セムトスルトキハ矩計圖及設計仕様書ヲ添附スヘシ

八 一年ノ收支概算

前項第一號乃至第七號ノ事項ヲ變更セムトスルトキハ設立者ニ於テ事由ヲ具シ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

第六條 商業學校ヲ廢止セムトスルトキハ設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

一 事由

二 廢止期日

三 生徒處分法

第七條 商業學校ノ設置又ハ廢止ヲ認可シタルトキハ臺灣總督之ヲ告示ス

第三章 學科目及其ノ程度並教科書

第八條 商業學校ノ學科目及各學年ニ於ケル其ノ程度並每週教授時數ハ豫科ニ在リテハ別記第一號表、本科ニ在リテハ別記第二號表ニ依ル

第二外國語ハ二種ニ分チ生徒ニハ其ノ一ヲ課ス

第一項ノ外隨意科目トシテ臺灣語ヲ課スルコトヲ得

體操ニハ擊劍及柔術ヲ加フルコトヲ得

實科ハ之ヲ課セサルコトヲ得

臺灣語ヲ課スルトキハ其ノ每週教授時數ハ二時内トス

擊劍及柔術ヲ加フルトキハ體操ノ每週教授時數ヲ二時内増スコトヲ得

實科ヲ課セサルトキハ其ノ每週教授時數、之ヲ他ノ學科目ニ配當スヘシ

第九條 夏季休業前四週間及夏季休業後四週間ハ學校長ニ於テ每週教授時數中六時内ヲ減スルコトヲ

第十條 商業學校ノ教科書ハ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ學校長之ヲ定ム

第四章 學年、休業日及式日

第十一條 學年ハ四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

學年ヲ分チテ左ノ三學期トス

第一學期 四月一日ヨリ八月二十日迄

第二學期 八月二十一日ヨリ十二月三十一日迄

第三學期 翌年一月一日ヨリ三月三十一日迄

第十二條 毎日ノ教授始終ノ時限ハ學校長之ヲ定ム

第十三條 休業日ハ左ノ如シ

第三章 臺灣の教育

- 一 祭日、祝日
- 二 臺灣神社例祭日、始政記念日
- 三 日曜日

四 夏季休業 七月一日ヨリ八月二十日迄

五 年末年始休業 十二月二十九日ヨリ翌年一月三日迄

六 學年末休業 三月二十六日ヨリ同月三十一日迄

學校長ニ於テ必要ト認ムルトキハ前項第三號乃至第六號ノ休業日中適宜教授ヲ爲スコトヲ得

第十四條 前條第一項ノ外臨時休業ヲ要スルトキハ學校長ニ於テ事由ヲ具シ州知事ノ認可ヲ受クヘシ

非常變災其ノ他急迫ノ場合ニ際シ前項ノ認可ヲ受クル暇ナキトキハ學校長ニ於テ臨時休業ヲ爲スコトヲ得

第十五條 紀元節、天長節祝日、一月一日及始政記念日ニハ職員及生徒學校ニ參集シて祝賀ノ式ヲ行フヘシ

臺灣神社例祭日ニハ職員及生徒學校ニ參集シ學校長ハ臺灣神社ニ關スル誨告ヲ爲シ一同北白川宮能久親王ヲ奉祀セル神社ニ參拜又ハ遙拜ヲ爲スヘシ

#### 第五章 編制及設備

第十六條 商業學校ノ生徒數ハ五百人内トス

第二十八條ノ生徒數ハ前項ノ生徒數ニ算入セス

第十七條 學級ハ同學年ノ生徒ヲ以テ之ヲ編制スヘシ

一學級ノ生徒數ハ五十人内トス

第十八條 教員ノ數ハ一學級毎ニ二人以上ヲ置クモノトス但シ一學級毎ニ一人ハ他ノ職ヲ兼ネス又ハ他ノ職ヨリ兼ネサルコトヲ要ス

前項ノ外第二外國語ノ爲ニハ其ノ一國語毎ニ一人、臺灣語、擊劍又ハ柔術ノ爲ニハ各一人ヲ増スモノトス

第十九條 商業學校ハ其ノ規模ニ適應スル校地、校舍、體操場、寄宿舎、校具及職員宿舎ヲ備フヘシ

校地ハ道德上及衛生上害ナキ所タルヘシ

校舍ハ教授上、管理上及衛生上適當ニシテ質朴堅牢ナルコトヲ要ス

#### 第六章 入學、在學、休學、退學及懲戒

第二十條 生徒ノ入學ハ學年ノ始ニ於テ學校長之ヲ許可スヘシ但シ闕員アルトキハ學年ノ始ヨリ三十日内ニ限り臨時入學ヲ許スコトヲ得

第二十一條 豫科第一學年ニ入學スルコトヲ得ル者ハ年齢十二年以上ニシテ尋常小學校ヲ卒業シタル者又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

第二十二條 豫科第一學年入學志願者カ入學ヲ許スヘキ人員ニ超過スルトキハ試験ニ由リ入學者ヲ選拔スヘシ

豫科第一學年入學志願者中尋常小學校ヲ卒業セサルモノニ付テハ試験ニ由リ學力ヲ檢定スヘシ

第二十三條 豫科第二學年及本科第一學年ニ入學ヲ志願スル者アルトキハ相當ノ年齢ニシテ前各學年ノ課程ヲ修了シタル者ト同等ノ學力ヲ有スル者ニ限り第二十條ノ時期ニ於テ其ノ入學ヲ許スコトヲ得

前項ノ學力ハ前各學年ノ各學科目及其ノ程度ニ由リ試験ヲ行ヒ之ヲ檢定スヘシ但シ試験ノ必要ナシト認メタル學科目ニ付テハ之ヲ行ハサルコトヲ得

第三編 新領土其他に於ける教育

一〇二二

第二十四條 生徒ニシテ退學シタル者一年內ニ再入學ヲ志願シタルトキハ試験ニ由ラスシテ原學年以下ノ學年ニ入學ヲ許可スルコトヲ得

第二十五條 前條ノ場合ヲ除クノ外本科第二學年以上ニ入學ヲ許スコトヲ得ス

第二十六條 各學年ノ課程ノ修了又ハ全學科ノ卒業ヲ認ムルニハ成績ヲ考查シテ之ヲ定ムヘシ

第二十七條 學校長ハ商業學校ヲ卒業セリト認メタル者ニハ卒業證書ヲ授與スヘシ

第二十八條 商業學校卒業後特ニ既修ノ事項ヲ研究又ハ補習セムトスル者アリタルトキハ尙一年內在學ヲ許スコトヲ得

第二十九條 學校長ハ兵役ニ服スル生徒ニ對シ其ノ休學ヲ許スヘシ

生徒疾病三月以上ニ亙ルトキハ願ニ依リ一年內休學ヲ許スコトヲ得

第三十條 學校長ハ生徒ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スル者アル時ハ退學ヲ命スヘシ

一 性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者

二 學力劣等ニシテ成業ノ見込ナシト認メタル者

三 引續一年以上闕席シタル者

四 正當ノ事由ナクシテ引續一月以上闕席シタル者

五 出席常ナラサル者

第三十一條 生徒退學セムトスルトキハ事由ヲ具シ學校長ノ許可ヲ受クヘシ

第三十二條 學校長ハ教育上必要アリト認メタルトキハ生徒ニ懲戒ヲ加フルコトヲ得

第七章 授業料

第三十三條 商業學校ノ授業料ハ年額三十圓トシ毎學期十圓ヲ徴收スヘシ

第三十四條 授業料ハ生徒ノ學籍ニ入りタル學期分ヨリ之ヲ除キタル學期分迄徴收スヘシ

第二十九條ノ規定ニ依リ休學全學期ニ亙ルトキハ當該學期分ノ授業料ハ之ヲ徴收スルコトヲ得ス

第二十五條 生徒中成績優等ナル者ノ授業料ハ之ヲ徴收セサルコトヲ得其ノ人員ハ州知事ノ認可ヲ受ケ學校長之ヲ定ム

附則

本令ハ大正十年勅令第三百三十七號臺灣實業學校官制施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正六年府令第二十二號臺灣總督府商業學校規則ハ之ヲ廢止ス

本令施行ノ際現ニ存スル臺灣總督府商業學校ハ大正十年四月一日以後ノ授業料ニ關シテハ大正十年四月一日ヨリ之ヲ本令ニ依ル臺灣商業學校ト見做シ第七章ノ規定ヲ適用ス

本令施行ノ際現ニ臺灣總督府商業學校ニ在學スル生徒ハ本令ニ依リ設置シタル臺灣商業學校ノ生徒トス

本令施行ノ際現ニ在學スル生徒ニ課スヘキ學科目及其ノ程度ニ關シテハ仍従前ノ例ニ依リ又ハ之ヲ斟酌スルコトヲ得

(別記)

第一號表

臺灣商業學校豫科學科目ノ程度及每週教授時數表

第三章 臺灣の教育

一〇一三

學科目	第一學年		第二學年	
	授時數	程度	授時數	程度
修身	一	道德ノ要旨、作法	一	同上
國語	六	話方、講讀、書取、作文、習字	六	同上
漢文	二	講讀、復文	二	同上
英語	八	發音、綴字、讀方、譯解、會話、習字	八	讀方、譯解、書取、會話、文法、作文
數學	四	算術、珠算	四	算術、代數、珠算
歷史	一	日本歷史	一	同上
地理	二	本島地誌、日本地誌	二	世界地誌
理科	二	本島其ノ他ノ重要ナル植物、動物、礦物、生理	二	同上
圖畫	一	自作畫、用器畫	一	同上
音樂	一	單音唱歌、複音唱歌	一	同上
體育	三	體操、教練	三	同上
實科	二	作業	二	同上
計	三三		三三	

第二號表

臺灣商業學校本科學科目ノ程度及每週教授時數表

學科目	第一學年		第二學年		第三學年	
	授時數	程度	授時數	程度	授時數	程度
修身	一	道德ノ要旨、作法	一	同上	一	同上
讀書	六	國語、漢文(時文) 國語、漢文(時文) 商業文、記事文	五	同上	四	同上
習字	七	讀方、譯解、書取、會話、文法、作文、習字	七	讀方、譯解、書取、會話、作文、習字	六	讀方、譯解、書取、會話、作文
英語	四	支那語又ハ馬來語	三	同上	三	同上
數學	四	商業算術、珠算、代數、幾何	三	商業算術、珠算、幾何	二	商業算術、珠算
理科	二	化學	一	物理	一	物理、機械工學一班
歷史及地理	一	世界歷史一斑	一	東亞、南洋ノ商業歷史及地理	一	東亞、南洋ノ商業歷史及地理、地文一斑
簿記	三	邦文記帳	二	同上	二	邦文記帳、英文記帳
商業實踐	二	商業要項	二	同上	四	商業要項、商業實踐
商品			一	內外重要商品	二	同上
經濟			二	通論、各論	二	各論
法規			二	法學通論、實業法規	三	實業法規

體操	三	體操教練	三	同上	三	同上
計	三三		三三		三三	

同日又臺灣總督府令第九十號を以て左の如く臺灣工業學校規則が定められた。

臺灣工業學校規則左ノ通相定ム

臺灣工業學校規則

第一章 總則

第一條 工業學校ハ本島ノ内外ニ於テ工業ニ從事セムトスル内地人ノ男子ニ須要ナル教育ヲ爲スヲ以テ目的トス

第二條 工業學校ニ豫科及本科ヲ置ク

第三條 工業學校ノ修業年限ハ豫科二年、本科三年トス

第四條 本科ハ之ヲ機械科、土木科、應用化學科ニ分チテ生徒ニハ其ノ一ヲ修メシム

第五條 本令及特ニ規定スルモノノ外必要ナル事項ハ州知事ノ認可ヲ受ケ學校長之ヲ定ム

州知事ニ於テ前項ノ認可ヲ爲シタルトキハ之ヲ臺灣總督ニ報告スヘシ

第二章 設置及廢止

第六條 工業學校ヲ設置セムトスルトキハ設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

一 學校ノ名稱

二 位置

郡市街庄大字字地番ヲ記スヘシ

三 學級數

四 各科ノ生徒定員

五 第九條第三項ノ學科目及其ノ每週教授時數ニ關スル事項

六 授業開始期日

七 校地、校舍、寄宿舎及職員宿舍ニ關スル事項

校地ニ付テハ地番甲數ヲ記シタル圖面、建物ニ付テハ配置圖ヲ添附スヘシ但シ建物ヲ新築、増築又ハ改築スルトキハ矩計圖及設計仕様書ヲ添附スヘシ

八 一年ノ收支概算

前項第一號乃至第七號ノ事項ヲ變更セムトスルトキハ設立者ニ於テ事由ヲ具シ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

第七條 工業學校ヲ廢止セムトスルトキハ設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

一 事由

二 廢止期日

三 生徒ノ處分方法

第八條 工業學校ノ設置又ハ廢止ヲ認可シタルトキハ臺灣總督之ヲ告示ス

第三章 學科目及其ノ程度並教科書

第三章 臺灣ノ教育

第九條 工業學校ノ學科目及各學年ニ於ケル其ノ程度並毎週教授時數ハ別記第一號表及第二號表ニ依ル  
第二外國語ハ二種ニ分チ生徒ニハ其ノ一ヲ課ス

第一項ノ外隨意科目トシテ臺灣語ヲ毎週二時内課スルコトヲ得

毎週教授時數中實修ト他ノ學科目トハ學校長ニ於テ互ニ之ヲ増減スルコトヲ得

夏季休業前四週間及夏季休業後四週間ハ學校長ニ於テ毎週教授時數中九時内ヲ減スルコトヲ得

第十條 工業學校ノ教科書ハ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ學校長之ヲ定ム

第四章 學年、休業日及式日

第十一條 學年ハ四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

學年ヲ分チテ左ノ三學期トス

第一學期 四月一日ヨリ八月二十日迄

第二學期 八月二十一日ヨリ十二月三十一日迄

第三學期 翌年一月一日ヨリ三月三十一日迄

第十二條 毎日ノ教授始終ノ時限ハ學校長之ヲ定ム

第十三條 休業日ハ左ノ如シ

一 祭日、祝日

二 臺灣神社例祭日、始政記念日

三 日曜日

四 夏季休業 七月一日ヨリ八月二十日迄

五 年末年始休業 十二月二十九日ヨリ翌年一月三日迄

六 學年末休業 三月二十六日ヨリ同月三十一日迄

學校長ニ於テ必要ト認ムルトキハ前項第三號乃至第六號ノ休業日中適宜教授ヲ爲スコトヲ得

第十四條 前條第一項ノ外臨時休業ヲ要スルトキハ學校長ニ於テ事由ヲ具シ州知事ノ認可ヲ受クヘシ

非常變災其ノ他急迫ノ場合ニ際シ前項ノ認可ヲ受クル暇ナキトキハ學校長ニ於テ臨時休業ヲ爲スコトヲ得

第十五條 紀元節、天長節祝日、一月一日及始政記念日ニハ職員及生徒學校ニ參集シテ祝賀ノ式ヲ行フヘシ

臺灣神社例祭日ニハ職員及生徒學校ニ參集シ學校長ハ臺灣神社ニ關スル誨告ヲ爲シ一同北白川宮能久親王ヲ奉祀

セル神社ニ參拜又ハ遙拜ヲ爲スヘシ

第五章 編制及設備

第十六條 工業學校ノ生徒數ハ五百人内トス

第二十九條ノ生徒數ハ前項ノ生徒ヲ以テ之ヲ編制スヘシ

第十七條 學級ハ同學年ノ生徒ヲ以テ之ヲ編制スヘシ

一學級ノ生徒數ハ豫科ニ在リテハ五十人内、本科ニ在リテハ三十五人内トス

第十八條 共通ノ學科ハ學級ノ異ナル生徒ヲ合シ同時ニ之ヲ教授スルコトヲ得

第十九條 教員ノ數ハ一學級毎ニ二人以上ヲ置クモノトス但シ一學級毎ニ一人ハ他ノ職ヲ兼ニス又ハ他ノ職ヨリ兼

ネサルコトヲ要ス



前項ノ外第二外國語ノ爲ニハ一國語毎ニ一人、臺灣語ノ爲ニハ一人、其ノ他特殊ノ技能ヲ要スルモノノ爲ニハ一人又ハ數人ヲ増スモノトス

第二十條 工業學校ニ於テハ其ノ規模ニ適應スル校地、校舍、運動場、寄宿舎、校具及職員宿舎ヲ備フヘシ  
校地ハ道德上及衛生上ノ害ナキ所タルヘシ  
校舍ハ教授上、管理上又衛生上適當ニシテ質朴堅牢ナルコトヲ要ス

第六章 入學、在學、休學、退學及懲戒

第二十一條 生徒ノ入學ハ學年ノ始ニ於テ學校長之ヲ許可スヘシ但シ闕員アルトキハ學年ノ始ヨリ三十日內ニ限り隨時入學ヲ許スコトヲ得

第二十二條 豫科第一學年ニ入學スルコトヲ得ル者ハ年齢十二年以上ニシテ尋常小學校ヲ卒業シタル者又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

第二十三條 豫科第一學年入學志願者カ入學ヲ許スヘキ人員ニ超過スルトキハ試験ニ由リ入學者ヲ選拔スヘシ

豫科第一學年入學志願者中尋常小學校ヲ卒業セサル者ニ付テハ試験ニ由リ學力ヲ檢定スヘシ

第二十四條 豫科第二學年及本科第一學年ニ入學ヲ志願スル者アルトキハ相當ノ年齢ニシテ前各學年ノ課程ヲ修了シタル者ト同等ノ學力ヲ有スルモノニ限り第二十一條ノ時期ニ於テ其ノ入學ヲ許スコトヲ得

前項ノ學力ハ前各學年ノ各學科目及其ノ程度ニ由リテ試験ヲ行ヒ之ヲ檢定スヘシ但シ試験ノ必要ナシト認メタル學科目ニ付テハ之ヲ行ハサルコトヲ得

第二十五條 生徒ニシテ退學シタル者一年內ニ再入學ヲ志願シタルトキハ試験ニ由ラスシテ原學年以下ノ學年ニ入

學ヲ許可スルコトヲ得

第二十六條 前條ノ場合ヲ除クノ外本科第二學年以上ニハ入學ヲ許スコトヲ得ス

第二十七條 各學年ノ課程ノ修了又ハ全學科ノ卒業ヲ認ムルニハ成績ヲ考查シテ之ヲ定ムヘシ

第二十八條 學校長ハ工業學校ヲ卒業セリト認メタル者ニ卒業證書ヲ授與スヘシ

第二十九條 工業學校卒業後特ニ既修ノ事項ヲ研究若ハ補習セムトスル者アルトキハ尙二年內在學ヲ許スコトヲ得

第三十條 學校長ハ兵役ニ服スル生徒ニ對シ其ノ間休學ヲ許スヘシ

生徒疾病三月以上ニ互ルトキハ願ニ依リ一年內休學ヲ許スコトヲ得

第三十一條 學校長ハ生徒ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スル者アルトキハ退學ヲ命スヘシ

- 一 性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者
- 二 學力劣等ニシテ成業ノ見込ナシト認メタル者
- 三 引續キ一年以上闕席シタル者
- 四 正當ノ事由ナクシテ引續キ一月以上闕席シタル者
- 五 出席常ナラサル者

第三十二條 生徒退學セムトスルトキハ事由ヲ具シ學校長ノ許可ヲ受クヘシ

第三十三條 學校長ハ教育上必要アリト認メタルトキハ生徒ニ懲戒ヲ加フルコトヲ得

第七章 授業料

第三十四條 工業學校ノ授業料ハ毎學年三十圓トシ毎學期十圓ヲ徴收スヘシ

第三編 新領土其他に於ける教育

一〇二二

- 第三十五條 授業料ハ生徒ノ學籍ニ入りタル學期分ヨリ之ヲ除キタル學期分迄徴收スヘシ
- 第三十條ノ規定ニ依リ休學全學期ニ互ルトキハ當該學期分ノ授業料ハ之ヲ徴收スルコトヲ得ス
- 第三十六條 生徒中成績優等ナル者ノ授業料ハ之ヲ徴收セサルコトヲ得其ノ人員ハ州知事ノ認可ヲ受ケ學校長之ヲ定ム

附則

- 本令ハ大正十年勅令第三百三十七號臺灣實業學校官制施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス
- 大正七年府令第七十五號臺灣總督府工業學校規則ハ之ヲ廢止ス
- 本令施行ノ際現ニ存スル臺灣總督府工業學校ハ大正十年四月一日以後ノ授業料ニ關シテハ大正十年四月一日ヨリ之ヲ本令ニ依ル臺灣工業學校ト看做シ第七章ノ規定ヲ適用ス
- 本令施行ノ際現ニ臺灣總督府工業學校ニ在學スル生徒ハ本令ニ依リ設置シタル臺灣工業學校ノ生徒トス
- 第十一條ノ學年、學期及第十三條第一項第六號ノ學年末休業ニ就テハ當分ノ内左ノ規定ニ依ルコトヲ得
  - 一 學年ハ八月二十一日ニ始リ翌年八月二十日ニ終ル
  - 二 第一學期ハ八月二十一日ヨリ十二月三十一日迄、第二學期ハ一月一日ヨリ三月三十一日迄、第三學期ハ四月一日ヨリ八月二十日迄トス
  - 三 學年末休業ハ之ヲ春季休業トシ三月二十六日ヨリ同月三十一日迄トス

(別記)

第一號表

臺灣工業學校豫科學科目ノ程度及毎週教授時數表

學 科 目	第 一 學 年		第 二 學 年	
	每 週 授 時 數	程 度	每 週 授 時 數	程 度
修 身	一	實踐道德ノ要旨	一	同上
國 語	六	講讀、作文、習字	六	同上
數 學	五	算術	六	代數、幾何
歷 史	二	本邦歴史	二	外國歴史、臺灣制度ノ大要
地 理	二	本邦地理	二	外國地理、地文ノ大要
博 物	四	動物、植物、礦物、人身生理		
物理及化學			四	物性、力、熱、重要ナル無機物
英 語	四	讀方、譯解、習字	四	同上
圖 畫	四	自在畫、用器畫	四	同上
體 操	二	體操、教練	二	同上
作 業			五	實修準備作業
計	三〇		三六	

第二號表

臺灣工業學校本科學科目ノ程度及毎週教授時數表

第三章 臺灣の教育

學科目	機械科		
	第一學年	第二學年	第三學年
修身	一 道德ノ要旨、工業者ノ心得	一 同上	一 同上
國語	四 講讀、文法、作文	三 講讀、作文	二 同上
數學	六 代數、幾何	二 三角法	一 工業數學
物理及化學	三 音、光、電氣、重要ナル有機物		
英語	四 讀方、譯解、習字	三 同上	三 同上
第二外國語		三 支那語又ハ馬來語ノ會話	三 同上
體操	二 體操、教練	二 同上	二 同上
材料及工作法	三 機械用材料、工作法	二 工作法	一 製鐵法
應用力學		三 力學、機構學	二 機構學、物質強弱論
發動機及製造用機械		三 汽機、汽機	四 瓦斯及石油機關、水力機、製造用機械
電氣工學			二 電池、電機及器具、電燈、電氣鐵道
製圖	四 臨寫圖、透寫圖	六 機械製圖、見取圖	六 見取圖、機械設計及製圖
實修	一二 鍛工、鑄工、仕上工、木型工	一一 鍛工、鑄工、仕上工	一二 同上、機構取扱及實驗
計	三九	三九	三九

學科目	木工科		
	第一學年	第二學年	第三學年
修身	一 道德ノ要旨、工業者ノ心得	一 同上	一 同上
國語	四 講讀、文法、作文	三 講讀、作文	二 同上
數學	六 代數、幾何	二 三角法	一 工業數學
物理及化學	三 音、光、電氣、重要ナル有機物		
英語	四 讀方、譯解、習字	三 同上	三 同上
第二外國語		三 支那語又ハ馬來語ノ會話	三 同上
體操	二 體操、教練	二 同上	二 同上
材料及工具	三 土木用材料、工具用法		
施工法			二 施工法
應用機械學		二 力、機構	三 發動機、工事用機械
實修	一二 鍛工、鑄工、仕上工、木型工	一一 鍛工、鑄工、仕上工	一二 同上、機構取扱及實驗
計	三九	三九	三九

測量法	二	鎮測量、平板測量、羅盤測量
建築法	二	轉鏡儀測量、水準測量、地形測量、線路測量
土木工學	二	家屋構造法
製圖	四	道路、鐵道、河海
實修	六	見取圖、土木製圖
計	九	測量、煉瓦工、材料ノ試驗鑑定
計	三九	九 同上
測量法	一	三角測量、隧道測量、河川測量
建築法	六	河海、衛生工學、橋梁
土木工學	六	土木設計及製圖
製圖	九	同上
實修	九	同上
計	三九	三九

其ノ三

應用化學科

學科目	第一學年		第二學年		第三學年	
	時數	教授程度	時數	教授程度	時數	教授程度
修身	一	道德ノ要旨、工業者ノ心得	一	同上	一	同上
國語	四	講讀、文法、作文	三	講讀、作文	二	同上
數學	六	代數、幾何	二	三角法		
計	三九		三九		三九	

學科目	第一學年		第二學年		第三學年	
	時數	教授程度	時數	教授程度	時數	教授程度
物理及化學	六	音、光、電氣、無機化學	三	有機化學		
英語	四	讀方、譯解、習字	三	同上	三	同上
第二外國語			三	支那語又ハ馬來語ノ會話	三	同上
體操	二	體操、教練	二	同上	二	同上
礦物學	二	岩石及鑛石				
應用機械學			二	力、機構	四	發動機、電池、電機及器具、製法用機械
應用化學			六	製藥、酸及アルカリ、肥料、油脂、顏料、塗料、印刷物、石炭瓦斯及其ノ副産物、鐵油、木材、乾餾燃料、窯業、冶金	八	紙、セルロイド、纖維、製革、護謄、爆發物、芳香油、砂糖、澱粉、鹽造、電氣化學
製圖	四	臨寫圖、透寫圖	三	機械製圖、見取圖		
實修	一〇	定性分析、定量分析、製造實驗	一一	同上	一六	工業分析、製造實驗
計	三九		三九		三九	

### 第九項 盲啞教育

盲啞教育に關しては此期に於て別に制度上の變更はなかつた。

### 第十項 感化教育

感化院に關しては此期に於て別に述べべきことはなかつた。

### 第十一項 私立學校に對する監督

私立學校に關しては此期に於て別に制度上の變更はなかつた。

### 第十二項 教科用圖書

大正八年臺灣教育令の制定以後本島人に對する教育制度が系統的に確立せられたが、此期に於ける本島人に對する初等普通教育機關と教科書との關係に就ては、公學校の教科書は總督府編纂のものを使用せしむるを本則とする主義に少しも渝る所はない。

本島人に對する男女高等普通教育機關と教科書との關係に就ては、大正八年四月二十日臺灣總督府令第四十六號臺灣公立高等普通學校規則第十八條及同日臺灣總督府令第四十七號臺灣公立女子高等普通學校規則第二十二條には、公立高等普通學校（公立女子高等普通學校）ノ教科用圖書ハ臺灣總督府ノ編纂シタルモノヲ使用スヘシ

前項ノ教科用圖書ナキトキハ學校長ハ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ前項以外ノ圖書ヲ使用スルコトヲ得と規定し、高等普通教育機關に在つても國定教科書使用を本則とするの趣旨を明にして居る。

本島人に對する實業教育機關と教科書との關係に就ては、

大正八年四月二十日臺灣總督府令第四十八號臺灣公立簡易實業學校規則第十四條には

第十四條 簡易實業學校ノ教科用圖書ハ臺灣總督府ノ編纂シタルモノヲ使用スヘシ

前項ノ教科用圖書ナキトキハ廳長ハ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ前項以外ノ圖書ヲ使用スルコトヲ得

とあり、又大正八年五月四日臺灣總督府令第六十六號臺灣公立實業學校規則第七條には

第七條 公立實業學校ノ教科用圖書ハ臺灣總督府ノ編纂シタルモノヲ使用スヘシ

前項ノ教科用圖書ナキトキハ學校長ハ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ前項以外ノ圖書ヲ使用スルコトヲ得とあつて、實業學校に於ても亦國定教科書使用を本則として居る。

又師範學校に於ても國定教科書使用を本則として居ることは、大正八年三月三十一日臺灣總督府令第二十三號臺灣總督府師範學校規則第十七條に公立實業學校規則第七條と全く同様のことを規定せるに依り明である。

次に内地人に對する初等普通教育機關及高等普通教育機關と教科書との關係は、此期に於ても前期に於て述べた所と別に變りはない。

右の如き狀勢であるので總督府に於ても獨り公學校用のもののみならず、高等普通學校用、女子高等普通學校用、師範學校用、實業學校用のものを編纂することとなつた。

總督府に於て編修する教科書の拂下に關しては、

大正十年四月一日臺灣總督府令第六十四號を以て左の如く從來の規程に代るべき臺灣總督府出版學校用圖書拂下規則が定められた。

臺灣總督府出版學校用圖書拂下規則左ノ通相定ム

臺灣總督府出版學校用圖書拂下規則

- 第一條 臺灣總督府ニ於テ出版シタル學校教科用圖書及參考用圖書ハ本令ニ依リ拂下ヲ爲スヘシ  
拂下ヲ爲ス圖書及定價ハ之ヲ告示ス
- 第二條 前條ノ圖書ハ圖書販賣人ニ拂下ケ圖書販賣人ハ之ヲ需用者ニ販賣スルモノトス但シ知事又ハ廳長ニ於テ必用ト認ムルトキハ直接需要者ニ拂下ヲ爲スコトヲ得
- 第三條 圖書販賣人タラムトスル者ハ管轄州知事又ハ廳長ニ願出テ許可ヲ受クヘシ其ノ廢業シタルトキハ遲滯ナク管轄州又ハ廳ニ届出ツヘシ
- 圖書販賣人タルヘキ者ハ知事又ハ廳長ニ於テ必要ト認ムル要件ヲ具備スル者ニ限り各縣、郡及市ニ一人ヲ許可ス
- 第四條 圖書販賣人ニ爲ス拂下ハ其ノ圖書ノ定價ノ十分ノ一ヲ減額シタル價格ニ依ル
- 第二條但書ニ依リテ爲ス拂下ハ定價ニ依ル  
圖書ハ代金納付ノ上交付スヘシ
- 第五條 教科用圖書ノ改正アリタルトキハ圖書販賣人ノ所持スル舊教科用圖書ニシテ蟲害又ハ汚損ナキモノニ限り改正教科用圖書ト交換スルコトアルヘシ
- 前項ノ場合ニ於テハ舊教科用圖書ハ定價ノ半額ノ價格ヲ有スルモノトシテ計算ス

第六條 圖書販賣人ハ左ノ各號ヲ遵守スヘシ

- 一 店舗ニハ左ノ様式ニ依ル標札ヲ掲クヘシ

臺灣總督府	出版	學校用圖書販賣所
現住所	氏名	

- 二 拂下ヲ受ケタル圖書ハ定價以上ノ價格ヲ以テ販賣スルコトヲ得ス

- 三 拂下ヲ受ケタル圖書ノ返納又ハ引換ヲ受ケムトスル場合ハ其ノ事由ヲ具シ願出ツヘシ

- 四 拂下ヲ受ケタル圖書ハ帳簿ヲ備ヘ受拂ノ願末ヲ明確ニ記載スヘシ

- 第七條 知事又ハ廳長ハ圖書販賣人ニシテ前條各號ノ一ニ背キ若ハ第三條第二項ニ規定シタル要件ヲ闕キタリト認ムルトキ又ハ圖書販賣人タルニ不適當ノ行爲若ハ不正ノ行爲アリト認ムルトキハ圖書販賣人タルノ許可ヲ取消スコトヲ得

- 第八條 圖書販賣人廢業シタル場合又ハ其ノ許可ヲ取消サレタル場合ニ於テ販賣殘ノ圖書アルトキハ知事及廳長ハ教科用圖書ニシテ蟲害又ハ汚損ナキモノニ限り拂下價格ノ半額ヲ拂戻シテ返納ヲ命スルコトアルヘシ

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正二年府令第六十四號臺灣總督府出版學校用圖書拂下規則ハ之ヲ廢止ス

本令施行ノ際現ニ圖書販賣人タル者ニ限り大正十一年三月三十一日迄本令ニ依リ許可ヲ受ケタル者ト看做ス

### 第十三項 學校衛生

大正八年五月三日左記臺灣總督府令第六十四號及第六十五號が發せられた。

○臺灣總督府令第六十四號

臺灣公立高等女學校ハ明治四十三年四月府令第二十九號臺灣小學校兒童身體檢查規程ニ準シ毎年四月生徒ノ身體檢查ヲ施行スヘシ但シ該規程第二條身體檢查事項中體格ノ次ニ「視力」、眼疾ノ次ニ「聽力」ヲ加ヘ身體檢查票ノ體格ノ次ニ「視力」左、眼疾ノ次ニ「聽力」ノ各一欄ヲ設ケ視力ハ中心視力ヲ兩眼ニ就キテ各別ニ檢查シ聽力ハ其ノ障害ノ有無ヲ檢查スヘシ

學校長ニ於テ必要ト認ムルトキハ生徒ニ就キ臨時身體檢查ノ全部若ハ一部ヲ施行スルコトヲ得

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○臺灣總督府令第六十五號

臺灣公立高等女學校ニ併置ノ臺灣女子高等小學校兒童ノ身體檢查ニ關シテハ明治四十三年四月府令第二十九號臺灣小學校兒童身體檢查規程ヲ準用ス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正八年六月八日左記臺灣總督府令第八十五號が發せられた。

臺灣總督府高等商業學校、臺灣總督府農林專門學校及臺灣總督府商業專門學校ノ生徒ノ身體檢查ニ關シテハ大正元年十二月府令第五十二號ヲ準用ス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十年四月十日臺灣總督府令第六十六號を以て左の如く學校傳染病豫防規則が定められた。

學校傳染病豫防規則 正ノ通相定ム

學校傳染病豫防規則

第一條 學校ニ於ケル傳染病豫防ニ關シテハ本令及時ニ規定スルモノノ外大正八年文部省令第二十九號學校傳染病豫防規程ヲ準用ス但シ同令中第二條第二項及第三項第六條及第九條ハ之ヲ準用セス又同令中市區町村長ノ職務ハ監督官廳之ヲ行フ

第二條 學校内、學校所在地及其ノ近傍又ハ生徒兒童等ノ通學區域内ニ於テ第一類又ハ第二類ノ傳染病發生シ必要アリト認ムルトキハ學校長ニ於テ全校又ハ一部ヲ閉鎖スヘシ但シ臨時休業ノ手續ニ關シテハ當該學校規則ノ規定ニ依ルヘシ

第三條 學校ノ寄宿舎ニ於テ第一類ノ傳染病發生シタルトキハ別記様式ニ依リ官立學校長ニ在リテハ臺灣總督ニ、







大正八年四月十九日勅令第二百二十八號を以て左の如く高等官官等俸給令中に改正が行はれた。これは農林専門學校の新設及工業學校教諭の中一人を奏任となし得ることとなつたに伴ふものである。(抄)

高等官官等俸給令中左ノ通改正ス

別表第一表中臺灣總督府ノ部中港務醫官ノ項ノ次ニ左ノ如ク加フ

農林専門學校教授	同	上	同	上	同	上
----------	---	---	---	---	---	---

同表臺灣總督府ノ部中商業學校教諭ノ項ノ次ニ左ノ如ク加フ

工業學校教諭	同	上	同	上	同	上
--------	---	---	---	---	---	---

別表第五表中

臺灣公立實業學校校長

ヲ

臺灣公立實業學校校長

ニ、

臺灣總督府商業學校教諭

ヲ

臺灣總督府商業學校教諭

ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正九年八月勅令第二百五十七號を以て高等官官等俸給令中の改正、勅令第二百五十八號を以て判任官俸給令中の改正、勅令第二百五十九號を以て文武判任官等級令中の改正が行はれた。これは世界大戰後に於ける物價騰貴に伴ふ一般官吏増俸に關するものである。右三勅令の正文は内地に於ける學校等職員關係中官立學校等職員のことを説く際に之を掲げたから、此處には之を省略し、唯舊令と新令とに依る臺灣の學校等職員の官等俸給の比較のみを左に掲げる。

官名	官等俸給		俸		給	
	從	前	從	前	改	正
高等商業學校校長	至自二四等	至自二四等	自奏任五級	三、七〇〇〇圓	自奏任五級	三、二〇〇〇圓
高等商業學校教授	至自三九等	至自三七等	自十二級	三、〇七五〇〇圓	自十二級	四、一五〇〇〇圓
醫學專門學校校長	至自二四等	至自二四等	自奏任五級	三、七〇〇〇圓	自奏任五級	五、二〇〇〇圓
醫學專門學校教授	至自三九等	至自三七等	自十二級	三、〇七五〇〇圓	自十二級	四、一五〇〇〇圓
醫學專門學校助教授	至自五八等	至自五九等	自一八級	二、〇七五〇〇圓	自一八級	三、一〇〇〇〇圓
商業專門學校校長	至自三七等	至自三七等	自一五級	三、〇〇〇〇圓	自一五級	四、三〇〇〇圓
商業專門學校教授	至自四八等	至自四八等	自一八級	二、五〇〇〇圓	自一八級	三、一〇〇〇圓
農林專門學校校長	至自四八等	至自四八等	自一八級	二、五〇〇〇圓	自一八級	三、一〇〇〇圓
農林專門學校教授	至自三七等	至自三七等	自一八級	二、五〇〇〇圓	自一八級	四、一〇〇〇圓



九	級	俸	三	十	四	五	十	四
十	級	俸	二	十	四	四	十	四
十	級	俸	二	十	四	四	十	四

大正十年四月二十五日勅令第四百一十一號を以て左の如く高等官官等俸給令中に改正が行はれた。これは官立中等諸學校を公立に移すこととなつた結果である。

高等官官等俸給令中左ノ通改正ス

第十四條中「臺灣總督府中學校長」ヲ「臺灣公立中學校長」ニ、「臺灣總督府高等女學校長」ヲ「臺灣公立高等女學校長」ニ改メ「臺灣公立女子高等普通學校長」ノ次ニ「臺灣實業學校長」ヲ加フ

第十五條中「臺灣總督府中學校教諭」ヲ「臺灣公立中學校教諭」ニ、「臺灣總督府商業學校教諭」ヲ「臺灣實業學校教諭」ニ改メ「臺灣總督府高等女學校教諭」及「臺灣總督府工業學校教諭」ヲ削ル

第一表臺灣總督府ノ部中工業學校長ノ項ヲ削ル

第五表中「臺灣總督府工業學校長」ヲ削ル

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

其他内地人にして官立公立學校職員たる文官が本俸の外に在勤加俸を給せらるることに關しては、

大正九年九月十五日勅令第三百九十九號を以て左の如く朝鮮臺灣滿洲及樺太在勤文官加俸令中に改正が行はれた。

朝鮮臺灣滿洲及樺太在勤文官加俸令中左ノ通改正ス

第二條中「關東都督」ヲ「關東長官」ニ、「四十圓」ヲ「七十圓」ニ改ム

附則

本令ハ大正九年八月分ヨリ之ヲ適用ス

尙ほ恩給退隱料に關する加算年の關係即ち國庫より俸給の支給を受けずして、然も官吏たる公立學校職員の恩給法に依る恩給を受けずして特別の規定に依り退隱料を受くる關係に就きては、此期に於て別に變つたことはなかつた。

### 第十六項 教育行政機關

#### 第一節 中央教育行政機關

大正八年六月二十八日勅令第三百一十一號を以て左の如く臺灣總督府官制中に改正が行はれた。

臺灣總督府官制中左ノ通改正ス

第十七條 民政部ニ左ノ六局及一部ヲ置ク

内務局

財務局

遞信局

第三章 臺灣の教育

第三編 新領土其他に於ける教育

一〇四四

殖産局

土木局

警務局

法務部

遞信局ニ測候所及燈臺ヲ附屬セシム

殖産局ニ獸疫血清製造所ヲ置キ獸疫血清ノ製造及配付ニ關スル事務ヲ掌ラシム

第十八條中「總督官房各局署及各部」ヲ「總督官房、各局及部」ニ改ム

第十九條中「四人」ヲ「六人」ニ、「十四人」ヲ「十六人」ニ、「蕃務警視專任二人」ヲ「蕃務警視專任三人」ニ、「視學官專任一人」ヲ「視學官專任二人」ニ、「稅務官專任二人」ヲ「財務局事務官專任三人」ニ、「四十八人」ヲ「四十九人」ニ、「海軍官專任二人」ヲ「海軍官專任三人」ニ、「四百三十人」ヲ「四百六十一人」ニ改メ「警視總長一人勅任」ヲ削ル

第二十條及第二十七條中「各局署及各部」ヲ「各局及部」ニ改ム

第二十二條 總督府ニ警務總長ヲ置キ警務局長ヲ以テ之ニ充ツ

警務總長ハ總督及民政長官ノ命ヲ承ケ警察及衛生事務ノ執行ニ關シ廳長及警務官以下ノ警察官ヲ指揮監督ス

第二十三條 法務部ニ部長ヲ置キ臺灣總督府高等官ヲ以テ之ニ充ツ

法務部長ハ總督及民政長官ノ命ヲ承ケ部務ヲ掌理ス

第二十四條及第二十五條中「總督官房又ハ各局署及各部」ヲ「總督官房、各局又ハ部」ニ改ム

第二十六條中「警察本署」ヲ「警務局」ニ、「警視總長」ヲ「警務總長」ニ改ム

第二十六條ノ二及第二十六條ノ三、第三十一條ノ二及第三十一條ノ三中「學務部」ヲ「內務局」ニ改ム

第二十六條ノ四中「稅務官」ヲ「財務局事務官」ニ、「稅務」ヲ「財務局ノ事務」ニ改ム

第二十七條ノ二中「通信局」ヲ「遞信局」ニ改ム

第二十九條ノ二及第三十一條中「警察本署」ヲ「警務局」ニ改ム

第三十一條ノ四中「及燈臺」ヲ「、燈臺及獸疫血清製造所」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

右の改正に依り民政部に財務、通信、殖産、土木の四局、警察本署、蕃務本署及地方、法務、學務の三部を置く從來の制度が改められ、民政部に内務、財務、遞信、殖産、土木、警務の六局及法務の一部が置かることとなり、學務部は廢止せられ内務局内に學務及編修の二課が設けられた。學務課に於ては教育に關する一切の事務を處理し、編修課に於ては圖書の編修、檢定及著譯に關する事項、圖書の出版及拂下に關する事項を掌つた。尙ほ此改正に依り視學官の定員が増加せられた。

同日又勅令第三百十六號を以て左の如く高等官官等俸給令中に改正が行はれた。(抄)

高等官官等俸給令中左ノ通改正ス

第十六條中「臺灣總督府視學官」ヲ「臺灣總督府財務局事務官」ニ改ム

第十七條中「朝鮮總督府稅關鑑定官」ノ次ニ「臺灣總督府視學官」ヲ加フ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正八年八月二十日勅令第三百九十三號を以て左の如く臺灣總督府官制中に改正が行はれた。

臺灣總督府官制中左ノ通改正ス

第二條 總督ハ親任トス

第三條 總督ハ内閣總理大臣ノ監督ヲ承ケ諸般ノ政務ヲ統理ス

第三條ノ二 總督ハ安寧秩序ノ保持ノ爲必要ト認ムルトキハ其ノ管轄區域内ニ於ケル陸海軍ノ司令官ニ兵力ノ使用ヲ請求スルコトヲ得

第四條 總督陸軍武官ナルトキハ臺灣軍司令官ヲ兼ネシムルコトヲ得

第六條 削除

第七條 削除

第十四條中「副官二人及」及同條第三項ヲ削ル

第十五條 削除

第十六條 削除

第十七條中「民政部ニ」ヲ「總督府ニ總督官房ノ外」ニ改ム

第十九條乃至第二十三條中「民政長官」ヲ「總務長官」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際臺灣總督府民政長官ノ職ニ在ル者別ニ辭令書ヲ交付セラレサルトキハ臺灣總督府總務長官ニ同官等俸給ヲ以テ任セラレタルモノトス

別ニ定ムルモノヲ除クノ外他ノ勅令中民政長官トアルハ臺灣總督府總務長官トス

前に述べた如く臺灣には當初より武官總督の制を布かれたのであるが、世界大戰の後を承けて島民の思想にも動搖を來したる關係もあり、領有以來茲に二十年時勢の推移に應じて施政の方針にも多少の變更を加ふるの必要を生じ、總督は陸海軍大中將を以て之に任じ、文武の權を併せ有せしむる從來の制を改め、總督は専ら文事的行政を統轄することとし、軍事に關しては別に司令官を置くの制とせられたのである。同時に朝鮮に於ても同様の趣旨の改正が行はれたのであつた。

同日又勅令第三百九十九號を以て左の如く高等官官等俸給令中に改正が行はれた。(抄)

高等官官等俸給令中左ノ通改正ス

第八條中「臺灣總督府民政長官」ヲ「臺灣總督府總務長官」ニ、(中略)改メ(後略)

同表臺灣總督府ノ部中「民政長官」ヲ「總務長官」ニ改ム

附則

大正九年八月勅令第二百五十七號を以て高等官官等俸給令中の改正、勅令第二百五十八號を以て判任官俸給令中の改正、勅令第二百五十九號を以て文武判任官等級令中の改正が行はれた。これは世界大戦後に於ける物價騰貴に伴ふ一般官吏増俸に關するものである。右三勅令の正文は内地に於ける學校等職員關係中官立學校等職員のことを説く際に之を掲げたから、此處には之を省略し、唯舊令と新令とに依る臺灣總督府職員の官等俸給の比較のみを左に掲げる。尙ほ臺灣に於ける地方廳職員の分も序に此處に之を掲げることとする。

官名	官等俸給		官等俸給	官等俸給
	従前	改正		
臺灣總督	親任	親任	七、五〇〇圓	七、五〇〇圓
臺灣總務局長	至自一二等	至自一二等	五、〇〇〇圓	六、五〇〇圓
臺灣各局長	二等	二等	三、七〇〇圓	五、二〇〇圓
臺灣參事	至自二七等	自奏任十級 至勅任十級	三、〇〇〇圓	五、二〇〇圓
臺灣秘書	至自三七等	至自十級	三、〇〇〇圓	四、五〇〇圓

臺灣總督	至自三七等	至自三七等	三、〇〇〇圓	四、五〇〇圓
臺灣總務局長	至自四八等	至自三七等	二、七五〇圓	四、一五〇圓
臺灣各局長	至自三七等	至自三七等	二、〇〇〇圓	三、五〇〇圓
臺灣參事	至自三七等	至自三七等	一、七五〇圓	三、〇〇〇圓
臺灣秘書	至自三八等	至自三八等	一、七五〇圓	三、〇〇〇圓

大正九年九月一日勅令第三百四十八號を以て左の如く臺灣總督府官制中に改正が行はれた。

臺灣總督府官制中左ノ通改正ス

第一條中「臺灣及澎湖列島」ヲ「臺灣」ニ改ム

第十條中「廳長」ヲ「知事又ハ廳長」ニ改ム

第十七條ニ左ノ一項ヲ加フ

殖産局ニ營林所及其ノ出張所ヲ置キ總督ノ指定スル國有林野ノ造林ニ關スル事務、其ノ國有林野ノ産物ノ採取、製造、加工及販賣ニ關スル事務並之ニ附帶スル鐵道、道路及其ノ鐵道ニ依ル貨客ノ運輸營業ニ關スル事務ヲ掌ラシム

第十九條中「十六人」ヲ「二十人」ニ、「四十九人」ヲ「五十人」ニ、「四百六十一人」ヲ「四百七十七人」ニ改メ

「警務官 專任三人 奏任」及「警視 專任二人 奏任」ヲ削リ「財務局事務官 專任三人 奏任」ノ次ニ「殖産局

第三編 新領土其他に於ける教育

事務官 専任一人 奏任」ヲ加フ

第二十二條 警務局長ハ總督ノ特ニ命スル場合ニ限り警察事務ノ執行ニ關シ總督及總務長官ノ命ヲ承ケ廳長、警務部長及警視以下ノ警察官吏ヲ指揮監督ス

第二十六條 蕃務警視ハ警務局ニ屬シ上官ノ命ヲ承ケ蕃務ヲ掌ル

蕃務警視ハ蕃務警察事務ノ執行ニ關シ警務局長ノ命ヲ承ケ警部以下ノ警察官吏ヲ指揮監督ス

第二十六條ノ五 殖産局事務官ハ殖産局ニ屬シ上官ノ命ヲ承ケ殖産局ノ事務ヲ掌ル

第二十九條ノ二ヲ削ル

第三十一條中「其ノ事務」ヲ「蕃務」ニ改ム

第三十一條ノ四中「及獸疫血清製造所」ヲ「獸疫血清製造所、營林所及營林所出張所」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

臺灣總督府營林局官制ハ之ヲ廢止ス

本令施行ノ際臺灣總督府營林局ノ技師、書記又ハ技手ニシテ現ニ其ノ職ニ在ル者別ニ辭令書ヲ交付セラレサルトキハ各臺灣總督府ノ技師、屬又ハ技手ニ同官等俸給ヲ以テ任セラレタルモノトス

大正十年二月七日勅令第十八號を以て左の如く臺灣總督府官制中に改正が行はれた。

臺灣總督府官制中左ノ通改正ス

第十九條中「二十人」ヲ「二十四人」ニ、「編修官専任一人」ヲ「編修官専任二人」ニ、「財務局事務官専任三人」ヲ「財務局事務官専任二人」ニ、「五十人」ヲ「五十三人」ニ、「四百七十七人」ヲ「五百五人」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

右の改正に依り編修官の定員が増加せられた。

大正十年八月二日勅令第三百六十號を以て左の如く臺灣總督府官制中に改正が行はれた。

臺灣總督府官制中左ノ通改正ス

第十七條ニ左ノ一項ヲ加フ

殖産局ニ度量衡所ヲ置キ度量衡器ノ製造、修理、販賣及取締其ノ他ノ度量衡及計量ニ關スル事務ヲ掌ラシム

第十九條中「二十四人」ヲ「二十五人」ニ、「蕃務警視 専任三人」ヲ「警視 専任二人」ニ、「五十三人」ヲ「四十六人」ニ、

「屬

警部

視學

編修書記

技手

通譯

専任五百五人

判任」ヲ



第三編 新領土其他に於ける教育

「屬」 專任三百五十人 判任

警部 專任十二人 判任

視學 專任二人 判任

編修書記 專任六人 判任

技手 專任二百二十六人 判任

通譯 專任一人 判任

「十九人」ヲ「二十二」ニ改ム

第二十六條中「蕃務警視」ヲ「警視」ニ改ム

第三十一條ノ四中「及營林所出張所」ヲ「營林所出張所及度量衡所」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第二節 地方教育行政機關

大正八年八月十八日勅令第三百八十二號を以て左の如く臺灣總督府地方官官制中に改正が行はれた。

臺灣總督府地方官官制中左ノ通改正ス

「條中「十五人」ヲ「二十四人」ニ、「十四人」ヲ「十七人」ニ、

「屬

警部

視學 專任千四百十人判任」ヲ

技手

通譯

警部補

「屬

警部

警部補

視學

技手

通譯

「屬

警部

警部補

視學

技手

通譯

「屬

警部

警部補

視學

技手

通譯

「屬

警部

大正九年七月二十七日勅令第二百十八號を以て左の如く臺灣總督府地方官官制が改正せられた。

臺灣總督府地方官官制

第一條 臺灣ニ左ノ州及廳ヲ置ク

第三章 臺灣の教育

臺北州  
新竹州  
臺中州  
臺南州  
高雄州  
臺東廳  
花蓮港廳

州及廳ノ位置及管轄區域ハ臺灣總督之ヲ定ム  
第二條 州及廳ニハ通シテ左ノ職員ヲ置ク

知事	五人	勅任
廳長	二人	奏任
事務官	十人	奏任
理事官	專任二十九人	奏任
警視	專任二十一人	奏任
技師	專任十九人	奏任
視學	專任十二人	判任
屬	專任四百六十二人	判任

警部	專任二百六十一人	判任
技手	專任百八十六人	判任
通譯	專任二十人	判任
警部補	專任二百九十八人	判任
稅務吏	專任百六十二人	判任
森林主事	專任百四十二人	判任

前項職員ノ中知事、事務官及技師ハ州ニ、廳長ハ廳ニ之ヲ置ク

第三條 理事官ハ臺北州及臺南州ニ在リテハ各專任六人、其ノ他ノ州ニ在リテハ各專任五人、廳ニ在リテハ各專任一人ヲ以テ定員トス

警視ニシテ各州又ハ各廳ニ在勤スル者ハ專任一人、支廳長ニ充ツル者ハ三人、警察署長ニ充ツル者ハ四人、郡ニ配置スル者ハ七人ヲ以テ定員トス

技師ハ臺北州ニ在リテハ專任五人、臺中州及臺南州ニ在リテハ各專任四人、其ノ他ノ州ニ在リテハ各專任三人ヲ以テ定員トス

前條ニ掲クル判任官ノ各州及各廳ニ於ケル定員ハ臺灣總督之ヲ定ム

第四條 高等官官等俸給令第二十三條第三項ノ規定ニ依リ俸給最低額以下ヲ受クル技師及判任官俸給令第六條ノ規定ニ依リ俸給最低額以下ヲ受クル技手ハ前二條ノ定員ノ外トス

第五條 知事又ハ廳長ハ臺灣總督ノ指揮監督ヲ承ケ法令ヲ執行シ部内ノ行政事務ヲ管理ス

第六條 知事又ハ廳長ハ部内ノ行政事務ニ付其ノ職權又ハ特別ノ委任ニ依リ管内一般又ハ其ノ一部ニ州令又ハ廳令ヲ發スルコトヲ得

知事ハ其ノ發スル命令ニ二月以下ノ懲役若ハ禁錮、拘留、七十圓以下ノ罰金又ハ科料ノ罰則ヲ附スルコトヲ得  
廳長ハ其ノ發スル命令ニ拘留又ハ科料ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

第七條 知事又ハ廳長ハ管内ノ靜謐ヲ維持スル爲兵力ヲ要スルトキハ之ヲ臺灣總督ニ具狀スヘシ但シ非常急變ノ場合ニ際シテハ直ニ當該地方ノ陸海軍ノ司令官ニ兵力ノ使用ヲ請求スルコトヲ得

第八條 知事又ハ廳長ハ所部ノ官吏ヲ指揮監督シ奏任官ノ功過ヲ臺灣總督ニ具狀ス  
判任官ノ進退ハ知事ハ自ラ之ヲ行ヒ廳長ハ臺灣總督ニ之ヲ具狀ス

第九條 知事ハ郡守、市尹又ハ警察署長ノ爲ス處分ニシテ成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ處分ヲ取消シ又ハ停止スルコトヲ得

第十條 知事事故アルトキハ官等ノ順序ニ從ヒ理事官其ノ職務ヲ代理ス

廳長事故アルトキハ官等ノ順序ニ從ヒ理事官又ハ廳在勤ノ警視其ノ職務ヲ代理ス  
前二項ノ規定ニ依リ職務ヲ代理スル者ナキ場合ニ於テハ臺灣總督ハ當該ノ州又ハ廳ノ高等官ノ一人ヲシテ其ノ職務ヲ代理セシム

知事又ハ廳長ハ其ノ職權ニ屬スル事務ノ一部ヲ部下ノ官吏ヲシテ臨時代理セシムルコトヲ得

第十一條 知事ハ其ノ職權ニ屬スル事務ノ一部ヲ郡守、市尹又ハ警察署長ニ委任スルコトヲ得

第十二條 州ニ知事官房、内務部及警察部ヲ置ク其ノ事務ノ分掌ハ臺灣總督之ヲ定ム

廳ニ於ケル事務ノ分掌ハ臺灣總督之ヲ定ム

第十三條 事務官ハ内務部又ハ警察部ノ部長ト爲ル知事ノ命ヲ承ケ部ノ事務ヲ掌理シ部下ノ官吏ヲ指揮監督ス

第十四條 警務部長ハ警察及衛生ノ事務ノ執行ニ關シ知事ノ命ヲ承ケ郡守、警視、警部、警部補及巡查ヲ指揮監督ス

第十五條 理事官ハ上官ノ命ヲ承ケ事務ヲ掌ル

第十六條 警視ハ上官ノ命ヲ承ケ警察及衛生ノ事務ヲ掌リ部下ノ警部、警部補及巡查ヲ指揮監督ス

第十七條 技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル

第十八條 視學ハ上官ノ指揮ヲ承ケ學事ノ視察其ノ他教育ニ關スル事務ニ從事ス

第十九條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第二十條 警部ハ上官ノ指揮ヲ承ケ警察及衛生ノ事務ニ從事シ部下ノ警部補及巡查ヲ指揮監督ス

第二十一條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ從事ス

第二十二條 通譯ハ上官ノ指揮ヲ承ケ通譯ニ從事ス

第二十三條 警部補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ警察及衛生ノ事務ニ從事シ部下ノ巡查ヲ指揮監督ス

第二十四條 稅務吏ハ上官ノ指揮ヲ承ケ徵稅ニ關スル事務ニ從事ス

第二十五條 森林主事ハ上官ノ指揮ヲ承ケ林野ノ取締及保護ニ從事ス

第二十六條 州及廳ニ警察醫ヲ置ク奉任官又ハ判任官ノ待遇トス

警察醫ノ定員ハ州及廳ヲ通シテ奏任官待遇者ニ在リテハ六人以内、判任官待遇者ニ在リテハ八人以内トシ其ノ各州及各廳ニ於ケル定員ハ臺灣總督之ヲ定ム

警察醫ハ上官ノ命ヲ承ケ警察及衛生ニ關スル醫務ニ従事ス

第二十七條 州及廳ニ巡查ヲ置ク判任官ノ待遇トス

巡查ニ關スル規程ハ臺灣總督之ヲ定ム

第二十八條 廳長ハ廳ノ事務ヲ分掌セシムル爲臺灣總督ノ認可ヲ受ケ支廳ヲ置クコトヲ得

支廳長ハ警視又ハ警部ヲ以テ之ニ充ツ

支廳長事故アルトキハ上官吏其ノ職務ヲ代理ス

第二十九條 市ニ警察署ヲ置ク

知事ハ必要アリト認ムルトキハ警察署ノ下ニ警察分署ヲ置クコトヲ得

警察署ノ名稱、位置及管轄區域ハ臺灣總督之ヲ定ム

警察分署ノ名稱、位置及管轄區域ハ知事之ヲ定ム

第三十條 警察署長ハ警視、警察分署長ハ警部ヲ以テ之ニ充ツ

警察署長又ハ警察分署長ハ上官ノ指揮監督ヲ承ケ部内ノ警察及衛生ノ事務ヲ掌理シ部下ノ職員ヲ指揮監督ス

第三十一條 知事ハ徵稅ニ關スル事務ヲ分掌セシムル爲臺灣總督ノ認可ヲ受ケ稅務出張所ヲ置クコトヲ得

稅務出張所長ハ理事官又ハ屬ヲ以テ之ニ充ツ

第三十二條 州ニ郡及市ヲ置ク

郡ノ數ハ四十七、市ノ數ハ三トス

郡及市ノ名稱、位置及管轄區域ハ臺灣總督之ヲ定ム

第三十三條 郡及市ニハ通シテ左ノ職員ヲ置ク

郡守	四十七人	奏任
市尹	三人	奏任
理事官	專任三人	奏任
視學	專任五十人	判任
屬	專任四百人	判任
技手	專任五十人	判任

前項職員ノ中郡守ハ郡ニ、市尹及理事官ハ市ニ之ヲ置ク

第一項職員ノ外臺北市ニ技師專任一人ヲ置ク奏任トス

臺灣總督ハ州ノ警視、警部、警部補又ハ巡查ヲ郡ニ配置スルコトヲ得

第三十四條 各市ニ於ケル理事官ノ定員ハ專任一人トス

各郡及各市ニ於ケル視學、屬及技手ノ定員ハ臺灣總督之ヲ定ム

第三十五條 第四條ノ規定ハ郡及市ノ技師及技手ノ定員ニ付之ヲ準用ス

第三十六條 郡守又ハ市尹ハ知事ノ指揮監督ヲ承ケ法令ヲ執行シ部内ノ行政事務ヲ掌理シ所部ノ官吏ヲ指揮監督ス

郡守ハ警察及衛生ノ事務ニ關シ郡ニ配置セラレタル警視、警部、警部補及巡查ヲ指揮監督ス

第三十七條 郡守又ハ市尹ハ其ノ指揮監督スル判任官ノ進退ヲ知事ニ具狀ス

第三十八條 郡守ハ街庄長ノ爲ス處分ニシテ成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ處分ヲ取消シ又ハ停止スルコトヲ得

第三十九條 郡守又ハ市尹事故アルトキ其ノ職務ヲ代理スル官吏ハ知事之ヲ指定ス

郡守又ハ市尹ハ其ノ職權ニ屬スル事務ノ一部ヲ部下ノ官吏ヲシテ臨時代理セシムルコトヲ得

第四十條 郡又ハ市ニ於ケル事務ノ分掌ハ知事之ヲ定ム

第四十一條 市ノ理事官ハ市尹ノ命ヲ承ケ事務ヲ掌ル

第四十二條 市ノ技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル

第四十三條 郡又ハ市ノ視學ハ上官ノ指揮ヲ承ケ學事ノ視察其ノ他教育ニ關スル事務ニ從事ス

第四十四條 郡又ハ市ノ屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第四十五條 郡又ハ市ノ技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ從事ス

第四十六條 郡ニ街又ハ庄ヲ置ク但シ臺灣總督ノ指定スル蕃地ニハ之ヲ置カサルコトヲ得

臺灣總督ハ地方ノ狀況ニ依リ廳ニ街又ハ庄ヲ置クコトヲ得

街庄ノ名稱及管轄區域ハ臺灣總督之ヲ定ム

街ニ街長、庄ニ庄長ヲ置ク判任官ノ待遇トス但シ街長ハ十人ヲ限り之ヲ奏任官ノ待遇ト爲スコトヲ得

街庄長ハ上官ノ指揮監督ヲ承ケ街庄内ノ行政事務ヲ補助執行ス

街庄長ニ關スル規程ハ臺灣總督之ヲ定ム

附則

本令ハ大正九年九月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ街庄ニ關スル規程ハ同年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治四十二年勅令第二百十七號ハ大正九年九月三十日限り之ヲ廢止ス

別ニ定ムルモノヲ除クノ外他ノ勅令中臺灣總督府ノ廳ニ關スル規定ハ州又ハ廳ニ關スル規定トシ廳長ニ關スル規定

ハ知事又ハ廳長ニ關スル規定トス

右の改正に依り臺北、新竹、臺中、臺南、高雄の五州及臺東、花蓮港の二廳が置かるることとなつた。

州の行政官廳として知事、廳の行政官廳として廳長がある。州の管内には郡と市とがあり、郡の行政官廳として郡守、市の行政官廳として市尹がある。更に郡の管内に街庄があり、街庄の行政を掌る者として街庄長がある。廳の管内には郡も市も街庄もないのが本則であるが、臺灣總督は地方の狀況に依り廳に街又ハ庄を置くことを得る。尙ほ知事、廳長、郡守、市尹は官吏であるが、街庄長は官吏待遇である。尙ほ第四十六條の規定に依ると、街庄長は上官の指揮監督を承け、街庄内の行政事務を補助執行すとあつて單純なる補助機關に過ぎざるもの如くにも見ゆるが、第九條第一項には知事は郡守、市尹又は警察署長の爲す處分にして、成規に違ひ公益を害し又は權限を犯すものありと認むるときは其處分を取消し又は停止することを得とあり、第二項には廳長は街庄長の爲す處分に就ては前項の例に依り之を取消し又は停止することを得とあつて、既に街庄長が處分を爲す權限を有する以上は、之を一箇の行政廳と見るべきものと思はれる。要するに今回の地方官制の改正は、當時行はれた地方自治制度の整頓に依り上級自治體として州及廳地方費が認められ、下級自治體として市及街庄が認めらるることとなつたのと相應じたものである。即ち知事廳長は國の行政機關として國の地方行政区劃たる州又は廳の行政廳たると同時に、地方自治體の機關として自治體たる州又は廳地方費の行政

廳でもあり、市尹、街庄長は國の行政機關として國の地方行政區劃たる市又は街庄の行政廳たると同時に地方自治體たる市又は街庄の行政廳でもあるのである。獨り郡守は單に國の行政機關として國の地方行政區劃たる郡の行政廳たるのみで地方自治體の機關ではない。此の如く知事、廳長、市尹及街庄長は何れも二面的の職務を有するのであるが、地方官官制に於ては此等の者の國の行政機關としての働きのみに就て規定して居るのである。

右の如く知事、廳長、郡守、市尹及街庄長は何れも一般地方行政事務を管掌すると共に、地方教育行政事務を管掌する機關であるのである。

尙ほ州には内務部に教育課が設けられ、又州廳を通じて視學が置かれた。市には市尹の下に庶務課があり、庶務課内に教育係があつた。又市郡には視學が置かれた。

大正九年九月一日勅令第三百五十三號を以て左の如く高等官官等俸給令中に改正が行はれた。(抄)

高等官官等俸給令中左ノ通改正ス

第八條中(前略)「臺灣總督府醫學專門學校長」ノ次ニ「臺灣總督府州知事」ヲ加フ

第十四條中(前略)「臺灣總督府通信技師」ノ次ニ「臺灣總督府州事務官」ヲ加フ

第十五條中(前略)「臺灣總督府典獄」ノ次ニ「臺灣總督府州理事官」、(中略)「臺灣總督府廳理事官」、(中略)「臺灣總督府郡守」、「臺灣總督府市尹」及「臺灣總督府市理事官」ヲ加フ

別表第一表臺灣總督府ノ部中「營林局長」ヲ「州知事」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正九年十一月十日勅令第五百二十七號を以て左の如く臺灣總督府地方官官制中に改正が行はれた。

臺灣總督府地方官官制中左ノ通改正ス

第二條中「四百六十二人」ヲ「四百八十三人」ニ、「百八十六人」ヲ「百九十七人」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十年六月二十三日勅令第二百八十號を以て左の如く臺灣總督府地方官官制中に改正が行はれた。

臺灣總督府地方官官制中左ノ通改正ス

第二條中「四百八十三人」ヲ「五百四十三人」ニ、「百九十七人」ヲ「百九十八人」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十年九月十二日勅令第四百六號を以て左の如く臺灣地方待遇職員令が定められた。此規程は當初は直接教育事務に關係なき職員に關するものであつたが、後には教育事務に關する職員をも包含することとなつたので最初より之を述べる必要がある。

臺灣地方待遇職員令

第一條 地方産業ニ關スル事務又ハ技術ニ従事セシムル爲州費又ハ廳地方費ヲ以テ各州又ハ廳ニ通シテ左ノ職員ヲ置クコトヲ得

事務職員

産業主事 專任五人以内

奏任官待遇

産業書記 專任十五人以内

判任官待遇

技術職員

産業技師 專任二十人以内

奏任官待遇

産業技手 專任百人以内

判任官待遇

第二條 地方土木ニ關スル事務又ハ技術ニ従事セシムル爲州費又ハ廳地方費ヲ以テ各州又ハ廳ニ通シテ左ノ職員ヲ置クコトヲ得

事務職員

土木書記 專任十五人以内

判任官待遇

技術職員

土木技師 專任十人以内

奏任官待遇

土木技手 專任五十人以内

判任官待遇

第三條 地方衛生ニ關スル事務又ハ技術ニ従事セシムル爲州費又ハ廳地方費ヲ以テ各州又ハ廳ニ通シテ左ノ職員ヲ

置クコトヲ得

事務職員

衛生書記 專任十人以内

判任官待遇

技術職員

衛生技師 專任五人以内

奏任官待遇

衛生技手 專任七十人以内

判任官待遇

第四條 地方ニ於ケル物産検査ニ關スル事務ニ従事セシムル爲州費又ハ廳地方費ヲ以テ各州又ハ廳ニ通シテ左ノ職員ヲ置クコトヲ得

物産検査員 專任百五十人以内

判任官待遇

第五條 前四條ノ職員ノ各州及各廳ノ定員ハ臺灣總督之ヲ定ム

第六條 第七條ニ於テ準用スル地方待遇職員令第九條但書ノ規定ニ依リ俸給ヲ受ケス又ハ最低金額ヨリ低キ俸給ヲ

受クル第一條乃至第四條ノ職員ニシテ他ノ職務ニ従事スル者ノ員數ハ主トシテ従事スル事務又ハ技術ノ職員ノ定

員ノ内トシ其ノ他ノ職員ノ定員ノ外トス

第七條 第一條乃至第四條ノ職員ノ服務ニ關シテハ官吏服務規律ヲ準用シ其ノ任免、待遇、俸給及休職ニ關シテハ本令ニ規定スルモノノ外地方待遇職員令ヲ準用ス

第八條 前條ニ於テ準用スル地方待遇職員令第二條乃至第五條ノ規定ノ適用ニ付テハ臺灣教育令ニ依ル專門學校ハ之ヲ專門學校又ハ實業專門學校、臺灣教育令ニ依ル實業學校ハ之ヲ實業學校ト看做ス

第九條 朝鮮臺灣滿洲及樺太在勤文官加俸令ハ第一條乃至第四條ノ職員ニ之ヲ準用ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正八年勅令第三百七十號ハ之ヲ廢止ス

尙ほ地方教育行政事務に關與する地方自治體に關しては、

大正九年七月三十日左の如く律令第三號を以て臺灣州制(抄)、律令第四號を以て臺灣廳地方費令、律令第五號を以て臺灣市制(抄)、律令第六號を以て臺灣街庄制(抄)が定められ、從來の地方税規則は州制の附則に依り廢止せられた。

○律令第三號

臺灣州制

第一條 州ノ名稱及區域ハ國ノ行政區劃ニ依ル

第二條 州ハ法律、勅令又ハ律令ニ依リ州ニ屬セシメタル事務ヲ處理ス

○律令第四號

臺灣廳地方費令

第一條 臺東廳及花蓮港廳ノ管轄區域ヲ通シテ廳地方費ヲ設ク

廳地方費ハ臺灣總督之ヲ管理ス

第二條 廳地方費ニ關シテハ臺灣州制第二條、第五條、第十七條乃至第二十二條、第二十四條乃至第三十四條及第

四十一條ノ規定ヲ準用ス但シ同律令第二十八條及第四十一條中州知事トアルハ廳長トス

廳地方費ノ財務ニ關スル事項ハ臺灣總督之ヲ定ム

附則

本令施行ノ期日ハ臺灣總督之ヲ定ム

○律令第五號

臺灣市制

第一條 市ノ名稱及區域ハ國ノ行政區劃ニ依ル

第二條 市ハ法律、勅令又ハ律令ニ依リ市ニ屬セシメタル事務ヲ處理ス

○律令第六號

臺灣街庄制

第一條 街又ハ庄ノ名稱及區域ハ國ノ行政區劃ニ依ル

第二條 街庄ハ法律、勅令又ハ律令ニ依リ街庄ニ屬セシメタル事務ヲ處理ス

是に於て上級自治體として州及廳地方費、下級自治體として市街庄が認めらるることとなつた。州制、廳地方費令、市制、街庄制は何れも大正九年臺灣總督府令第四十三號を以て同年十月一日より施行せられた。

第三款 大正十一年改正臺灣教育令制定より

昭和七年末に至るまで



### 第一項 改正臺灣教育令の制定

前既に述べた如く大正八年臺灣教育令の制定に依り本島人に對する教育の制度が整頓せられ、初等普通教育、男子高等普通教育、女子高等普通教育、專門教育、師範教育及實業教育が系統的に認めらるるに至つたが、然も總ての教育機關を通じ之を内地人に對する教育に比して低度のものたるを免れず、且内地人に對する教育機關との間に連絡を缺けるを以て、例へば最高等普通教育を経て大學教育を受けんとし若は内地人と同様に專門教育を受けんとする者の如きは初めより内地の學校に學ばざるべからざる不便あり、從て本島人の間には之を以て殊更に教育上の差別待遇をなして彼等の向學心を抑壓せんとするものなりとして、自然不平不満の聲を聞くに至つたことも實際の事實であつた。

歐洲大戰後我新領土に於ける思想界は種々の影響を受けて多少動搖を來たせる所もあり、統治の方針も時勢の推移に應じて稍之を變更するの必要を見るに至つたので、朝鮮に於ても臺灣に於ても從來の武官總督制を改めて文官總督制と爲すこととせられたが、大正八年の末臺灣に於ける初代の文官總督として其任に當つた田健次郎は教育制度の改正に關しても種々研究する所あり、其結果制定せられたものが即ち大正十一年の改正臺灣教育令である。これは、鮮に於ける初代の文官總督たる齋藤實の手に依て改正朝鮮教育令が制定せられたのと同時であつたのである。

大正十一年二月六日勅令第二十號を以て左の如く臺灣教育令が制定せられ、從來の臺灣教育令は新令附則の規定に依て廢止せられた。

#### 臺灣教育令

第一條 臺灣ニ於ケル教育ハ本令ニ依ル

第二條 國語ヲ常用スル者ノ初等普通教育ハ小學校令ニ依ル

第三條 國語ヲ常用セサル者ニ初等普通教育ヲ爲ス學校ハ公學校トス

第四條 公學校ハ兒童ノ身體ノ發達ニ留意シテ之ニ德育ヲ施シ生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ授ケ國民タルノ性格ヲ涵養シ國語ヲ習得セシムルコトヲ目的トス

第五條 公學校ノ修業年限ハ六年トス但シ土地ノ情況ニ依リ之ヲ短縮スルコトヲ得

公學校ニ入學スルコトヲ得ル者ハ年齡六年以上ノ者トス

修業年限六年ノ公學校ニ修業年限二年ノ高等科ヲ置クコトヲ得

高等科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ修業年限六年ノ公學校ヲ卒業シタル者又ハ臺灣總督ノ定ムル所ニ依リ之ト同等

以上ノ學力アリト認メラレタル者トス

公學校ニ補習科ヲ置クコトヲ得

補習科ノ修業年限及入學資格ニ關シテハ臺灣總督ノ定ムル所ニ依ル

第六條 公學校ノ設立、廢止、教科、編制、設備及授業料等ニ關シテハ臺灣總督ノ定ムル所ニ依ル

第七條 入學資格ニ關シテハ修業年限六年ノ公學校ノ卒業者ハ尋常小學校卒業者、公學校高等科ノ第一學年修了者及卒業者ハ各高等小學校第一學年修了者及修業年限二年ノ高等小學校ノ卒業者ト看做ス

第八條 高等普通教育ハ中學校令、高等女學校令及高等學校令ニ依ル

第九條 實業教育ハ實業學校令ニ依ル

第十條 專門教育ハ專門學校令ニ、大學教育及其ノ豫備教育ハ大學令ニ依ル

第十一條 第二條及前三條ニ規定スル勅令中文部大臣ノ職務ハ臺灣總督之ヲ行フ

小學校令、中學校令及高等女學校令ニ依ル場合ニ於テ臺灣特殊ノ事情ニ依リ特例ヲ設クル必要アルモノニ付テハ

臺灣總督別段ノ定ヲ爲スコトヲ得

高等學校ノ設立及教員ノ資格、實業學校ノ設立及教科書、專門學校ノ設立並大學豫科ノ教員ノ資格ニ關シテハ臺

灣總督ノ定ムル所ニ依ル

第十二條 師範教育ヲ爲ス學校ハ師範學校トス

師範學校ハ特ニ徳性ノ涵養ニ力メ小學校教員タルヘキ者及公學校教員タルヘキ者ヲ養成スルコトヲ目的トス

第十三條 師範學校ニ小學師範部及公學師範部ヲ置ク但シ特別ノ事情アル場合ニ於テハ小學師範部又ハ公學師範部

ノミヲ置クコトヲ得

小學師範部ニ於テハ小學校教員タルヘキ者ヲ、公學師範部ニ於テハ公學校教員タルヘキ者ヲ教育ス

第十四條 師範學校ノ修業年限ハ六年トシ普通科五年、演習科一年トス但シ女子ニ在リテハ修業年限ヲ五年トシ普

通科ニ於テ一年ヲ短縮ス

第十五條 師範學校普通科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ尋常小學校ヲ卒業シタル者又ハ臺灣總督ノ定ムル所ニ依リ之

ト同等以上ノ學力アリト認メラレタル者トシ演習科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ普通科ヲ修了シタル者、中學校若

ハ修業年限四年ノ高等女學校ヲ卒業シタル者又ハ臺灣總督ノ定ムル所ニ依リ之ト同等以上ノ學力アリト認メラレ

タル者トス

第十六條 師範學校ニ研究科又ハ講習科ヲ置クコトヲ得

研究科及講習科ノ修業年限及入學資格ニ關シテハ臺灣總督ノ定ムル所ニ依ル

第十七條 師範學校ニ附屬ノ小學校及公學校ヲ置ク但シ小學師範部ノミヲ置ク師範學校ニハ附屬小學校、公學師範

部ノミヲ置ク師範學校ニハ附屬公學校ノミヲ置クコトヲ得

特別ノ事情アル場合ニ於テハ公立小學校ヲ以テ附屬小學校ニ、公立公學校ヲ以テ附屬公學校ニ代用スルコトヲ得

第十八條 師範學校ハ官立又ハ公立トス

公立師範學校ハ州又ハ廳地方費ニ限り之ヲ設立スルコトヲ得

第十九條 公立ノ師範學校ノ設立及廢止ハ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

師範學校ノ教科、編制、設備及授業料等ニ關シテハ臺灣總督ノ定ムル所ニ依ル

第二十條 特別ノ事情アル場合ニ於テハ官立、州立又ハ廳地方費立ノ中學校又ハ高等女學校ニ師範學校ノ演習科又

ハ講習科ヲ附置スルコトヲ得

第十七條ノ規定ハ前項ノ中學校及高等女學校ニ付之ヲ準用ス

第二十一條 特別ノ事情アル場合ニ於テハ臺灣總督ノ定ムル所ニ依リ國語ヲ常用スル者ハ公學校ニ、國語ヲ常用セ

サル者ハ小學校ニ入學スルコトヲ得

第二十二條 本令ニ規定スルモノヲ除クノ外私立學校、特殊ノ教育ヲ爲ス學校其ノ他ノ教育施設ニ關シテハ臺灣總

督ノ定ムル所ニ依ル

附則

第二十三條 本令施行ノ期日ハ臺灣總督之ヲ定ム

第二十四條 大正八年勅令第一號臺灣教育令ハ之ヲ廢止ス

第二十五條 本令施行ノ際現ニ臺灣ニ存スル小學校、公學校、中學校、高等女學校、實業學校、簡易實業學校及師範學校ハ各之ヲ本令ニ依リ設立シタル小學校、公學校、中學校、高等女學校、實業學校及師範學校トス

前項ノ師範學校ハ現ニ在學スル生徒ニ付其ノ在學ノ間仍舊令ニ依ルコトヲ得

第二十六條 本令施行ノ際現ニ臺灣ニ存スル高等普通學校及女子高等普通學校ハ各之ヲ本令ニ依リ設立シタル中學校及高等女學校トス但シ現ニ在學スル生徒ニ付テハ其ノ在學ノ間仍舊令ニ依ルコトヲ得

第二十七條 本令施行ノ際現ニ存スル臺灣總督府高等商業學校、臺灣總督府醫學專門學校及臺灣總督府農林專門學校ハ之ヲ本令ニ依リ設立シタル專門學校トス

臺灣總督府醫學專門學校及臺灣總督府農林專門學校ハ現ニ在學スル生徒ニ付其ノ在學ノ間仍舊令ニ依ルコトヲ得  
本令施行ノ際現ニ存スル臺灣總督府商業專門學校ハ現ニ在學スル生徒ノ卒業スル迄仍舊令ニ依リ存続スルコトヲ得

改正臺灣教育令の制定に依り臺灣に於ける教育は其本島人に對するものたるに内地人に對するものたるを問はず、總て一箇の臺灣教育令の支配を受くることとなり、初等普通教育より大學教育に至るまでの系統的教育制度が定められ、本島人は教育に關して全く内地人と均等の機會を與へらるることとなつた。初等普通教育機關に關しては本島人に對するものは之を公學校とし、内地人に對する小學校とは別箇のものとしたのであるが、これは言語其他の關係上兩者を混一することを困難とする事情に基くものであり、然も公學校は其程度に於て小學校と少しも異ならざるものである。尙

ほ改正臺灣教育令と同時に制定せられた改正朝鮮教育令に於ては、高等普通教育機關に關しても朝鮮人に對する學校と内地人に對する學校とを區別し、前者は之を高等普通學校及女子高等普通學校とし、後者は之を中學校及高等女學校としたのであるが、改正臺灣教育令に於ては高等普通教育機關に關しては、本島人に對する學校と内地人に對する學校との間に區別を設けずして同じく之を中學校及高等女學校として共學の制に依ることとした。これは朝鮮と臺灣とに於ける事情の相違に基くものである。其他師範學校、實業學校、專門學校及大學に關して共學の制度を取つたことは勿論である。要するに改正臺灣教育令は臺灣に於ける教育史の上に一新時期を劃するものである。

尙ほ新令に於ては本島人内地人と云ふが如きの稱呼を用ゐずして國語を常用せざる者、國語を常用する者と稱するが如き以て其用意を見るべきものがある。

大正十一年三月九日臺灣總督府令第十八號を以て左の如く臺灣教育令施行期日の件が定められた。

大正十一年勅令第二十號臺灣教育令ハ大正十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

附則

大正八年府令第八號ハ之ヲ廢止ス

大正十一年四月一日左記臺灣總督府諭告第一號臺灣教育令施行に關する件が發せられた。

本總督 大命ヲ拜シ茲土ニ莅ムヤ統治ノ方針ヲ宣明シ臺灣ハ帝國ヲ構成スル領土ノ一部ナリトシ之カ實施ニ關シ緩急ヲ諒ラサラムコトヲ期セリ爾來我カ 朝廷一視同仁ノ 聖旨ト蒼生撫育ノ精神トヲ奉シ又深ク世運ノ進轉ト本島

民衆ノ實情ニ鑑ミ教育普及ノ急務ナルヲ察シ曩ニ一部共學制ノ試練ヲ經テ茲ニ教育令ヲ改正シ内臺人間ノ差別教育ヲ撤去シ教育上全ク均等ナル地步ニ達セシメ得タルハ本總督ノ洵ニ欣快トスル所ナリ若夫レ初等教育ニ於ケル小公學校ノ區別ノ如キハ本島民衆ノ大部カ國語ヲ常用セサルニ因ル一時ノ權宜ニシテ文運ノ進歩教化ノ普及ニシテ能ク其ノ效果ヲ見ルニ至ラハ當然混一ニ歸スヘキモノナリト信ス  
 恭ク惟ルニ

明治大帝教育勅語ヲ宣布シ以テ學制ノ根本義ヲ示シ給ヘリ直ニ千古不磨ノ 聖訓ニシテ帝國ノ臣民タル者其レ孰カ之ヲ服膺セザラム本島民衆深ク思フ此ニ效シ文教ノ大義ヲ愆ル母カレ

抑均等ト云ヒ無差別ト云フモ雜然トシテ個々相對峙スルノ謂ニ非ス社會ノ秩序ヲ維持シ國家社會ニ對シ共存ノ公道ニ從ヒ能ク其ノ義務ヲ盡スニ在リ惟フニ本總督去歲地方制度ノ革新ヲ行フヤ普ク民衆ニ告クルニ私ヲ捐テ公ニ殉シ小ニシテハ隣保相佑ケ大ニシテハ義勇公ニ奉セムコトヲ以テセリ今本令實施ニ當リ再ヒ此ノ言ヲ以テ民衆ニ望ム要ハ一致協力國運ノ發展ニ資スルニ在リ庶幾クハ克ク此精神ヲ體得シ各其ノ分ニ應シ子弟ヲシテ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ母國ノ文明ト與ニ渾然融和セシムルヲ得ハ本令發布ノ趣旨空シカラサルナリ

第二項 初等普通教育

大正十一年二月勅令第二十號臺灣教育令附則の規定に依り、從來の小學校と公學校は同令に依り設立せられた小學校及公學校と看做された。

大正十一年二月十四日臺灣總督府告示第十六號を以て左の如く小學校に於て使用すべき教科用圖書が定められた。  
 大正十年府令第四十四號臺灣小學校規則ニ依リ大正十一年四月一日ヨリ小學校ニ於テ使用スヘキ教科用圖書左ノ如シ

大正五年告示第二十五號ハ大正十一年三月三十一日限之ヲ廢止ス

尋常小學校

修身

尋常小學修身書

教師用

尋常小學修身書複式編制學校

教師用

尋常小學修身掛圖

尋常小學修身掛圖複式編制學校用

尋常小學修身書

兒童用

尋常小學修身書複式編制學校

兒童用

國語

尋常小學國語讀本

尋常小學讀本(大正十一年度ニ限リ第六學年ニ於テノミ使用ス)

尋常小學國語書キ方手本

尋常小學書キ方手本乙種(大正十一年度ニ限リ第六學年ニ於テノミ使用ス)

算術

尋常小學算術書  
小學算術書珠算  
尋常小學算術書

教師用  
教師用  
兒童用

日本歴史

尋常小學國史

地理

尋常小學地理書  
尋常小學地理書附圖

兒童用

圖畫

尋常小學新定畫帖  
尋常小學新定畫帖  
高等小學校

教師用  
第三、第四學年兒童用、  
第五、第六學年男生用、女生用

修身

高等小學修身書  
高等小學修身書

兒童用  
女生用

國語

高等小學讀本

高等小學讀本

高等小學書キ方手本乙種

高等小學書キ方手本乙種

女子用

女子用

算術

高等小學算術書  
高等小學算術書  
小學算術書珠算  
小學簿記 說明ノ部 帳簿ノ部  
小學簿記掛表

教師用  
兒童用  
教師用  
教師用

日本歴史

高等小學日本歴史

地理

高等小學地理書  
高等小學地理書附圖

理科

高等小學理科書

教師用

第三編 新領土其他に於ける教育

高等小學 理 科 家事教科書

教師用

高等小學理科掛圖

兒童用

高等小學理科書

兒童用

高等小學 理 科 家事教科書

兒童用

圖 畫

教師用

高等小學新定畫帖

男女生共用

高等小學新定畫帖

男女生共用

小學校 幾何畫法 圖ノ部 說明ノ部

大正十一年四月一日臺灣總督府令第六十四號を以て左の如く臺灣公立小學校規則が定められた。

臺灣公立小學校規則左ノ通相定ム

臺灣公立小學校規則

第一章 總則

第一條 小學校ハ市街庄立トス但シ市街庄組合立又ハ街庄組合立ト爲スコトヲ得

市街庄ナキ地ニ於テハ州立又ハ廳地方費立トス

第二條 小學校ハ之ヲ設置スル團體ノ代表者ニ於テ之ヲ管理ス

第三條 小學校令第二條第三項、第四條、第五條、第二章、第二十三條、第二十四條、第二十七條、第二十九條、

第三十一條、第三十二條第三項及第四項、第三十三條乃至第三十六條、第三十九條乃至第四十六條、第四十八條乃至第五十條、第七章及第八章ハ之ヲ適用セス

第四條 國語ヲ常用セサル者ニシテ小學校ニ入學セムトスル者アルトキハ學校長ハ州知事又ハ廳長ノ許可ヲ受ケ之ヲ入學セシムルコトヲ得

第五條 本令中ノ認可ハ特ニ定ムル場合ノ外市街庄立、市街庄組合立又ハ街庄組合立ノ小學校ニ關シテハ州知事又ハ廳長ニ於テ、其ノ他ノ小學校ニ關シテハ臺灣總督ニ於テ之ヲ爲スモノトス

第二章 設立及廢止

第六條 尋常小學校ヲ設立セムトスルトキハ設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ認可ヲ受クヘシ

一 學校ノ名稱

二 位置

位置ハ州廳郡市街庄區大字地番ヲ記スヘシ

三 學級數

學級編制表ヲ添附スヘシ

四 授業料ヲ徵收スルトキハ其ノ月額及徵收方法

五 授業開始期日

六 校地、校舍、寄宿舎及職員宿舍ニ關スル事項

校地ニ付テハ地番甲數ヲ記シタル圖面、建物ニ付テハ配置圖ヲ添附スヘシ但シ建物ヲ新築、増築又ハ改築

第三章 臺灣の教育

スル場合ハ短計圖及設計仕様書ヲ添附スヘシ

七 通學區域

適宜ノ符號ヲ用キ小學校ノ位置、州廳郡市街庄區大字字等ノ區劃、通路、河川、方位等ヲ記シタル地圖ヲ添附スヘシ

八 通學區域内州廳郡市街庄區大字別戶數人口、通學距離

九 一年ノ收支概算

高等小學校ニ付テハ前項各號ノ外左ノ事項ヲ具スヘシ

一 修業年限

二 小學校令第二十條第二項乃至第四項ノ教科目及臺灣語ニ關スル事項並其ノ每週教授時數

三 農業實習地ヲ備フルトキハ其ノ位置ニ關スル事項

第一項第一號乃至第七號及前項第一號乃至第三號ノ事項ヲ變更セムトスルトキハ設立者ニ於テ其ノ事由ヲ具シ認可ヲ受クヘシ

第七條 就學兒童ノ教育事務ヲ委託セムトスルトキハ關係市尹、街庄長又ハ市街庄組合若ハ街庄組合ノ管理者ニ於テ協定事項ヲ具シ認可ヲ受クヘシ之ヲ廢止セムトスルトキ又ハ協定事項ヲ變更セムトスルトキ亦同シ

第八條 小學校ノ設立者ヲ變更セムトスルトキハ關係設立者ニ於テ其ノ事由及協定事項ヲ具シ認可ヲ受クヘシ

第九條 小學校ヲ廢止セムトスルトキハ設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ認可ヲ受クヘシ

一 事由

二 廢止期日

三 兒童ノ處分方法

第十條 特別ノ事情アルトキハ尋常小學校ニ分教場ヲ設クルコトヲ得

分教場ノ設置及廢止ニ關シテハ第六條乃至第九條ノ例ニ依ル

第十一條 高等小學校ニ補習科ヲ設置セムトスルトキハ設立者ニ於テ第六條第一項第一號、第二號乃至第九號及左ノ事項ヲ具シ認可ヲ受クヘシ

一 修業年限

二 教科目及其ノ每週教授時數

三 教授日及教授時間

四 農業實習地ヲ備フルトキハ其ノ位置

前項ノ事項ヲ變更セムトスルトキハ設立者ニ於テ其ノ事由ヲ具シ認可ヲ受クヘシ但シ第六條第八號及第九號ノ事項ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第十二條 補習科ヲ廢止セムトスルトキハ設立者ニ於テ其ノ事由及廢止期日ヲ具シ認可ヲ受クヘシ

第十三條 州知事又ハ廳長ニ於テ小學校又ハ其ノ分教場ノ設立、廢止ヲ認可シタルトキハ學校ノ名稱、位置及設立團體名ヲ告示スヘシ其ノ變更ヲ認可シタルトキ亦同シ

第十四條 小學校ニ幼稚園、盲啞學校、實業補習學校ヲ併置スルコトヲ得

第三章 教科目、教則及教科用圖書

第十五條 尋常小學校ノ教科目ニ手工ヲ加フ

第十六條 高等小學校ノ教科目ニハ隨意科目トシテ臺灣語ヲ加フルコトヲ得

第十七條 小學校ニ於テハ小學校令第一條ノ旨趣ヲ遵守シテ兒童ヲ教育スヘシ

道德教育及國民教育ニ關聯セル事項ハ何レノ教科目ニ於テモ常ニ留意シテ教授セムコトヲ要ス

知識技能ハ常ニ生活ニ必須ナル事項ヲ選ヒテ之ヲ教授シ反覆練習シテ應用自在ナラシメムコトヲ務ムヘシ

兒童ノ身體ヲ健全ニ發達セシメムコトヲ期シ何レノ教科目ニ於テモ其ノ教授ハ兒童ノ心身發達ノ程度ニ副ハシメムコトヲ要ス

男女ノ特性及其ノ將來ノ生活ニ注意シテ各適當ノ教育ヲ施サムコトヲ務ムヘシ

各教科目ノ教授ハ其ノ目的及方法ヲ誤ルコトナク互ニ相聯絡シテ補益セムコトヲ要ス

第十八條 修身ハ教育ニ關スル勅語ノ旨趣ニ基キテ兒童ノ徳性ヲ涵養シ道德ノ實踐ヲ指導スルヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ初ハ孝悌、親愛、勤儉、恭敬、信實、義勇等ニ付實踐ニ適切ナル近易ノ事項ヲ授ケ漸ク進ミテハ國家及社會ニ對スル義務ノ一斑ニ及ホシ以テ品位ヲ高メ志操ヲ固クシ且進取ノ氣象ヲ長シ公德ヲ尙ハシメ忠君愛國ノ志氣ヲ養ハムコトヲ務ムヘシ

高等小學校ニ於テハ前項ノ旨趣ヲ擴メテ一層陶冶ノ功ヲ堅實ナラシメムコトヲ務ムヘシ

女兒ニ在リテハ特ニ貞淑ノ徳ヲ養ハムコトニ注意スヘシ

修身ヲ授クルニハ嘉言、善行及諺辭等ニ基キテ勸戒シ常ニ之ヲ服膺セシメムコトヲ務ムヘシ

第十九條 國語ハ普通ノ言語、日常須知ノ文字及文章ヲ知ラシメ正確ニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ養ヒ兼テ智徳ヲ啓發

スルヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ初ハ發音ヲ正シ假名ノ讀ミ方、書キ方、綴リ方ヲ知ラシメ漸ク進ミテハ日常須知ノ文字及普通文ニ及ホシ又言語ヲ練習セシムヘシ

高等小學校ニ於テハ稍進ミタル程度ニ於テ日常須知ノ文字及普通文ノ讀ミ方、書キ方、綴リ方ヲ授ケ又言語ヲ練習セシムヘシ

讀ミ方、書キ方、綴リ方ハ各其ノ主トスル所ニ依リ教授時間ヲ區別スルコトヲ得ルモ特ニ注意シテ相聯絡セシムコトヲ要ス

讀本ノ文章ハ平易ニシテ國語ノ模範トナリ且兒童ノ心情ヲ快活純正ナラシムルモノナルヲ要シ其ノ材料ハ修身、歴史、地理、理科其ノ他生活ニ必須ナル事項ニ取り趣味ニ富ムモノタルヘシ

女兒ノ學級ニ用フル讀本ニハ特ニ家事上ノ事項ヲ交フヘシ

文章ノ綴リ方ハ讀ミ方又ハ他ノ教科目ニ於テ授ケタル事項、兒童ノ日常見聞セル事項及處世ニ必須ナル事項ヲ記述セシメ其ノ行文ハ平易ニシテ旨趣明瞭ナラムコトヲ要ス

書キ方ニ用フル漢字ノ書體ハ尋常小學校ニ於テハ楷書、行書ノ二種トシ高等小學校ニ於テハ尙草書ヲ加フ

國語ヲ授クル際ニハ語句文章ノ意義ヲ明瞭ニシ且其ノ用法ニ習熟セシメムコトヲ務ムヘシ

他ノ教科目ヲ授クル際ニ於テモ常ニ言語ノ練習及文字ノ書キ方ニ注意セシメムコトヲ要ス

第二十條 算術ハ日常ノ計算ニ習熟セシメ生活上必須ナル知識ヲ與ヘ兼テ思考ヲ精確ナラシムルヲ以テ要旨トス



算ヲ授クヘシ

高等小學校ニ於テハ前項ノ事項ニ就キ稍其ノ程度ヲ高メテ之ヲ授ケ應用練習ヲ十分ナラシメ學校ノ修業年限ニ應シ更ニ求積ヲ授クヘシ土地ノ情況ニ依リテハ日用簿記ノ大要ヲ授クルコトヲ得

算術ハ初ハ暗算ヲ用キ漸ク進ミテハ筆算ヲ併セ課スヘシ又珠算ヲ加フルコトヲ得

算術ノ材料ハ他ノ教科目ニ於テ授ケタル事項及土地ノ情況ヲ斟酌シテ日常生活ニ適切ナルモノヲ選フヘシ

算術ヲ授クルニハ理會ヲ精確ニシ暗算及運算ニ習熟シテ應用自在ナラシメ又計算ノ方法及理由ヲ正確ニ説明セシムコトヲ要ス

第二十一條 日本歴史ハ國體ノ大要ヲ知ラシメ兼テ國民タルノ志操ヲ養フヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ建國ノ體制、皇統ノ無窮、歷代天皇ノ盛業、忠良賢哲ノ事蹟、國民ノ武勇、文化ノ由來、外國トノ關係等ノ大要ヲ授ケ以テ國初ヨリ現時ニ至ルマテノ事歴ヲ知ラシムヘシ

高等小學校ニ於テハ前項ノ旨趣ヲ擴メテ稍詳ニ我國發達ノ蹟ヲ知ラシムヘシ

日本歴史ヲ授クルニハ成ルヘク圖畫、地圖、標本等ヲ示シ兒童ヲシテ當時ノ實狀ヲ想像シ易カラシメ特ニ修身ノ教授事項ト聯絡セシムコトヲ要ス

第二十二條 地理ハ地球ノ表面及人類生活ノ狀態ニ關スル知識ノ一斑ヲ得シメ又本邦國勢ノ大要ヲ理會セシメ兼テ愛國心ノ養成ニ資スルヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ本邦ノ地勢、氣候、區劃、都會、產物、交通等及地球ノ形狀運動等ノ大要ヲ理會セシメ且滿洲地理ノ大要ヲ授ケ兼テ本邦トノ關係ニ於テ重要ナル諸國ノ地理ニ關スル簡單ナル知識ヲ得シムヘシ

高等小學校ニ於テハ各大洲ノ地勢、氣候、區劃、交通等ノ概略ヨリ進ミテ本邦トノ關係ニ於テ重要ナル諸國ノ地理ノ大要、本邦ノ政治經濟上ノ狀態及外國ニ對スル地位等ノ大要ヲ知ラシメ又地文ノ一斑ヲ授クヘシ

地理ヲ授クルニハ成ルヘク實地ノ觀察ニ基キ又地球儀、地圖、標本、寫真等ヲ示シテ確實ナル知識ヲ得シメ特ニ歴史及理科ノ教授事項ト聯絡セシムコトヲ要ス

第二十三條 理科ハ通常ノ天然物及自然ノ現象ニ關スル知識ノ一斑ヲ得シメ其ノ相互及人生ニ對スル關係ノ大要ヲ理會セシメ兼テ觀察ヲ精密ニシ自然ヲ愛スルノ心ヲ養フヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ植物、動物、礦物及自然ノ現象ニ付主トシテ兒童ノ目撃シ得ル事項ヲ授ケ特ニ重要ナル植物、動物、礦物ノ名稱、形狀、效用及發育ノ大要ヲ知ラシメ又通常ノ物理化學上ノ現象及人身生理ノ初歩ヲ授クヘシ高等小學校ニ於テハ前項ニ準シ漸ク其ノ程度ヲ進メ特ニ重要ナル元素及其ノ化合物、簡易ナル器械ノ構造、作用及人身ノ生理衛生ノ大要ヲ授ケ兼テ植物、動物、礦物ノ相互及人生ニ對スル關係ノ大要ヲ理會セシムヘシ

理科ニ於テハ務メテ農事、水産、工業、家事等ニ適切ナル事項ヲ授ケ特ニ植物、動物等ニ付教授スル際ニハ之ヲ以テ製スル重要ナル加工品ノ製法及效用等ノ概略ヲ知ラシムヘシ

理科ヲ授クルニハ成ルヘク實地ノ觀察ニ基キ又ハ標本、模型及圖畫等ヲ示シ又ハ簡單ナル實驗ヲ施シ明瞭ニ理會セシムコトヲ要ス

第二十四條 圖畫ハ通常ノ形體ヲ描クノ能ヲ得シメ兼テ美感ヲ養フヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ成ルヘク兒童ノ日常目撃セル事物ヲ選ヒ寫生畫ヲ主トシ適宜臨畫、考案畫等ヲ交ヘ課スヘシ高等小學校ニ於テハ前項ニ準シ漸ク其ノ程度ヲ進メテ之ヲ授クヘシ土地ノ情況ニ依リテハ簡易ナル幾何畫ヲ授ク

ルコトヲ得

圖畫ヲ授クルニハ形體ヲ看取シテ正シク之ヲ描カシメ且意匠ヲ練ラシメ兼テ清潔ヲ好ミ綿密ヲ尙フノ習慣ヲ養ハムコトニ注意スヘシ

第二十五條 唱歌ハ平易ナル歌曲ヲ唱フコトヲ得シメ美感ヲ養ヒ徳性ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ平易ナル單音唱歌ヲ授クヘシ又便宜簡易ナル複音唱歌ヲ授クルコトヲ得

高等小學校ニ於テハ前項ニ準シ稍進ミタル程度ニ於テ之ヲ授クヘシ

歌詞及曲譜ハ平易雅正ニシテ兒童ノ心情ニ適シ且之ヲ快活純美ナラシムルモノタルヘシ

第二十六條 體操ハ身體ノ各部ヲ均齊ニ發育セシメ四肢ノ動作ヲ機敏ナラシメ以テ全身ノ健康ヲ保護増進シ精神ヲ

快活ニシテ剛毅ナラシメ兼テ規律ヲ守リ協同ヲ尙フノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ體操、教練及遊戲ニ付簡易ナル動作ヨリ始メ漸ク其ノ程度ヲ進メテ之ヲ授クヘシ

高等小學校ニ於テハ前項ニ準シ一層其ノ程度ヲ進メテ之ヲ授クヘシ

體操ハ男兒及女兒ノ別ニ依リ其ノ授クヘキ事項ヲ斟酌スヘク又便宜運動生理ノ初歩ヲ知ラシムヘシ

土地ノ情況ニ依リ體操ノ教授時間ノ一部又ハ教授時間ノ外ニ於テ適宜ノ戶外運動ヲ爲サシメ又ハ水泳ヲ授クルコトアルヘシ

第二十七條 裁縫ハ通常ノ衣類ノ縫ヒ方及裁チ方等ニ習熟セシメ兼テ節約利用ノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ運針法ヨリ始メ漸ク通常ノ衣類ノ縫ヒ方ヲ授ク又便宜裁チ方及繕ヒ方ヲ授クヘシ

高等小學校ニ於テハ初ハ前項ニ準シ漸ク其ノ程度ヲ進メ通常ノ衣類ノ縫ヒ方、裁チ方及繕ヒ方ヲ授クヘシ

裁縫ハ其ノ材料ヲ日常所用ノモノニ取り之ヲ授クル際用具ノ使用方、材料ノ品類、性質及衣類ノ保存方及洗濯方等ヲ教示スヘシ

第二十八條 手工ハ簡易ナル物品ヲ製作スルノ能ヲ得シメ工作ノ趣味ヲ長シ勤勞ヲ好ムノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス

手工ハ植物纖維、竹、木、粘土及金屬等其ノ土地ニ適切ナル材料ヲ用キテ簡易ナル製作ヲ爲サシメ高等小學校ニ於テハ簡易ナル製圖ヲ併セ授クヘシ

手工ヲ授クル際ニハ用具ノ使用方、材料ノ品類及性質等ヲ教示スヘシ

第二十九條 農業ハ農業ニ關スル普通ノ知識ヲ得シメ農業ノ趣味ヲ長シ勤勉利用ノ心ヲ養フヲ以テ要旨トス

農業ハ土地ノ情況ニ依リ農事若ハ水産ヲ授ケ又ハ農事及水産ヲ併セ授クヘシ

農事ハ土壤、水利、肥料、農具、耕耘、栽培、養蠶及養畜等ニ就キ土地ノ情況ニ適切ニシテ兒童ノ理會シ易キ事項ヲ授クヘシ

水産ハ漁撈、養殖及製造等ニ就キ其ノ土地ノ業務ニ適切ナルモノヲ授クヘシ

農業ヲ授クルニハ特ニ地理及理科等ノ教授事項ト關聯シ時々其ノ土地實際ノ業務ニ付テ教示シ其ノ知識ヲ確實ナラシムコトヲ務ムヘシ

第三十條 商業ハ商業ニ關スル普通ノ知識ヲ得シメ勤勉敏捷ニシテ且信用ヲ重スルノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス  
商業ハ學校所在ノ地方ニ於ケル賣買、金融、運輸、保險其ノ他商業ニ關スル重要ナル事項ニシテ兒童ノ理會シ易キモノヲ選ヒ國語、算術、地理及理科等ノ教授事項ト關聯シテ之ヲ授ケ且簡易ナル商用簿記ヲ授クヘシ

第三十一條 家事ハ家事ニ關スル普通ノ知識ヲ得シメ家事ノ趣味ヲ長シ兼テ節約、利用、秩序及清潔ノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス

家事ハ衣食住、看病、育兒其ノ他一家ノ經濟等ニ關スル事項ノ大要ヲ授クヘシ家事ヲ授クルニハ特ニ理科トノ聯絡ニ注意シ又實習ニ重キヲ置キ土地ノ情況ニ適切ナラシムルヲ務ムヘシ

第三十二條 外國語ハ日常簡易ノ英語ヲ習得セシムルヲ以テ要旨トス

外國語ハ發音、綴字ヨリ始メ簡易ナル文章ノ讀ミ方、話シ方、綴リ方及書キ方ヲ授クヘシ

外國語ヲ授クルニハ成ルヘク日常生活ニ關聯セシメテ其ノ理會ヲ容易ニシ練習ニ重キヲ置クヘシ

第三十三條 臺灣語ハ日常簡易ノ臺灣語ヲ習得セシムルヲ以テ要旨トス

臺灣語ハ實用ニ適スル會話ヲ授クヘシ

臺灣語ヲ授クルニハ成ルヘク日常生活ニ關聯セシメテ其ノ理會ヲ容易ニシ練習ニ重キヲ置クヘシ

第三十四條 尋常小學校各學年ノ教授ノ程度及毎週教授時數ハ別記第一號表ニ依ルヘシ

第三十五條 高等小學校各學年ノ教授ノ程度及毎週教授時數ハ別記第二號表又ハ第三號表ニ依ルヘシ

第三十六條 第六十九條ノ規定ニ依リ二部教授ヲ爲ス場合ニ於テハ教科目ノ毎週教授時數ハ設立者ニ於テ之ヲ定メ認可ヲ受クヘシ但シ州立又ハ廳地方費立ノ小學校ニ關シテハ設立者限り之ヲ行フコトヲ得

第三十七條 土地ノ情況ニ依リ設立者ニ於テ認可ヲ受ケ左ノ制限内ニ於テ第三十四條及第三十五條ノ規定ニ依ル時數ヲ増減スルコトヲ得

一 尋常小學校ノ毎週教授時數ハ三十時ヲ超エ又ハ十八時ヲ下ルコトヲ得ス

二 高等小學校ノ毎週教授時數ハ三十二時ヲ超エ又ハ二十四時ヲ下ルコトヲ得ス

第六十九條ノ規定ニ依リ二部教授ヲ爲ス場合ニ於テハ毎週教授時數ハ各部十八時以上トス但シ尋常小學校ニ於ケル年少ノ部ニ在リテハ之ヲ十二時マテニ減スルコトヲ得

第三十八條 學校長ハ夏季休業前後各四週内ニ於テ毎週教授時數中八時内ヲ減スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ教授時數ヲ減スルトキハ學校長ニ於テ便宜各教科目ノ毎週教授時數ヲ斟酌スヘシ

第三十九條 尋常小學校又ハ高等小學校ニ於テ各學年ノ兒童ヲ一學級ニ編制スルトキハ各學年ノ程度ニ拘ラス全部又ハ一部ノ兒童ヲ同一ノ程度ニ依リ教授スルコトヲ得

第四十條 學校長ハ其ノ小學校ニ於テ教授スヘキ各教科目ノ教授細目ヲ定ムヘシ

第四十一條 小學校ニ於テ各學年ノ課程ノ修了又ハ全教科ノ卒業ヲ認ムルニハ別ニ試験ヲ用フルコトナク兒童平素ノ成績ヲ考查シテ之ヲ定ムヘシ

第四十二條 學校長ハ修業年限ノ終ニ於テ尋常小學校又ハ高等小學校ノ教科ヲ修了セリト認メタル者ニハ卒業證書ヲ授與スヘシ

學校長ハ學年末ニ於テ各學年ノ課程ヲ修了セリト認メタル者ニハ修業證書、第三十九條ノ規定ニ依リ一學年間學習セシ者ニハ學習證書ヲ授與スルコトヲ得

第四十三條 小學校ノ卒業證書ハ別記第四號様式ニ依ルヘシ

小學校ノ修業證書ハ別記第五號様式ニ、學習證書ハ別記第六號様式ニ依ルヘシ

第四十四條 高等小學校ニハ補習科ヲ置クコトヲ得

第三編 新領土其他に於ける教育

一〇九〇

補習科ノ修業年限ハ二年内トス

第四十五條 補習科ハ高等小學校ヲ卒業シタル者又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者ヲシテ高等小學校ノ教科目ヲ補習セシムルヲ以テ目的トス

第四十六條 補習科ノ教科目ハ高等小學校ノ教科目中ニ付設立者ニ於テ之ヲ定ムヘシ但シ修身、國語、算術ハ之ヲ闕クコトヲ得ス

前項ノ教科目ハ修身、國語、算術ノ外之ヲ隨意科目ト爲スコトヲ得

第四十七條 補習科ノ教科ヲ授クルニハ其ノ土地ノ業務ニ適切ナル事項ヲ交フヘシ

第四十八條 補習科ノ教授ハ一定ノ季節ヲ選ヒテ之ヲ爲スコトヲ得

第四十九條 補習科ヲ修了シタル者ニハ修了證書ヲ授與スルコトヲ得

前項ノ修了證書ハ別記第七號様式ニ依ルヘシ

第五十條 小學校ノ教科用圖書ハ文部省若ハ臺灣總督府ニ於テ著作權ヲ有スルモノ又ハ文部大臣ノ檢定ヲ經タルモノニ付臺灣總督之ヲ指定ス

小學校教科用圖書中國語書キ方、算術、理科、圖畫ノ教科用圖書及小學地理附圖ハ學校長ニ於テ之ヲ兒童ニ使用セシメサルコトヲ得

第五十一條 補習科ノ教科用圖書ハ州知事又ハ廳長ノ認可ヲ受ケ學校長之ヲ定ム

第四章 學年、休業日及式日

第五十二條 小學校ノ學年ハ四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

學年ヲ分チテ左ノ三學期トス

第一學期 四月一日ヨリ八月二十日迄

第二學期 八月二十一日ヨリ十二月三十一日迄

第三學期 翌年一月一日ヨリ三月三十一日迄

第五十三條 毎日ノ教授始終ノ時限ハ學校長之ヲ定ムヘシ

第五十四條 小學校ノ休業日ハ左ノ如シ

一 祭日、祝日

二 臺灣神社例祭日、始政記念日

三 日曜日

四 夏季休業 七月一日ヨリ八月二十日迄

五 年末年始休業 十二月二十九日ヨリ翌年一月五日迄

六 學年末休業 三月二十九日ヨリ同月三十一日迄

學校長ニ於テ必要ト認ムルトキハ前項第三號乃至第六號ノ休業日中適宜教授ヲ爲スコトヲ得

第五十五條 前條ノ外臨時休業ヲ要スルトキハ學校長ニ於テ其ノ事由及之カ爲ニ減スル各教科目教授ノ補充方法ヲ具シ州知事又ハ廳長ノ認可ヲ受クヘシ

非常變災其ノ他急迫ノ場合ニ際シ前項ノ認可ヲ受クル暇ナキトキハ學校長ニ於テ臨時休業ヲ爲スコトヲ得

第五十六條 傳染病豫防ノ爲必要アルトキ其ノ他非常變災アルトキハ州知事若ハ廳長又ハ郡守ニ於テ臨時休業ヲ命

スルコトヲ得

第五十七條 小學校ノ教授日數ハ毎年二百三十日ヲ下ルコトヲ得ス但シ補習科ハ此ノ限ニ在ラス

特別ノ事情アルトキハ州知事又ハ廳長ニ於テ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ前項ノ日數ヲ減スルコトヲ得

第五十八條 紀元節、天長節祝日、一月一日及始政記念日ニ於テハ職員及兒童學校ニ參集シ左ノ順序ニ從ヒ儀式ヲ行フヘシ

一 職員及兒童「君カ代」ヲ合唱ス

二 職員及兒童ハ

天皇陛下

皇后陛下ノ御影ニ對シ奉リ最敬禮ヲ行フ

三 學校長ハ教育ニ關スル勅語ヲ奉讀ス

四 學校長ハ教育ニ關スル勅語ニ基キ聖旨ノ在ル所ヲ誨告ス

五 職員及兒童ハ其ノ祝日ニ相當スル唱歌ヲ合唱ス

御影ヲ拜戴セサル小學校ニ於テハ前項第二號ノ式ヲ闕ク

第五十九條 臺灣神社例祭日ニハ職員及兒童學校ニ參集シ學校長ハ臺灣神社ニ關スル誨告ヲ爲シ一同北白川宮能久親王ヲ奉祀セル神社ニ參拜又ハ遙拜ヲ爲スヘシ

第五章 編制及職員

第六十條 小學校ノ學級數ハ十八學級以下トス

特別ノ事情アルトキハ設立者ニ於テ認可ヲ受ケ前項ノ制限ニ依ラサルコトヲ得

分教場ヲ設クルトキハ一分教場ノ學級數ハ六學級以下トシ第一項ノ制限外トス

第六十一條 補習科ノ教授時間ヲ正教科ノ教授時間外ニ定メタルトキハ其ノ學級數ハ前條ニ規定シタル學級數ノ制限外トス

第六十二條 小學校ニ於テハ各學級ニ訓導一人ヲ置クヘシ

特別ノ事情アルトキハ前項ノ外尙訓導ヲ置キ兒童ノ教授ヲ補助セシムルコトヲ得

二部教授ヲ爲ス場合ニ於テハ前後二學級毎ニ訓導一人ヲ置クコトヲ得

前三項ノ外學校長ノ擔任スル教授ヲ補助スル爲メ訓導一人ヲ置クコトヲ得

前四項ノ訓導ヲ得難キトキハ准訓導ヲ以テ之ニ代用スルコトヲ得若シ准訓導ヲ得難キトキハ其ノ他ノ者ヲ以テ之ニ代用スルコトヲ得

第六十三條 前條ノ外適宜專科教員ヲ置クコトヲ得

第六十四條 補習科ノ教授時間ヲ正教科ノ教授時間外ニ定メタルトキハ正教科ヲ教授スル教員ヲシテ之ヲ擔任セシムルコトヲ得

第六十五條 訓導ニシテ陸軍一年現役ニ服スル者ハ第六十二條第一項ノ定員外トス

第六十六條 一學級ノ兒童數ハ尋常小學校ニ在リテハ七十人以下、高等小學校ニ在リテハ六十人以下トス

特別ノ事情アルトキハ前項ノ制限ヲ超過シテ各十人迄ヲ増スコトヲ得

第六十七條 尋常小學校又ハ其ノ分教場ニ於テ同一學年ノ女兒ノ數一學級ヲ編制スルニ足ルトキハ男女ニ依リ該學

年ノ學級ヲ別ツヘシ

第一學年及第二學年ニ在リテハ前項ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

高等小學校又ハ其ノ分教場ニ於テ全校女兒ノ數一學級ヲ編制スルニ足ルトキハ男女ニ依リ學級ヲ別ツヘシ  
特別ノ事情アルトキハ第一項又ハ第三項ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

第六十八條 修身、體操、唱歌、裁縫、手工、農業、商業、臺灣語及小學校令第二十條第三項ニ依リ加ヘタル教科  
目ハ數學級ノ全部又ハ一部ノ兒童ヲ併セテ同時ニ之ヲ教授スルコトヲ得但シ裁縫、手工、農業、商業ニ付テハ兒  
童ノ數七十人ヲ超エサル場合ニ限ル

第六十九條 土地ノ情況ニ依リ小學校又ハ其分教場ニ於テ全部又ハ一部ノ兒童ヲ前後二部ニ分チテ教授スルコトヲ  
得

第七十條 全校兒童ヲ一學級ニ編制スル學校ヲ單級小學校トシ二學級以上ニ編制スル學校ヲ多級小學校トス

第七十一條 補習科ノ學級ハ男女ヲ合シテ之ヲ編制スルコトヲ得但シ其ノ教授時間ヲ正教科ノ教授時間内ニ定メ  
タルトキハ此ノ限ニ在ラス

第七十二條 小學校ノ正教員ノ免許狀ヲ有スル者ニ非サレハ訓導ト稱スルコトヲ得ス

小學校ノ准教員ノ免許狀ヲ有スル者ニ非サレハ准訓導ト稱スルコトヲ得ス

第七十三條 訓導又ハ准訓導以外ノ教員ハ之ヲ教員心得ト稱ス

第七十四條 小學校ノ職員ノ職務ニ關スル規程ハ州知事又ハ廳長之ヲ定ム

### 第六章 設備

第七十五條 小學校ニ於テハ校舍、校地、校具、體操場及職員宿舍ヲ備フヘシ

農業ヲ課スル學校ニ於テハ實習地ヲ備フヘシ

第七十六條 小學校ノ設備ハ其ノ規模ニ適應スルヲ要ス

校地ハ兒童ノ通學ニ便利ニシテ衛生ニ適シ道徳上及教授上ニ害ナク且危險ナル場所ニ接近セサルコトヲ要ス

校舍ハ教授上、管理上及衛生上適當ニシテ質朴堅牢ナルコトヲ要ス

第七十七條 補習科ノ教場ハ正教科ヲ授クル校舍外ニ之ヲ設クルコトヲ得

### 第七章 入學及退學

第七十八條 兒童ノ入學ハ學年ノ始トス但シ學校長ニ於テ特別ノ事情アリト認メタル者ハ此ノ限ニ在ラス

第七十九條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ高等小學校ノ入學ニ關シ尋常小學校卒業者ト同等以上ノ學力アリト認ム

一 中學校又ハ高等學校ノ豫科ヲ修了シタル者

二 年齢十二年以上ニシテ尋常小學校卒業ノ程度ニ依ル試驗ニ合格シタル者

第八十條 補習科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ當該學校ト同等以上ノ高等小學校ヲ卒業シタル者又ハ相當ノ年齢ニ  
達シ當該學校卒業ノ程度ニ依ル試驗ニ合格シタル者タルヘシ

第八十一條 小學校ニ兒童ヲ入學セシムトスルトキハ保護者ニ於テ學校長ニ願出ツヘシ

第八十二條 學校長ハ入學シタル兒童ニ付別記第八號様式ニ依リ學籍簿ヲ調製スヘシ

學籍簿ニ記載ノ事項ニ異動ヲ生シタルトキハ遲滞ナク之ヲ加除訂正スヘシ

第八十三條 兒童他ノ小學校ニ轉學シタルトキハ學校長ハ學籍簿寫ヲ轉學先學校長ニ送付スヘシ

第三編 新領土其他に於ける教育

一〇九六

第八十四條 學校長ハ別記第九號様式ニ依リ出席簿ヲ作り兒童ノ出席開席ヲ明ニスヘシ  
 第八十五條 學校長ハ在學兒童ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スル者アルトキハ監督官廳ノ認可ヲ受ケ退學ヲ命スルコトヲ得

一 性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者

二 引續キ三月以上開席シタル者

三 正當ノ事由ナクシテ引續キ一月以上開席シタル者

第八十六條 兒童ヲ退學セシメムトスルトキハ保護者ニ於テ學校長ニ届出ツヘシ

第八章 授業料

第八十七條 小學校ニ於テハ授業料ヲ徴收スルコトヲ得

第八十八條 小學校ニ於テ徴收スル授業料ハ一月五十錢以下ニ於テ之ヲ定ムヘシ但シ高等小學校及補習科ニ限り七十錢迄増額スルコトヲ得

前項ノ授業料ノ額ハ學年ニ依リ差等ヲ設クルコトヲ得

第八十九條 小學校ノ授業料ハ學校ヲ設置スル團體ノ收入トス

第九十條 授業料ハ保護者ニ於テ之ヲ納付スヘシ

第九十一條 兒童他ノ小學校ニ轉學シタルトキハ其ノ翌月以後ノ既納ノ授業料ハ之ヲ保護者ニ還附スヘシ

第九十二條 夏季休業若ハ學校ノ都合ニ依リ休業全月ニ互リタルトキ又ハ兒童ノ病氣其ノ他正當ノ事由ニ依リ開席全月ニ互リタルトキハ其ノ月分ノ授業料ヲ徴收スルコトヲ得

第九十三條 貧窮ノ爲授業料ヲ納ムルコト能ハサル者ニ對シテハ設立者ニ於テ授業料ノ全部又ハ一部ヲ免除スルコトヲ得

一家二人以上同時ニ小學校ニ在學スルトキハ設立者ハ授業料ヲ減スルコトヲ得

第九十四條 小學校ニ入學シタル兒童ニシテ他ノ小學校ニ於テ既ニ其ノ月分ノ授業料ヲ納メタルトキハ再ヒ之ヲ徴收スルコトヲ得

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十年府令第四十四號臺灣小學校規則及明治三十七年府令第十八號臺灣小學校補習科規則ハ之ヲ廢止ス  
 本令施行ノ際現ニ存スル臺灣公立小學校若ハ其ノ分校又ハ補習科ハ本令ニ依リ設置シタル小學校若ハ其ノ分校場又ハ補習科トス

(別記)

第一號表

尋常小學校各學年教授程度及每週教授時數表

修 身	學 年		第一學年		第二學年		第三學年		第四學年		第五學年		第六學年	
	科目	時數	科目	時數	科目	時數	科目	時數	科目	時數	科目	時數	科目	時數
二 道德ノ要旨	二 道德ノ要旨	每週 二時	二 道德ノ要旨	每週 二時	二 道德ノ要旨	每週 二時	二 道德ノ要旨	每週 二時	二 道德ノ要旨	每週 二時	二 道德ノ要旨	每週 二時	二 道德ノ要旨	每週 二時
	二 算術ノ要旨	每週 二時	二 算術ノ要旨	每週 二時	二 算術ノ要旨	每週 二時	二 算術ノ要旨	每週 二時	二 算術ノ要旨	每週 二時	二 算術ノ要旨	每週 二時	二 算術ノ要旨	每週 二時
	二 國語ノ要旨	每週 二時	二 國語ノ要旨	每週 二時	二 國語ノ要旨	每週 二時	二 國語ノ要旨	每週 二時	二 國語ノ要旨	每週 二時	二 國語ノ要旨	每週 二時	二 國語ノ要旨	每週 二時
	二 理科ノ要旨	每週 二時	二 理科ノ要旨	每週 二時	二 理科ノ要旨	每週 二時	二 理科ノ要旨	每週 二時	二 理科ノ要旨	每週 二時	二 理科ノ要旨	每週 二時	二 理科ノ要旨	每週 二時
	二 勞作ノ要旨	每週 二時	二 勞作ノ要旨	每週 二時	二 勞作ノ要旨	每週 二時	二 勞作ノ要旨	每週 二時	二 勞作ノ要旨	每週 二時	二 勞作ノ要旨	每週 二時	二 勞作ノ要旨	每週 二時
	二 音樂ノ要旨	每週 二時	二 音樂ノ要旨	每週 二時	二 音樂ノ要旨	每週 二時	二 音樂ノ要旨	每週 二時	二 音樂ノ要旨	每週 二時	二 音樂ノ要旨	每週 二時	二 音樂ノ要旨	每週 二時





第三編 新領土其他に於ける教育

計	體操	三	體操、教練、遊戲
	裁縫	四	通常ノ衣類ノ縫ヒ方、裁チ方、繕ヒ方
計	男	二四	
	女	二七	
計	體操	三	體操、教練、遊戲
	裁縫	四	通常ノ衣類ノ縫ヒ方、裁チ方、繕ヒ方
計	男	二四	
	女	二八	

小學校令第二十條第二項及第三項ノ教科目ニ關シテハ本表ノ時數ノ外男兒六時以内、女兒四時以内ニ於テ之ヲ課スルコトヲ得

臺灣語ノ每週教授時數ハ三時内ニ於テ之ヲ定ムヘシ

前二項ノ外本表各教科目ノ每週教授時數ヲ增加スルコトヲ得但シ每週教授時數ノ合計男兒ニ在リテハ三十時女兒ニ在リテハ三十二時ヲ超ユルコトヲ得ス

實習ニ關シテハ規定ノ教授時數外ニ涉リテ尙之ヲ課スルコトヲ得

第三號表

修業年限三年ノ高等小學校各學年教授程度及每週教授時數表

學年	教科目	每週教授時數	
		第一學年	第二學年
修身	道德ノ要旨	二	二
	日常須知ノ文字及普通文ノ讀ミ方、書キ方、繕リ方	八	八
國語	日常須知ノ文字及普通文ノ讀ミ方、書キ方、繕リ方	八	八
	分數、歩合算、比例(珠算、加減乘除)	四	四
算術	比(珠算、加減乘除)	四	四
	前學年ノ補習、求積(日用簿記、加減乘除)	四	四

學年	教科目	每週教授時數	
		第一學年	第二學年
日本歴史	日本歴史ノ大要	二	二
	外國地理ノ大要	二	二
地理	植物、動物、礦物及自然ノ現象、通常ノ物理化學上ノ現象、元素及化合物、簡易ナル器械ノ構造、作用、人身生理衛生ノ大要	二	二
	自然ノ現象、通常ノ物理化學上ノ現象、元素及化合物、簡易ナル器械ノ構造、作用、人身生理衛生ノ大要	二	二
理科	理科ノ補習	二	二
	地理ノ補習	二	二
唱歌	單音唱歌(簡易ナル複音唱歌)	一	一
	單音唱歌(簡易ナル複音唱歌)	一	一
體操	體操、教練、遊戲	三	三
	體操、教練、遊戲	三	三
裁縫	通常ノ衣類ノ縫ヒ方、裁チ方、繕ヒ方	四	四
	通常ノ衣類ノ縫ヒ方、裁チ方、繕ヒ方	四	四
計	男	二四	
	女	二八	
計	男	二四	
	女	二八	

小學校令第二十條第二項及第三項ノ教科目ニ關シテハ本表ノ時數ノ外男兒六時以内、女兒四時以内ニ於テ之ヲ課スルコトヲ得

臺灣語ノ每週教授時數ハ三時内ニ於テ之ヲ定ムヘシ

前二項ノ外本表各教科目ノ每週教授時數ヲ增加スルコトヲ得但シ每週教授時數ノ合計男兒ニ在リテハ三十時女兒ニ在リテハ三十二時ヲ超ユルコトヲ得ス

實習ニ關シテハ規定ノ教授時數外ニ涉リテ尙之ヲ課スルコトヲ得

(第四號乃至第九號様式) 略

改正臺灣教育令第十一條に依れば國語を常用する者の初等普通教育は原則として小學校令に依るのであるが臺灣特殊

の事情に依り特例を設くる必要あるものに就ては臺灣總督に於て別段の定を爲し得ることとなつて居る、故に右の小學校規則に定むる所は必ずしも小學校令の規定と同一ではない。義務教育の制度の如きも臺灣には施行せられて居らぬ。

同日臺灣總督府令第六十五號を以て左の如く臺灣公立公學校規則が定められた。

臺灣公立公學校規則左ノ通相定ム

臺灣公立公學校規則

第一章 總則

第一條 公學校ハ市街庄立トス但シ市街庄組合立又ハ街庄組合立ト爲スコトヲ得

市街庄ナキ地ニ於テハ州立又ハ廳地方費立トス

第二條 公學校ハ之ヲ設立スル團體ノ代表者ニ於テ之ヲ管理ス

第三條 國語ヲ常用スル者ニシテ公學校ニ入學セムトスル者アルトキハ學校長ハ州知事又ハ廳長ノ許可ヲ受ケ之ヲ入學セシムルコトヲ得

第四條 本令中ノ認可ハ特ニ定ムル場合ノ外市街庄立、市街庄組合立又ハ街庄組合立ノ公學校ニ關シテハ州知事又ハ廳長ニ於テ其ノ他ノ公學校ニ關シテハ臺灣總督ニ於テ之ヲ爲スモノトス

第二章 設立及廢止

第五條 公學校ヲ設立セムトスルトキハ設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ認可ヲ受クヘシ

一 學校ノ名稱

二 位置

位置ハ州廳都市街庄區大字字地番ヲ記スヘシ

三 學級數

學級編制表ヲ添附スヘシ

四 修業年限

五 授業料ヲ徵收スルトキハ其ノ月額及徵收方法

六 第十七條第三項又ハ第十八條第三項ノ教科目ニ關スル事項及之ヲ關クトキハ他ノ各教科目ノ每週教授時數、第十七條第二項又ハ第十八條第四項ノ實科中ノ種類ニ關スル事項並修業年限四年ノ公學校ニ在リテハ第三十七條別記第二號表中其ノ依ルヘキ每週教授時數表ニ關スル事項

七 授業開始期日

八 校地、校舍、寄宿舎及職員宿舍ニ關スル事項

校地ニ付テハ地番甲數ヲ記シタル圖面、建物ニ付テハ配置圖ヲ添附スヘシ但シ建物ヲ新築、増築又ハ改築スル場合ハ矩計圖及設計仕様書ヲ添附スヘシ

九 農業ヲ課スル學校ニ在リテハ農業實習地ノ位置及甲數

位置ハ州廳都市街庄區大字字地番ヲ記スヘシ

十 通學區域

適宜ノ符號ヲ用キ公學校ノ位置、州廳都市街庄區大字字等ノ區劃、通路、河川及方位等ヲ記シタル地圖ヲ

十一 通學區域内州廳郡市街庄區大字別ノ戸數、人口及通學距離  
十二 一年ノ收支概算

前項第一號乃至第十號ノ事項ヲ變更セムトスルトキハ設立者ニ於テ事由ヲ具シ認可ヲ受クヘシ

第六條 就學兒童ノ教育事務ヲ委託セムトスルトキハ關係市尹、街庄長又ハ市街庄組合若ハ街庄組合ノ代表者ニ於テ協定事項ヲ具シ認可ヲ受クヘシ之ヲ廢止セムトスルトキ又ハ協定事項ヲ變更セムトスルトキ亦同シ

第七條 公學校ノ設立者ヲ變更セムトスルトキハ關係設立者ニ於テ其ノ事由及協定事項ヲ具シ認可ヲ受クヘシ

第八條 公學校ヲ廢止セムトスルトキハ設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ認可ヲ受クヘシ

一 事由

二 廢止期日

三 兒童ノ處分方法

第九條 特別ノ事情アルトキハ公學校ニ分教場ヲ設クルコトヲ得

分教場ノ設置及廢止ニ關シテハ第五條乃至第八條ノ例ニ依ル

第十條 公學校ノ高等科ヲ設置セムトスルトキハ設立者ニ於テ第五條第一項第一號、第三號、第五號及第七號乃至第十二號ノ事項、第二十條第三項ノ教科目ニ關スル事項及之ヲ關クトキハ他ノ各教科目ノ每週教授時數並第二十條第二項ノ實科中ノ種類ニ關スル事項ヲ具シ認可ヲ受クヘシ

前項ノ事項ヲ變更セムトスルトキハ設立者ニ於テ其ノ事由ヲ具シ認可ヲ受クヘシ但シ第五條第一項第十一號及第十二號ノ事項ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

十二號ノ事項ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第十一條 公學校ニ補習科ヲ設置セムトスルトキハ設立者ニ於テ第五條第一項第一號、第三號乃至第五號、第七號乃至第十二號及左ノ事項ヲ具シ認可ヲ受クヘシ

一 教科目及其ノ每週教授時數

二 教授日及教授時間

前項ノ事項ヲ變更セムトスルトキハ設立者ニ於テ其ノ事由ヲ具シ認可ヲ受クヘシ但シ第五條第一項第十一號及第十二號ノ事項ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第十二條 高等科又ハ補習科ヲ廢止セムトスルトキハ設立者ニ於テ高等科ニ在リテハ第八條各號ノ事項、補習科ニ在リテハ其ノ事由及廢止期日ヲ具シ認可ヲ受クヘシ

第十三條 州知事又ハ廳長ニ於テ公學校又ハ其ノ分教場ノ設立、廢止ヲ認可シタルトキハ學校ノ名稱、位置、修業年限及設立團體名ヲ告示スヘシ其ノ變更ヲ認可シタルトキ亦同シ

第十四條 公學校ニ幼稚園、盲啞學校、實業補習學校ヲ併置スルコトヲ得

第三章 修業年限、教科目、教則及教科目圖書

第十五條 公學校ノ修業年限ハ土地ノ情況ニ依リ四年又ハ三年ト爲スコトヲ得

第十六條 補習科ノ修業年限ハ二年内トス

第十七條 修業年限六年ノ公學校ノ教科目ハ修身、國語、算術、日本歴史、地理、理科、圖畫、唱歌、體操、實科、裁縫及家事トシ隨意科目トシテ漢文ヲ加フ

實科ハ農業、商業、手工ニ分チ其ノ一種又ハ二種ヲ男兒ニ課シ裁縫及家事ハ之ヲ女兒ニ課ス  
土地ノ情況ニ依リ漢文、裁縫及家事ハ之ヲ闕クコトヲ得

第十八條 修業年限四年ノ公學校ノ教科目ハ修身、國語、算術、圖畫、唱歌、體操、裁縫及家事トシ隨意科目トシテ漢文ヲ加フ

裁縫及家事ハ之ヲ女兒ニ課ス

土地ノ情況ニ依リ圖畫、漢文、裁縫及家事ハ之ヲ闕クコトヲ得

土地ノ情況ニ依リ實科ヲ加フルコトヲ得但シ實科ハ農業、手工ニ分チ其ノ一種ヲ課スルコトヲ得

第十九條 修業年限三年ノ公學校ノ教科目ハ修身、國語、算術、唱歌、體操、實科トス

實科ニ關シテハ前條第四項ノ規定ヲ準用ス

第二十條 高等科ノ教科目ハ修身、國語、算術、日本歴史、地理、理科、唱歌、體操、實科、裁縫及家事トシ隨意科目トシテ圖畫、漢文ヲ加フ

實科ハ農業、商業、手工ニ分チ其ノ一種又ハ二種ヲ男兒ニ課シ裁縫及家事ハ之ヲ女兒ニ課ス

土地ノ情況ニ依リ圖畫、漢文ハ之ヲ闕クコトヲ得

第二十一條 補習科ノ教科目ハ修業年限六年ノ公學校ニ在リテハ第十七條、修業年限四年ノ公學校ニ在リテハ第十八條ノ教科目中ニ就キ之ヲ定ムヘシ但シ修身、國語、算術ハ之ヲ闕キ又ハ之ヲ隨意科目ト爲スコトヲ得ス

第二十二條 公學校ノ教科目中兒童身體ノ情況ニ依リ以習スルコト能ハサルモノアルトキハ學校長ニ於テ之ヲ兒童ニ課セサルコトヲ得

第二十三條 公學校ニ於テハ臺灣教育令第四條ノ旨趣ヲ遵守シテ兒童ヲ教育スヘシ

何レノ教科目ニ於テモ常ニ徳性ノ涵養ト國語ノ習熟トニ留意シテ國民ニ必要ナル性格ヲ陶冶セムコトヲ務ムヘシ  
知識技能ハ常ニ土地ノ情況ニ顧ミ生活ニ必須ナル事項ヲ選ヒテ之ヲ教授シ反覆練習シテ實用ニ適セシメムコトヲ務ムヘシ

何レノ教科目ニ於テモ其ノ教授ハ兒童ノ心身發達ノ程度ニ副ハムコトヲ要ス

男女ノ特性及其ノ將來ノ生活ニ注意シテ各適當ノ教育ヲ施サムコトヲ務ムヘシ

各教科目ノ教授ハ其ノ目的及方法ヲ誤ルコトナク互ニ相聯絡シテ補益セムコトヲ要ス

第二十四條 修身ハ教育ニ關スル勅語ノ旨趣ニ基キテ兒童ノ徳性ヲ涵養シ道德ノ實踐ヲ指導スルヲ以テ要旨トス  
修身ハ初ハ近易適切ナル事項ニ付人倫道德ノ要旨ヲ授ケ漸ク進ミテハ國家及社會ニ對スル責務ノ一斑ニ及ホシ以テ品位ヲ高メ志操ヲ固クシ國法ニ遵ヒ公德ヲ尙ヒ公益ニ盡スノ氣風ヲ養ハムコトヲ務ムヘシ

高等科ニ於テハ前項ノ旨趣ヲ擴メテ一層陶冶ノ功ヲ堅實ナラシメムコトヲ務ムヘシ  
女兒ニ在リテハ特ニ貞淑ノ徳ヲ養ハムコトニ注意スヘシ

修身ヲ授クルニハ嘉言、善行、諺辭等ニ基キテ勸戒シ常ニ之ヲ服膺セシメムコトヲ務メ又普通ノ作法ニ嫻ハシムヘシ

第二十五條 國語ハ普通ノ言語、文章ヲ知ラシメ正確ニ思想ヲ發表スルノ能ヲ養ヒ兼テ智徳ヲ啓發シ特ニ國民精神ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス

國語ハ初ハ主トシテ話シ方ニ依リテ近易ナル口語ヲ授ケ漸次讀ミ方、書キ方、綴リ方ヲ課シ進ミテハ平易ナル文

語ヲ加フヘシ

高等科ニ於テハ稍進ミタル程度ニ於テ話シ方、讀ミ方、書キ方、綴リ方ヲ課スヘシ  
國語ハ平易ニシテ模範トナルヘキモノヲ選ヒ其ノ材料ハ修身、歴史、地理、理科、家事其ノ他生活上必須ナル事  
項ニ取り趣味ニ富ムモノタルヘシ

國語ヲ授クルニハ常ニ其ノ意義ヲ明瞭ニシ又發音及語調ヲ正確、流暢、雅馴ナラシメ且其ノ用法ニ習熟セシメム  
コトヲ務ムヘシ

書キ方ハ實用ヲ旨トシ假名及漢字ヲ練習セシムヘシ漢字ノ書體ハ楷書、行書ノ二種トシ高等科ニ於テハ草書ヲ加  
フ

綴リ方ハ主トシテ口語體ヲ用キ其ノ行文ハ旨趣明瞭ナラムコトヲ要ス

話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方ハ各其ノ主トスル所ニ依リ教授時間ヲ區別スルコトヲ得ルモ特ニ注意シテ相聯  
絡セシメムコトヲ要ス

第二十六條 算術ハ日常ノ計算ニ習熟セシメ生活上必須ナル知識ヲ與ヘ兼テ思考ヲ精確ナラシムルヲ以テ要旨トス  
算術ハ整数ノ數ヘ方、書キ方及加減乗除ヲ授ケ進ミテハ小數、諸等數並簡易ナル分數、比例及歩合算ヲ授クヘシ  
高等科ニ於テハ前項ノ事項ニ付キ稍其ノ程度ヲ高メテ之ヲ授ケ應用練習ヲ十分ナラシムヘシ土地ノ情況ニ依リテ  
ハ日用簿記ノ大要ヲ授クルコトヲ得

算術ハ初ハ暗算ヲ用キ漸ク進ミテハ筆算ヲ併セ課スヘシ又珠算ヲ加フルコトヲ得

算術ノ材料ハ他ノ教科目ニ於テ授ケタル事項及土地ノ情況ヲ斟酌シテ日常生活ニ適切ナルモノヲ選フヘシ

算術ヲ授クルニハ理會ヲ精確ニシ暗算及運算ニ習熟シテ應用自在ナラシメ又計算ノ方法及理由ヲ正確ニ説明セシ  
ムコトヲ要ス

第二十七條 日本歴史ハ國體ノ大要ヲ知ラシメ國民精神ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス

日本歴史ハ建國ノ體制、皇統ノ無窮、歷代天皇ノ盛業、忠良賢哲ノ事蹟、文化ノ由來、外國トノ關係等ノ大要ヲ  
授ケ以テ國初ヨリ現時ニ至ルマテノ事歴ヲ知ラシムヘシ

高等科ニ於テハ前項ノ旨趣ヲ擴メテ稍詳ニ我國發達ノ蹟ヲ知ラシムヘシ

日本歴史ヲ授クルニハ成ルヘク圖畫、地圖、標本等ヲ示シ兒童ヲシテ當時ノ實狀ヲ想像シ易カラシメ特ニ修身ノ  
教授事項ト聯絡セシメムコトヲ要ス

第二十八條 地理ハ地球ノ表面及人類生活ノ狀態ニ關スル知識ノ一斑ヲ得シメ本邦國勢ノ大要ヲ理會セシメ兼テ愛  
國心ノ養成ニ資スルヲ以テ要旨トス

地理ハ本邦ノ地勢、氣候、區劃、都會、産業、交通等ヨリ始メ支那及南洋地理ノ大要ニ及ホシ進ミテハ本邦ト重要ナ  
ル關係ヲ有スル其ノ他ノ諸國ノ地理ニ關スル簡單ナル知識ヲ授ケ且地球ノ形狀、運動等ノ大要ヲ理會セシムヘシ  
高等科ニ於テハ各大洲ノ地勢、氣候、區劃、産業、交通等ノ概略ヨリ進ミテ本邦ト重要ナル關係ヲ有スル諸國ノ  
地理ノ大要、本邦ノ政治經濟上ノ狀態、外國ニ對スル地位等ノ大要ヲ知ラシメ又地文ノ一斑ヲ授クヘシ

地理ヲ授クルニハ成ルヘク實地ノ觀察ニ基キ又地球儀、地圖、標本、寫眞等ヲ示シテ確實ナル知識ヲ得シメ且日  
本歴史、理科等ノ教授事項ト聯絡セシメムコトヲ要ス

第二十九條 理科ハ通常ノ天然物及自然ノ現象ニ關スル知識ノ一斑ヲ得シメ其ノ相互及人生ニ對スル關係ノ大要ヲ

理會セシメ兼テ觀察ヲ精密ニシ自然ニ對スル趣味ヲ養フヲ以テ要旨トス  
理科ハ植物、動物、礦物及物理化學上ノ現象ニ付キ主トシテ兒童ノ目撃シ得ル事項ニシテ成ルヘク實際生活ニ密接ナル關係アルモノヲ選ヒテ教授シ又人身生理衛生ノ初歩ヲ授クヘシ  
高等科ニ於テハ前項ニ準シ漸ク其ノ程度ヲ進メテ之ヲ授クヘシ  
理科ニ於テハ力メテ農事、水産、工業、家事等ニ適切ナル事項ヲ授ケ特ニ植物、動物等ニ付教授スル際ニハ其ノ重要ナル加工品ノ製法、效用等ノ概略ヲ知ラシムヘシ  
理科ヲ授クルニハ成ルヘク實地ノ觀察ニ基キ又ハ標本、模型、圖畫等ヲ示シ又ハ簡單ナル實驗ニ依リ明瞭ニ理會セシムムコトヲ要ス

第三十條 圖畫ハ通常ノ形體ヲ描クノ能ヲ得シメ兼テ美感ヲ養フヲ以テ要旨トス

圖畫ハ成ルヘク兒童ノ日常目撃セル事物ヲ選ヒ寫生畫ヲ主トシ適宜臨畫、考案畫等ヲ交ヘ課スヘシ  
高等科ニ於テハ前項ニ準シ漸ク其ノ程度ヲ進メテ之ヲ授クヘシ土地ノ情況ニ依リテハ簡易ナル幾何畫ヲ授クルコトヲ得

圖畫ヲ授クルニハ形體ヲ看取シテ正シク之ヲ描カシメ且意匠ヲ練ラシメ兼テ清潔ヲ好ミ綿密ヲ尙フノ習慣ヲ養ハムコトニ注意スヘシ

第三十一條 唱歌ハ平易ナル歌曲ヲ唱フコトヲ得シメ美感ヲ養ヒ徳性ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス

唱歌ハ平易ナル單音唱歌ヲ授クヘシ又便宜簡易ナル複音唱歌ヲ授クルコトヲ得  
高等科ニ於テハ前項ニ準シ稍進ミタル程度ニ於テ之ヲ授クヘシ

歌詞及曲譜ハ平易雅正ニシテ兒童ノ心情ニ適シ且之ヲ快活純美ナラシムルモノタルヘシ

第三十二條 體操ハ身體ノ各部ヲ均齊ニ發育セシメ動作ヲ機敏ニシ以テ健康ヲ保護増進シ精神ヲ快活ニシテ剛毅ナラシメ兼テ規律ヲ守リ協同ヲ尙フノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス

體操ハ體操、教練及遊戲ニ付簡易ナル動作ヨリ始メ漸ク其ノ程度ヲ進メテ之ヲ授クヘシ

高等科ニ於テハ前項ニ準シ一層其ノ程度ヲ進メテ之ヲ授クヘシ

體操ハ男兒及女兒ノ別ニ依リ其ノ授クヘキ事項ヲ斟酌スヘク又便宜運動生理ノ初歩ヲ知ラシムヘシ

土地ノ情況ニ依リ體操ノ教授時間ノ一部又ハ教授時間ノ外ニ於テ適宜ノ戶外運動ヲ爲サシメ又ハ水泳ヲ授クルコトアルヘシ

第三十三條 實科ハ實業ニ關スル近易ノ知識技能ヲ修得セシメ勤勞ヲ尙ヒ實業ヲ重ムスルノ氣風ヲ養フヲ以テ要旨トス

實科ハ土地ノ情況ニ適切ナルモノヲ選ヒ實際ノ業務ニ必要ニシテ兒童ノ理會シ易キモノヲ授クヘシ

農業ハ栽培、肥料、養畜、養蠶、森林、水産等ニ就キ土地ノ情況ニ適切ナルモノヲ授ケ且實習ヲ課スヘシ

高等科ニ於テハ前項ニ準シ一層其ノ程度ヲ進メテ之ヲ授クヘシ

商業ハ取引、記帳、計算等ニ付平易適切ナル事項ヲ授クヘシ

高等科ニ於テハ前項ニ準シ一層其ノ程度ヲ進メ更ニ金融、運輸、保險其ノ他商業ニ關スル重要ナル事項ノ大要ヲ授ケ且簡易ナル商用簿記ヲ授クヘシ

手工ハ植物纖維、竹、木、粘土、金屬等ニ付キ其ノ土地ニ於テ得易キ材料ヲ用キ成ルヘク實用ニ適スルモノヲ作

ラシムヘシ

高等科ニ於テハ前項ニ準シ一層其ノ程度ヲ進メ且簡易ナル製圖ヲ併セ課スヘシ  
手工ヲ授クル際ニハ用具ノ取扱方、材料ノ品類、性質、價格等ヲ教示スヘシ  
實科ヲ授クルニハ常ニ經濟ニ留意セシムコトニ務ムヘシ

第三十四條 裁縫及家事ハ女子ニ須要ナル普通ノ技藝及近易ナル家事上ノ知識ヲ得シメ兼テ勤儉、整頓、清潔、利用ノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス

裁縫ハ運針法ヨリ始メ通常ノ衣類ノ縫ヒ方、繕ヒ方、裁チ方ニ及ホシ又便宜繕ヒ方、編ミ方等ヲ授クヘシ  
高等科ニ於テハ前項ニ準シ漸ク其ノ程度ヲ進メテ之ヲ授クヘシ

家事ハ衣食住、看護、飼養等ニ付簡易適切ナル事項ヲ授ケ且實習ヲ課スヘシ

高等科ニ於テハ前項ニ準シ漸ク其ノ程度ヲ進メ更ニ育兒其ノ他一家ノ經濟ニ關スル事項ノ大要ヲ授クヘシ  
裁縫及家事ヲ授クルニハ質素節約ヲ旨トシ其ノ材料ハ成ルヘク日常所用ノモノニ取り用具ノ使用法、材料ノ品類、性質、價格等ヲ教示スヘシ

第三十五條 漢文ハ普通ノ漢字及漢文ヲ理會シ日常ノ用務ヲ辨スルノ能ヲ得シメ兼テ徳性ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス

漢文ハ實用ニ適スルモノヲ選ヒ初ハ簡易ナル文字及短句ヲ授ケ短文ノ讀ミ方、綴リ方ニ及ヒ漸ク進ミテハ平易ナル書翰文及普通文ヲ授クヘシ

高等科ニ於テハ稍進ミタル程度ニ於テ讀ミ方、綴リ方ヲ授クヘシ

漢文ヲ授クルニハ常ニ其ノ意義ヲ明瞭ニシ成ルヘク國語ヲ用キテ其ノ意義ヲ解釋セシメ且其ノ應用ニ務メシムヘシ

第三十六條 補習科ノ教科ヲ授クルニハ其ノ土地ノ業務ニ適切ナル事項ヲ交フヘシ

第三十七條 各學年ノ教授ノ程度及毎週教授時數ハ修業年限六年ノ公學校ニ在リテハ別記第一號表、修業年限四年ノ公學校ニ在リテハ別記第二號表其ノ一又ハ其ノ二、修業年限三年ノ公學校ニ在リテハ別記第三號表ニ依ルヘシ  
高等科ノ教授ノ程度及毎週教授時數ハ別記第四號表ニ依ルヘシ

第十七條第三項、第十八條第二項又ハ第二十條第三項ニ依リ關キタル教科目ノ毎週教授時數ハ之ヲ他ノ教科目ノ毎週教授時數ニ加フヘシ

第三十八條 學校長ハ夏季休業前後各四週内ニ於テ毎週教授時數中九時内ヲ減スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ教授時數ヲ減スルトキハ學校長ニ於テ便宜各教科目ノ毎週教授時數ヲ斟酌スヘシ

第三十九條 土地ノ情況ニ依リ公學校又ハ其ノ分教場ニ於テ全部又ハ一部ノ兒童ヲ前後二部ニ分チテ教授スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ二部教授ヲ爲サムトスルトキハ設立者ニ於テ各教科目ノ毎週教授時數ヲ具シ認可ヲ受クヘシ但シ州立又ハ廳地方費立ノ公學校ニ關シテハ設立者限り之ヲ行フコトヲ得

第四十條 特別ノ事情アルトキハ設立者ニ於テ認可ヲ受ケ左ノ制限内ニ於テ第三十七條ノ規定ニ依ル時數ヲ増減スルコトヲ得

一 公學校ノ毎週教授時數ハ三十三時ヲ超エ又ハ十八時ヲ下ルコトヲ得ス

二 高等科ノ毎週教授時數ハ三十三時ヲ超エ又ハ二十四時ヲ下ルコトヲ得ス  
前條ノ規定ニ依リ二部教授ヲ爲ス場合ニ於テハ毎週教授時數ハ各部二十一時以上トス但シ第一學年及第二學年ニ在リテハ十八時迄減スルコトヲ得

第四十一條 公學校ニ於テ數學年ノ兒童ヲ一學級ニ編制スルトキハ各學年ノ程度ニ拘ラス全部又ハ一部ノ兒童ヲ同一ノ程度ニ依リ教授スルコトヲ得

第四十二條 補習科ノ教授ハ設立者ニ於テ認可ヲ受ケ一定ノ季節ヲ選ヒテ之ヲ爲スコトヲ得

第四十三條 學校長ハ其ノ公學校ニ於テ教授スヘキ各教科目ノ教授細目ヲ定ムヘシ

第四十四條 公學校ニ於テ各學年ノ課程ノ修了又ハ全教科ノ卒業ヲ認ムルニハ別ニ試験ヲ用キルコトナク兒童平素ノ成績ヲ考查シテ之ヲ定ムヘシ

第四十五條 學校長ハ修業年限ノ終ニ於テ公學校又ハ其ノ高等科ノ教科ヲ卒業セリト認メタル者ニハ卒業證書ヲ授與スヘシ

前項ノ卒業證書ハ別記第五號様式又ハ別記第六號様式ニ依ルヘシ

第四十六條 學校長ハ學年末ニ於テ各學年ノ課程ヲ修了セリト認メタル者ニハ修業證書ヲ、第四十一條ノ規定ニ依リ一學年間學習セシ者ニハ學習證書ヲ授與スルコトヲ得

前項ノ修業證書ハ別記第七號様式、學習證書ハ別記第八號様式ニ依ルヘシ

第四十七條 學校長ハ補習科ヲ修了シタル者ニ修了證書ヲ授與スルコトヲ得  
前項ノ修了證書ハ別記第九號様式ニ依ルヘシ

第四十八條 公學校ノ教科用圖書ハ臺灣總督府ニ於テ著作權ヲ有スルモノタルヘシ

前項ノ圖書ナキトキハ州知事又ハ廳長ニ於テ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ其ノ他ノ圖書ヲ使用セシムルコトヲ得

第四十九條 補習科ノ教科用圖書ハ州知事又ハ廳長ノ認可ヲ受ケ學校長之ヲ定ム

第四章 學年、休業日及式日

第五十條 公學校ノ學年ハ四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

學年ヲ分チテ左ノ三學期トス

第一學期 四月一日ヨリ八月二十日迄

第二學期 八月二十一日ヨリ十二月三十一日迄

第三學期 翌年一月一日ヨリ三月三十一日迄

(編者註・第五十一條は原文になし)

第五十二條 毎日ノ教授始終ノ時限ハ學校長之ヲ定ムヘシ

第五十三條 公學校ノ休業日ハ左ノ如シ

一 祭日、祝日

二 臺灣神社例祭日、始政記念日

三 日曜日

四 夏季休業 七月一日ヨリ八月二十日迄

五 年末年始休業 十二月二十九日ヨリ翌年一月五日迄



六 學年末休業 三月二十九日ヨリ同月三十一日迄

學校長ニ於テ必要ト認ムルトキハ前項第三號乃至第六號ノ休業日中適宜教授ヲ爲スコトヲ得

第五十四條 前條ノ外臨時休業ヲ要スルトキハ學校長ニ於テ其ノ事由及之カ爲ニ減スル各教科目教授ノ補充方法ヲ具シ州知事又ハ廳長ノ認可ヲ受クヘシ

非常變災其ノ他急迫ノ場合ニ際シ前項ノ認可ヲ受クル暇ナキトキハ學校長ニ於テ臨時休業ヲ爲スコトヲ得

第五十五條 傳染病豫防ノ爲必要アルトキ其ノ他非常變災アルトキハ州知事若ハ廳長又ハ郡守ニ於テ臨時休業ヲ命スルコトヲ得

第五十六條 公學校ノ教授日數ハ毎年二百三十日ヲ下ルコトヲ得ス但シ補習科ハ此ノ限ニ在ラス

特別ノ事情アルトキハ州知事又ハ廳長ニ於テ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ前項ノ日數ヲ減スルコトヲ得

第五十七條 紀元節、天長節祝日、一月一日及始政記念日ニ於テハ職員及兒童學校ニ參集シ左ノ順序ニ從ヒ儀式ヲ行フヘシ

一 職員及兒童「君カ代」ヲ合唱ス

二 職員及兒童ハ

天皇陛下

皇后陛下ノ御影ニ對シ奉リ最敬禮ヲ行フ

三 學校長ハ教育ニ關スル勅語ヲ奉讀ス

四 學校長ハ教育ニ關スル勅語ニ基キ聖旨ノ在ル所ヲ誨告ス

五 職員及兒童ハ其ノ祝日ニ相當スル唱歌ヲ合唱ス

御影ヲ拜戴セサル學校ニ於テハ前項第二號ノ式ヲ闕ク

第五十八條 臺灣神社例祭日ニハ職員及兒童學校ニ參集シ學校長ハ臺灣神社ニ關スル誨告ヲ爲シ一同北白川宮能久親王ヲ奉祀セル神社ニ參拜又ハ遙拜ヲ爲スヘシ

### 第五章 編制及職員

第五十九條 公學校ノ學級數ハ十八學級以下トス

特別ノ事情アルトキハ設立者ニ於テ認可ヲ受ケ前項ノ制限ニ依ラサルコトヲ得

一分教場ノ學級數ハ六學級以下トシ第一項ノ制限外ト爲スコトヲ得

第六十條 補習科ノ教授時間ヲ正教科ノ教授時間外ニ定メタルトキハ其ノ學級數ハ前條ニ規定シタル學級數ノ制限

外トス

第六十一條 一學級ノ兒童數ハ六十人ヲ標準トシ特別ノ事情アルトキハ十人迄ヲ増スコトヲ得

第六十二條 公學校第五學年以上ニ於テ女兒ノ數四十人以上ナルトキハ男女ニ依リ學級ヲ別ツヘシ

特別ノ事情アルトキハ前項ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

第六十三條 補習科ノ學級ハ男女ヲ合シテ之ヲ編制スルコトヲ得ス但シ其ノ教授時間ヲ正教科ノ教授時間内ニ定メ

タルトキハ前條ノ規定ヲ準用スルコトヲ得

第六十四條 修身、圖畫、唱歌、體操、實科、裁縫及家事ハ數學級ノ全部又ハ一部ノ兒童ヲ合セテ同時ニ之ヲ教授スルコトヲ得但シ實科、裁縫及家事ニ付テハ兒童七十人ヲ超エサル場合ニ限ル

第六十五條 公學校ニ於テハ各學級ニ訓導一人ヲ置クヘシ

特別ノ事情アルトキハ前項ノ外尙訓導ヲ置キ兒童ノ教授ヲ補助セシムルコトヲ得

二部教授ヲ爲ス場合ニ於テハ前後二學級毎ニ訓導一人ヲ置クコトヲ得

前三項ノ外學校長ノ擔任スル教授ヲ補助スル爲メ訓導一人ヲ置クコトヲ得

前四項ニ規定シタル訓導三分ノ二以内ハ准訓導ヲ以テ之ニ代用スルコトヲ得若シ准訓導ヲ得難キトキハ其ノ他ノ者ヲ以テ之ニ代用スルコトヲ得

第六十六條 前條ノ外適宜專科教員ヲ置クコトヲ得

第六十七條 補習科ノ教授時間ヲ正教科ノ教授時間外ニ定メタルトキハ正教科ヲ教授スル教員ヲシテ之ヲ擔任セシムルコトヲ得

第六十八條 訓導ニシテ陸軍一年現役ニ服スル者ハ第六十五條第一項ノ定員外トス

第六十九條 公學校ノ正教員免許狀又ハ之ト同一ノ效力アル教員免許狀ヲ有スル者ニ非サレハ訓導ト稱スルコトヲ得ス

第七十條 公學校ノ准教員免許狀又ハ之ト同一ノ效力アル教員免許狀ヲ有スル者ニ非サレハ准訓導ト稱スルコトヲ得ス

第七十一條 訓導又ハ准訓導以外ノ教員ハ之ヲ教員心得ト稱ス

第七十二條 公學校ノ職員ノ職務ニ關スル規程ハ州知事又ハ廳長之ヲ定ム

### 第六章 設備

第七十三條 公學校ニ於テハ校地、校舎、體操場、校具及職員宿舍ヲ備フヘシ

農業ヲ課スル學校ニ於テハ實習地ヲ備フヘシ

第七十四條 公學校ノ設備ハ其ノ規模ニ適應スルヲ要ス校地ハ兒童ノ通學ニ便利ニシテ衛生ニ適シ道德上及教授上ニ害無ク且危險ナル場所ニ接近セサルコトヲ要ス

校舎ハ教授上、管理上及衛生上適當ニシテ質朴堅牢ナルコトヲ要ス

第七十五條 補習科ノ教場ハ正教科ヲ授クル校舎外ニ之ヲ設クルコトヲ得

第七十六條 校舎、校地、校具及體操場ハ非常變災ノ場合ヲ除クノ外公學校ノ目的以外ニ之ヲ使用スルコトヲ得ス但シ教育、兵事、産業、衛生、慈善等ノ目的ノ爲特別ノ必要アルトキハ此ノ限ニ在ラス

### 第七章 入學、退學及懲戒

第七十七條 公學校ニ入學スルコトヲ得ル者ノ年齢ハ其ノ年三月三十一日ニ於テ六年以上タルコトヲ要ス

第七十八條 兒童ノ入學ハ學年ノ始トス但シ學校長ニ於テ特別ノ事情アリト認メタル者ハ此ノ限ニ在ラス

第七十九條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ高等科第一學年ノ入學ニ關シ修業年限六年ノ公學校卒業者ト同等以上ノ學力アリト認ム

一 尋常小學校卒業者

二 中學校又ハ高等學校ノ豫科ヲ修了シタル者

三 年齢十二年以上ニシテ修業年限六年ノ公學校卒業ノ程度ニ依ル試験ニ合格シタル者

第八十條 修業年限六年ノ公學校ノ補習科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ修業年限六年ノ公學校ヲ卒業シタル者又ハ前

條各號ノ一ニ該當スル者タルヘシ

修業年限四年ノ公學校ノ補習科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ修業年限四年ノ公學校ヲ卒業シタル者又ハ年齡十年以上ニシテ修業年限四年ノ公學校卒業ノ程度ニ依ル試験ニ合格シタル者タルヘシ

第八十一條 公學校ニ兒童ヲ入學セシムトスルトキハ保護者ニ於テ學校長ニ願出ツヘシ

第八十二條 學校長ハ入學シタル兒童ニ付別記第十號様式ニ依リ學籍簿ヲ編制スヘシ

學籍簿記載ノ事項ニ異動ヲ生シタルトキハ遲滞ナク之ヲ加除訂正スヘシ

第八十三條 兒童他ノ公學校ニ轉學シタルトキハ學校長ハ學籍簿寫ヲ轉學先學校長ニ送付スヘシ

第八十四條 學校長ハ別記第十一號様式ニ依リ出席簿ヲ作り兒童ノ出席缺席ヲ明ニスヘシ

第八十五條 學校長ハ傳染病ニ罹リ若ハ其ノ虞アル兒童又ハ性行不良ニシテ他ノ兒童ノ教育ニ妨アリト認メタル兒童ノ出席ヲ停止スルコトヲ得

第八十六條 學校長及教員ハ教育上必要ト認メタルトキハ兒童ニ懲戒ヲ加フルコトヲ得但シ體罰ヲ加フルコトヲ得ス

第八十七條 學校長ハ在學兒童ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スル者アルトキハ監督官廳ノ認可ヲ受ケ退學ヲ命スルコトヲ得

一 性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者

二 引續キ三月以上缺席シタル者

三 正當ノ事由ナクシテ引續キ一月以上缺席シタル者

第八十八條 兒童ヲ退學セシムトスルトキハ保護者ニ於テ學校長ニ届出ツヘシ

### 第八章 授業料

第八十九條 公學校ニ於テハ授業料ヲ徴收スルコトヲ得

第九十條 公學校ニ於テ徴收スル授業料ハ一月五十錢以下ニ於テ之ヲ定ムヘシ但シ高等科及補習科ニ限り七十錢迄増額スルコトヲ得

前項ノ授業料額ハ學年ニ依リ差等ヲ設クルコトヲ得ス

第九十一條 公學校ノ授業料ハ學校ヲ設置スル團體ノ收入トス

第九十二條 授業料ハ保護者ニ於テ之ヲ納付スヘシ

第九十三條 兒童他ノ公學校ニ轉學シタルトキハ其ノ翌月以後ノ既納ノ授業料ハ之ヲ保護者ニ還付スヘシ

第九十四條 夏季休業若ハ學校ノ都合ニ依リ休業全月ニ互リタルトキ又ハ兒童ノ病氣其ノ他正當ノ事由ニ依リ缺席全月ニ互リタルトキハ其ノ月分ノ授業料ヲ徴收スルコトヲ得ス

第九十五條 貧窮ノ爲授業料ヲ納ムルコト能ハサル者ニ對シテハ設立者ニ於テ授業料ノ全部又ハ一部ヲ免除スルコトヲ得

一家二人以上同時ニ公學校ニ在學スルトキハ設立者ハ授業料額ヲ減スルコトヲ得

第九十六條 公學校ニ入學シタル兒童ニシテ他ノ公學校ニ於テ既ニ其ノ月分ノ授業料ヲ納メタルトキハ再之ヲ徴收スルコトヲ得ス

### 附則

本令ハ大正十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス  
 大正十年府令第七十五號臺灣公學校規則及大正三年府令第三十號蕃人公學校規則ハ之ヲ廢止ス  
 本令施行ノ際現ニ存スル臺灣公立公學校及蕃人公學校又ハ其ノ分校ハ本令ニ依リ設立シタル公學校又ハ其ノ分教場トス

本令施行ノ際現ニ在學スル兒童ニ課スヘキ教科目及其ノ程度ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依リ又ハ之ヲ斟酌スルコトヲ得

(別記)

第一號表

修業年限六年ノ公學校各學年教授程度及每週教授時數表

學年	科目	時數	程度	
			數	時
第一學年	修身	二	二	道徳ノ要旨
第一學年	國語	三	三	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方
第一學年	算術	五	五	百以下ノ整數
第二學年	修身	二	二	道徳ノ要旨
第二學年	國語	三	三	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方
第二學年	算術	五	五	千以下ノ整數
第三學年	修身	二	二	道徳ノ要旨
第三學年	國語	四	四	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方
第三學年	算術	六	六	萬以下ノ整數
第四學年	修身	二	二	道徳ノ要旨
第四學年	國語	四	四	普通ノ話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方
第四學年	算術	六	六	整數、小數、諸等數(珠算加減)
第五學年	修身	二	二	道徳ノ要旨
第五學年	國語	四	四	普通ノ話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方
第五學年	算術	四	四	整數、小數、諸等數(珠算加減)
第六學年	修身	二	二	道徳ノ要旨
第六學年	國語	四	四	普通ノ話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方
第六學年	算術	四	四	分數、比例、珠算加減

日本歴史	地理	理科	圖畫	唱歌	體操	實科	裁縫及家事
			寫簡易ナル描	單音唱歌	三、體操、教練、遊戲		
			寫簡易ナル描	單音唱歌	三、體操、教練、遊戲		
			一、寫簡易ナル描	一、單音唱歌	二、體操、教練、遊戲		
		一、植物、動物、礦物及自然現象、通	一、寫簡易ナル描	一、單音唱歌	二、體操、教練、遊戲		女 二、簡易ナル裁縫及手藝
	二、日本地理ノ大要	二、植物、動物、礦物、自然現象、通	一、寫簡易ナル描	一、單音唱歌、複	二、體操、教練、遊戲	男 四、商業ノ大要	女 五、簡易ナル裁縫及手藝、大要
二、前學年ノ續	前學年ノ續	植物、動物、礦物、自然現象、通	一、寫簡易ナル描	一、單音唱歌	二、體操、教練、遊戲	農業ノ大要及實習	女 五、普通ノ裁縫及手藝、家事ノ大要及實習

計	漢文	第一學年		第二學年		第三學年		第四學年	
		時數	程度	時數	程度	時數	程度	時數	程度
(二)三	(二) 平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀
(二)四	(二) 平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀
男 二七 女 二九	(二) 平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀
男 三〇 女 三一	(二) 平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀
男 三〇 女 三一	(二) 平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀

一 本表教授時數ノ外圍畫ハ學校長ニ於テ第一學年、第二學年各每週一時ヲ課スルコトヲ得  
 二 本表教授時數ノ外實科、裁縫及家事ノ爲ニ學校長ニ於テ每週三時内實習ヲ課スルコトヲ得

第二號表

其ノ一

修業年限四年ノ公學校各學年教授程度及每週教授時數表

學年	科目	時數	程度	第一學年		第二學年		第三學年		第四學年	
				時數	程度	時數	程度	時數	程度	時數	程度
第一學年	修身	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨
第一學年	國語	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方
第一學年	算術	五	五百以下ノ整數	五	五百以下ノ整數	六	五百以下ノ整數	六	五百以下ノ整數	六	五百以下ノ整數
第一學年	圖畫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫
第二學年	修身	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨
第二學年	國語	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方
第二學年	算術	五	五百以下ノ整數	五	五百以下ノ整數	六	五百以下ノ整數	六	五百以下ノ整數	六	五百以下ノ整數
第二學年	圖畫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫
第三學年	修身	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨
第三學年	國語	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方
第三學年	算術	六	五百以下ノ整數	六	五百以下ノ整數	六	五百以下ノ整數	六	五百以下ノ整數	六	五百以下ノ整數
第三學年	圖畫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫
第四學年	修身	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨
第四學年	國語	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方	一	近易ナル話シ方、讀ミ方、綴リ方、書キ方
第四學年	算術	六	整數、小數、諸等數	六	整數、小數、諸等數	六	整數、小數、諸等數	六	整數、小數、諸等數	六	整數、小數、諸等數
第四學年	圖畫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫	簡易ナル描寫

第二號表

其ノ二

計	漢文	裁縫及家事	實科	體操	唱歌	第一學年		第二學年		第三學年		第四學年	
						時數	程度	時數	程度	時數	程度	時數	程度
(二)三	(二) 平易ナル短方、短文ノ讀			三	單音唱歌	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀
(二)四	(二) 平易ナル短方、短文ノ讀			三	單音唱歌	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀
男 二六 女 二九	(二) 平易ナル短方、短文ノ讀	女 三		二	單音唱歌	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀
男 二六 女 二九	(二) 平易ナル短方、短文ノ讀	女 三		二	單音唱歌	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀
男 二六 女 二九	(二) 平易ナル短方、短文ノ讀	女 三		二	單音唱歌	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀	二	平易ナル短方、短文ノ讀

一 本表教授時數ノ外圍畫ハ學校長ニ於テ第一學年、第二學年各每週一時ヲ課スルコトヲ得  
 二 實科ヲ課スルハ第四學年男兒ニ限リ每週三時内トス  
 三 本表及前號ノ教授時數ノ外實科、裁縫及家事ノ爲ニ學校長ニ於テ每週三時内實習ヲ課スルコトヲ得

修業年限四年ノ公學校各學年教授程度及每週教授時數表

科目 時數 程度	第一學年		第二學年		第三學年		第四學年	
	時數	程度	時數	程度	時數	程度	時數	程度
修身	一	道德ノ要旨	一	道德ノ要旨	一	道德ノ要旨	一	道德ノ要旨
國語	一〇	近易ナル話シ方、 讀ミ方、綴リ方、 書キ方	一〇	近易ナル話シ方、 讀ミ方、綴リ方、 書キ方	一〇	近易ナル話シ方、 讀ミ方、綴リ方、 書キ方	一〇	近易ナル話シ方、 讀ミ方、綴リ方、 書キ方
算術	五	百以下ノ整數	五	千以下ノ整數	五	萬以下ノ整數	五	整數、簡易ナル諸
圖畫					一	簡易ナル描寫	一	簡易ナル描寫
唱歌	二	單音唱歌	二	單音唱歌	一	單音唱歌	一	單音唱歌
體操	二	體操、教練、遊戯	二	體操、教練、遊戯	一	體操、教練、遊戯	一	體操、教練、遊戯
實科	五	耕作、除草、掃除、 製作等	五	栽培、飼育、製作、 加工等	五	栽培、飼育、製作、 加工、利用等	五	栽培、飼育、製作、 加工、利用等
裁縫及家事					女二 男二	簡易ナル裁縫、手 藝	女二 男二	簡易ナル裁縫、手 藝、近易ナル家事 實習
計	二三		二三		女二 男二		女二 男二	

一 本表ニ依ル公學校ニハ漢文ヲ關キ實科ヲ加フルモノトス  
二 本表教授時數ノ外實科、裁縫及家事ノ爲ニ學校長ニ於テ每週八時内實習ヲ課スルコトヲ得

第三號表

修業年限三年ノ公學校各學年教授程度及每週教授時數表

科目 時數 程度	第一學年		第二學年		第三學年	
	時數	程度	時數	程度	時數	程度
修身	一	道德ノ要旨	一	道德ノ要旨	一	道德ノ要旨
國語	一〇	近易ナル話シ方、 讀ミ方、綴リ方、 書キ方	一〇	近易ナル話シ方、 讀ミ方、綴リ方、 書キ方	一〇	近易ナル話シ方、 讀ミ方、綴リ方、 書キ方
算術	四	二十以下ノ整數	四	百以下ノ整數	五	整數、簡易ナル諸等數
唱歌	二	單音唱歌	二	單音唱歌	二	單音唱歌
體操	二	體操、教練、遊戯	二	體操、教練、遊戯	二	體操、教練、遊戯
實科	五	耕作、除草、掃除、 製作等	五	栽培、飼育、製作、 加工等	六	栽培、飼育、製作、 加工、利用等
計	二三		二三		二四	

一 本表教授時數ノ外實科ノ爲ニ學校長ニ於テ每週十時内實習ヲ課スルコトヲ得

第四號表

公學校高等科各學年教授程度及每週教授時數表

科目 時數 程度	第一學年		第二學年	
	時數	程度	時數	程度
修身	二	道德ノ要旨	二	道德ノ要旨
國語	九	普通ノ話シ方、 讀ミ方、綴リ方、 書キ方	九	普通ノ話シ方、 讀ミ方、綴リ方、 書キ方
計	一一		一一	



	國語	算術	歴史	地理	理科	圖畫	漢文
第五學年	公學國語讀本第二種 卷一、卷二 公學國語讀本第二種 卷一掛圖卷二掛圖 公學國語書キ方手本 第二種 公學國語讀本第三種 卷一 公學國語讀本第三種 卷一掛圖 公學校算術書 教師用第一學年					公學校圖畫帖 教師用第一學年 公學校圖畫帖 教師用第一學年 校用漢文讀本 卷一	
第六學年	公學國語讀本第二種 卷三、卷四 公學國語讀本第二種 卷三掛圖卷四掛圖 公學國語書キ方手本 第二種 公學國語讀本第三種 卷二 公學國語讀本第三種 卷二掛圖 公學校算術書 教師用第二學年					公學校圖畫帖 教師用第二學年 公學校圖畫帖 教師用第二學年 校用漢文讀本 卷二	
高等科第一學年	公學國語讀本第二種 卷五、卷六 公學國語讀本第二種 卷五掛圖卷六掛圖 公學國語書キ方手本 第二種 公學國語讀本第三種 卷三 公學國語讀本第三種 卷三掛圖 公學校算術書 兒童用第三學年					公學校圖畫帖 兒童用第三學年 公學校圖畫帖 教師用第三學年 校用漢文讀本 卷三	
高等科第二學年	公學國語讀本第二種 卷七、卷八 公學國語讀本第二種 卷七掛圖卷八掛圖 公學國語書キ方手本 第二種 公學國語讀本第三種 卷四 公學國語讀本第三種 卷四掛圖 公學校算術書 兒童用第四學年	公學校理科掛圖 第四學年用				公學校圖畫帖 兒童用第四學年 公學校圖畫帖 教師用第四學年 校用漢文讀本 卷四	

	國語	算術	歴史	地理	理科	圖畫	漢文
第五學年	公學國語讀本第二種 卷九、卷十 公學國語讀本第二種 卷九、卷十 公學國語書キ方手本 第二種 公學國語讀本第二種 第五學年用上、下 公學校算術書 兒童用第五學年 公學日本歷史 上卷 公學校地理書 兒童用卷一 公學校地理附圖 公學理科帖卷一 公學理科掛圖 第五學年用					公學校圖畫帖 兒童用第五學年 公學校圖畫帖 教師用第五學年 校用漢文讀本 卷五	
第六學年	公學國語讀本第二種 卷十一、卷十二 公學國語讀本第二種 卷十一、卷十二 公學國語書キ方手本 第二種 公學國語讀本第二種 第六學年用上、下 公學校算術書 兒童用第六學年 公學日本歷史 下卷 公學校地理書 兒童用卷二 公學校地理附圖 公學理科帖卷二 公學理科掛圖 第六學年用					公學校圖畫帖 兒童用第六學年 公學校圖畫帖 教師用第六學年 校用漢文讀本 卷六	
高等科第一學年							公學校漢文讀本 卷一
高等科第二學年							公學校漢文讀本 卷二



第三編 新領土其他に於ける教育

一一三二

備考 公用國語讀本公用國語書キ方手本及公用國語讀本掛圖第一種ハ修業年限六箇年ノ公學校ニ、第二種ハ主トシテ蕃人ノ子弟ヲ收容シタル修業年限四箇年又ハ六箇年ノ公學校ニ、第三種ハ主トシテ蕃人ノ子弟ヲ收容シタル修業年限三箇年又ハ四箇年ノ公學校ニ使用ス

大正十三年二月二十一日臺灣總督府告示第二十一號を以て左の如く公學校及公學校高等科に於て使用すべき教科用圖書中に改定が行はれた。

大正十二年告示第百一十一號公學校及公學校高等科ニ於テ使用スヘキ教科用圖書中國語、算術ノ項第三學年、第四學年ノ欄及理科ノ項第四學年、第五學年、第六學年ノ欄ヲ左ノ通改正シ大正十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

教科目	第三學年	第四學年
國語	公用國語讀本 第一種 卷五、卷六 公用國語讀本 第一種 卷五掛圖、卷六掛圖 公用國語書キ方手本 第一種 第三學年用上、下 公用國語讀本 第二種 卷五、卷六 公用國語讀本 第二種 卷五掛圖、卷六掛圖 公用國語書キ方手本 第二種 第三學年用上、下 公用國語讀本 第三種 卷三 公用國語讀本 第三種 卷三掛圖	公用國語讀本 第一種 卷七、卷八 公用國語讀本 第一種 卷七掛圖、卷八掛圖 公用國語書キ方手本 第一種 第四學年用上、下 公用國語讀本 第二種 卷七、卷八 公用國語讀本 第二種 卷七掛圖、卷八掛圖 公用國語書キ方手本 第二種 第四學年用上、下 公用國語讀本 第三種 卷四 公用國語讀本 第三種 卷四掛圖
算術	公用算術書 兒童用第三學年 公用算術書 教師用第三學年	公用算術書 兒童用第四學年 公用算術書 教師用第四學年

教科目	第四學年	第五學年	第六學年
理科	公用理科書 卷一 公用理科掛圖 第四學年用	公用理科書 卷二 公用理科掛圖 第五學年用	公用理科書 卷三 公用理科掛圖 第六學年用

大正十三年七月二十日臺灣總督府令第五十九號を以て左の如く臺灣公立小學校規則中に改正が行はれた。

大正十一年府令第六十四號臺灣公立小學校規則中左ノ通改正ス

第六條第一項第六號中「職員宿舍ニ關スル事項」ノ下ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ州立又ハ廳地方費立ノ小學校ニ付テハ職員宿舍ニ關スル事項ヲ除ク

第六條第三項ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ州立又ハ廳地方費立ノ小學校ニ係ル第六號中ノ建物ノ變更ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日又臺灣總督府令第六十號を以て左の如く臺灣公立公學校規則中に改正が行はれた。

大正十一年府令第六十五號臺灣公立公學校規則中左ノ通改正ス

第五條第一項第八號中「職員宿舍ニ關スル事項」ノ下ニ左ノ但書ヲ加フ

第三章 臺灣の教育

一一三三

但シ州立又ハ廳地方費立ノ公學校ニ付テハ職員宿舍ニ關スル事項ヲ除ク  
第五條第二項ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ州立又ハ廳地方費立ノ公學校ニ係ル第八號中ノ建物ノ變更ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十四年四月一日左記臺灣總督府告示第五十號が發せられた。

大正十二年告示第一百一號公學校及公學校高等科ニ於テ使用スヘキ教科用圖書中國語ノ項第五學年ノ欄中「公學  
民讀本卷九」ヲ「公學 校用 國語讀本第一種卷九」ニ、「公學 校用 國民習字帖第五學年用上」ヲ「公學 校用 國語書キ方手本第一種第  
五學年用上」ニ改メ算術ノ項第五學年ノ欄ニ「公學校算術書教師用第五學年」ヲ加フ

大正十四年六月十七日臺灣總督府令第三十五號を以て左の如く臺灣公立小學校規則中に改正が行はれた。

大正十一年府令第六十四號臺灣公立小學校規則中左ノ通改正ス

第五十二條中「八月二十日」ヲ「八月三十一日」ニ、「八月二十一日」ヲ「九月一日」ニ改ム

第五十四條中「七月一日ヨリ八月二十日迄」ヲ「七月十一日ヨリ八月三十一日迄」ニ改ム

第五十四條ノ二 州知事又ハ 長ハ必要ト認ムルトキハ前條ノ夏季休業日ヲ變更スルコトヲ得但シ其ノ日數ハ五十  
二日ヲ超ユルコトヲ得ス

夏季休業日ヲ變更シタルトキハ第五十二條ノ學期區分ニ於テ第一學期ハ夏季休業ノ最終日迄トス  
第五十五條中「前條ノ外」ヲ削ル

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日又臺灣總督府令第三十六號を以て左の如く臺灣公立公學校規則中に改正が行はれた。

大正十一年府令第六十五號臺灣公立公學校規則中左ノ通改正ス

第五十條中「八月二十日」ヲ「八月三十一日」ニ、「八月二十一日」ヲ「九月一日」ニ改ム

「第五十二條」ヲ「第五十一條」ニ、「第五十三條」ヲ「第五十二條」ニ、同條中「七月一日ヨリ八月二十日迄」ヲ

「七月十一日ヨリ八月三十一日迄」ニ改ム

第五十三條 州知事又ハ廳長ハ必要ト認ムルトキハ前條ノ夏季休業日ヲ變更スルコトヲ得但シ其ノ日數ハ五十二日  
ヲ超ユルコトヲ得ス

夏季休業日ヲ變更シタルトキハ第五十條ノ學期區分ニ於テ第一學期ハ夏季休業ノ最終日迄トス

第五十四條中「前條ノ外」ヲ削ル

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス





漢文	理科	理科	理科
校用漢文讀本 卷五	校用理科掛圖 卷二	校用理科掛圖 卷三	校用理科掛圖 卷三
校用漢文讀本 卷六	校用理科掛圖 卷六	高等小學新定畫帖 第一學年	高等小學新定畫帖 第二學年
高等科用漢文讀本卷一	高等小學新定畫帖 第一學年	高等小學新定畫帖 第一學年	高等小學新定畫帖 第二學年
高等科用漢文讀本卷二	高等小學新定畫帖 第二學年	高等小學新定畫帖 第二學年	高等小學新定畫帖 第二學年

昭和三年二月十日臺灣總督府告示第十八號を以て左の如く公學校に於て使用すべき教科用圖書中に改正が行はれた。  
 昭和二年告示第三號公學校ニ於て使用スヘキ教科用圖書中算術ノ項第四學年ノ欄ヲ左ノ通改正シ昭和三年四月一日ヨリ之ヲ實施ス

尋常小學算術書 第四學年  
 尋常小學算術書 第四學年  
 尋常小學算術書 第四學年

昭和三年三月二十八日左記臺灣總督府告示第三十七號が廢せられた。

昭和二年告示第三號公學校ニ於て使用スヘキ教科用圖書中修身ノ項第一學年ノ欄「公學校修身掛圖（甲組）ヲ「公學校修身掛圖（乙組）ヲ第一學年用

修身掛圖（甲組）ヲ「公學校修身掛圖（甲組）ヲ第一學年用  
 修身掛圖（乙組）ヲ「公學校修身掛圖（乙組）ヲ第一學年用  
 同上「下」ニ、同項第二學年ノ欄「公學校修身掛圖（甲組）ヲ「公學校修身掛圖（甲組）ヲ第二學年用  
 同上「下」ニ、同項第二學年ノ欄「公學校修身掛圖（乙組）ヲ「公學校修身掛圖（乙組）ヲ第二學年用

昭和三年四月二十八日臺灣總督府令第二十八號を以て左の如く臺灣公立小學校規則中に改正が行はれた。

大正十一年府令第六十四號臺灣公立小學校規則中左ノ通改正ス  
 第五十八條中「天長節祝日」ヲ「天長節、明治節」ニ改ム

附則  
 本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日又臺灣總督府令第二十九號を以て左の如く臺灣公立公學校規則中に改正が行はれた。

大正十一年府令第六十五號臺灣公立公學校規則中左ノ通改正ス  
 第五十七條中「天長節祝日」ヲ「天長節、明治節」ニ改ム

附則  
 本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

昭和三年五月十七日勅令第八十三號を以て左の如く大正十年勅令第八十九號「朝鮮臺灣關東州ニ於ケル官立公立學校  
 教官ニシテ一年現役ニ服スル者ノ給與ニ關スル件」中に改正が行はれた。  
 大正十年勅令第八十九號中左ノ通改正ス

「徴兵令第十四條ノ規定ニ依ル一年現役ニ服スル者ニハ其ノ在營中」ヲ「兵役法第十條ノ規定ニ依ル短期現役ニ服スル者ニハ其ノ現役中」ニ改ム

附則

本令ハ昭和三年四月分ヨリ之ヲ適用ス

右は前に述べた如く大正十四年に始められた陸軍現役將校の配屬に依る學校教練振作の結果、其學校を卒業して教員たる者の服すべき一年現役が實質的に短縮せられ、一年現役服役中なるも在營半箇年を過ぎたる後は歸休の形式に依り學校の職務に就き得ることとなつたので、其學校を離るる間即ち實際在營中俸給の三分の二を減ぜらるることとなつたのであるが、曩に徴兵令が兵役法と改められ、一年現役の制度が半箇年の短期現役に變更せられ、教員は從來の如く一年現役に服しながら在營半箇年の後歸休の形式に依り學校に歸任するといふが如き變則的方法に依らず、半箇年を以て正式に短期現役を終了することとなり、在營と服役とを區別する必要がなくなつたので、今回の改正を見るに至つたのである。

昭和四年一月十七日臺灣總督府告示第一號を以て左の如く公學校に於て使用すべき教科用圖書中に改正が行はれた。

昭和二年告示第三號公學校ニ於テ使用スヘキ教科用圖書中算術ノ項第五學年ノ欄ヲ左ノ通改正シ昭和四年四月一日ヨリ之ヲ實施ス

尋常小學算術書	第五學年
兒童用	
尋常小學算術書	第五學年
教師用	

昭和四年三月一日左記臺灣總督府告示第二十六號が發せられた。

昭和二年告示第三號公學校ニ於テ使用スヘキ教科用圖書中修身ノ項第三學年ノ欄「公學校修身掛圖」ヲ「公學校修身掛圖」第三學年用」ニ改メ昭和四年四月一日ヨリ之ヲ實施ス

昭和四年三月十日左記臺灣總督府告示第三十二號が發せられた。

昭和二年告示第三號公學校ニ於テ使用スヘキ教科用圖書中理科ノ項第四學年ノ欄「公學校理科掛圖」ヲ「公學校理科掛圖」第四學年用」ニ改メ昭和四年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

昭和四年十一月十六日臺灣總督府告示第五百十三號を以て左の如く公學校に於て使用すべき教科用圖書中に改正が行はれた。

昭和二年告示第三號公學校ニ於テ使用スヘキ教科用圖書中修身ノ項第一學年、第二學年、第三學年、第四學年ノ欄及算術ノ項第六學年ノ欄ヲ左ノ通改メ昭和五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

第一學年	公學校修身書 第一種兒童用卷一	第二學年	公學校修身書 第一種兒童用卷二	第三學年	公學校修身書 第一種兒童用卷三	第四學年	公學校修身書 第一種兒童用卷四
修身	公學校教師用卷一 第二種兒童用卷一	修身	公學校教師用卷二 第二種兒童用卷二	修身	公學校教師用卷三 第一種教師用卷三	修身	公學校教師用卷四 第一種教師用卷四

算 術	第六學年 尋常小學算術書 兒童用第六學年 教師用第六學年	公學校修身掛圖 第一種第一學年用上、下 第二種第一學年用上、下	公學校修身掛圖 第一種第二學年用上、下 第二種第二學年用上、下	公學校修身掛圖 第一種第三學年用上、下	公學校修身掛圖 第一種第四學年用上、下

昭和六年一月二十八日臺灣總督府令第二號を以て左の如く臺灣公立小學校規則中に改正が行はれた。これは授業日数の減少に關することである。

大正十一年府令第六十四號臺灣公立小學校規則中左ノ通改正ス  
第五十七條第二項中「臺灣總督ノ認可ヲ受ケ」ヲ削ル

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日又臺灣總督府令第三號を以て左の如く臺灣公立公學校規則中に改正が行はれた。これも亦授業日数の減少に關することである。

大正十一年府令第六十五號臺灣公立公學校規則中左ノ通改正ス  
第五十六條第二項中「臺灣總督ノ認可ヲ受ケ」ヲ削ル

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第三項 幼稚園

大正十一年四月一日臺灣總督府令第六十四號臺灣公立小學校規則の第十四條に小學校に幼稚園を併置するを得ることが定められ、又同日臺灣總督府令第六十五號臺灣公立公學校規則の第十四條に公學校に幼稚園を併置するを得ることが定められたことは前に述べた通である。(初等普通教育の項参照)

大正十二年三月二十七日臺灣總督府令第三十六號を以て左の如く臺灣公立幼稚園規則中に改正が行はれた。

大正十年府令第九號臺灣公立幼稚園規則中左ノ通改正ス

第五條 幼稚園ハ小學校又ハ公學校ニ併置スルコトヲ得

第六條 幼稚園ノ幼兒ノ年齢ハ三年以上七年迄トス

第七條中「内地人」ヲ「國語ヲ常用スル幼兒」ニ、「本島人」ヲ「國語ヲ常用セサル幼兒」ニ改メ第二項ヲ削ル

第八條中「本島人」ヲ「國語ヲ常用セサル幼兒」ニ改ム

第十四條 前條第一項ノ規定ノ免許狀ヲ有セサル者ハ保姆ト稱スルコトヲ得ス之ヲ保姆心得ト稱ス

第十八條 州又ハ廳地方費ニ於テ設置スル幼稚園ニ關シテハ前各條ノ規定ヲ準用ス但シ第一條、第三條及第四條ノ州知事又ハ廳長ノ職務ハ臺灣總督之ヲ行フ

附則

本令ハ大正十二年勅令第四十九號臺灣公立幼稚園官制施行ノ日ヨリ之ヲ適用ス

昭和六年三月二十九日臺灣總督府令第二十號を以て左の如く臺灣公立幼稚園規則中に改正が行はれた。

大正十年府令第九十九號臺灣公立幼稚園規則中左ノ通改正ス

第十八條 州ニ於テ設置スル幼稚園ニ關シテハ第一條及第三條ヲ除クノ外前各條ノ規定ヲ準用ス

廳地方費ニ於テ設置スル幼稚園ニ關シテハ前各條ノ規定ヲ準用ス但シ第一條、第三條及第四條ニ規定スル州知事又ハ廳長ノ職務ハ臺灣總督之ヲ行フ

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第四項 男子高等普通教育

大正十一年二月勅令第二十號臺灣教育令附則の規定に依り、從來の中學校及高等普通學校は同令に依り設立せられた中學校と看做された。而して高等普通學校は現に在學する生徒に就ては、其在學の間仍舊令に依ることを得るものとした。

大正十一年四月一日臺灣總督府令第六十六號を以て左の如く臺灣公立中學校規則が定められた。

臺灣公立中學校規則左ノ通相定ム

臺灣公立中學校規則

第一章 總則

第一條 中學校令ノ適用ニ付テハ同令中北海道又ハ府縣トアルハ州トス

第二條 中學校令中第四條、第八條、第十二條、第十六條第二項及豫科ニ關スル規定ハ之ヲ適用セス

第三條 中學校ニ於テハ入學受験料又ハ寄宿舍費ヲ徴收スルコトヲ得

第二章 設置及廢止

第四條 中學校ノ設置ニ付認可ヲ受ケムトスルトキハ設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ臺灣總督ニ申請スヘシ

一 學校ノ名稱

二 位置

郡、市、街、庄、大字、字、地番ヲ記スヘシ

三 學級數

四 各科ノ生徒定員

五 學科、學科課程及每週教授時數ニ關スル事項

六 授業料額並入學受験料及寄宿舍費ヲ徴收スルトキハ其ノ額

第三章 臺灣の教育



七 授業開始期日

八 校地、校舎、寄宿舎及職員宿舎ニ關スル事項

校地ニ付テハ地番、甲數ヲ記シタル圖面、建物ニ付テハ配置圖ヲ添附スヘシ但シ建物ヲ新築、増築又ハ改築スル場合ハ短計圖及設計仕様書ヲ添附スヘシ

九 農業實習地ヲ備フルトキハ其ノ位置ニ關スル事項

十 一年ノ收支概算

前項第一號乃至第九號ノ事項ヲ變更セムトスルトキハ設立者ニ於テ其ノ事由ヲ具シ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

第五條 中學校設置ノ認可ヲ受ケタルトキハ三十日內ニ設立者ニ於テ其ノ學則ヲ定メ臺灣總督ニ報告スヘシ之ヲ變更シタルトキ亦同シ

中學校ノ學則ニハ左ノ事項ヲ規定スヘシ

一 學科、學科課程及教授時數ニ關スル事項

二 課程ノ修了及卒業ノ認定ニ關スル事項

三 入學、退學及賞罰ニ關スル事項

四 授業料及入學受驗料ニ關スル事項

五 寄宿舎及寄宿舎費ニ關スル事項

第六條 中學校ノ廢止ニ付認可ヲ受ケムトスルトキハ設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ臺灣總督ニ申請スヘシ

一 事由

二 廢止期日

三 生徒處分方法

第七條 中學校ノ分校ノ設置及廢止ニ關シテハ第四條乃至第六條ノ例ニ依ル

第八條 中學校ヲ廢止シタルトキハ第四十七條ノ規定ニ依リ備付セル生徒學籍簿ヲ州知事ニ於テ十五年以上之ヲ保存スヘシ

第三章 學科目、其ノ程度及教科書

第九條 中學校ノ學科目ハ修身、國語及漢文、外國語、歷史、地理、數學、博物、物理及化學、法制及經濟、實業、圖畫、唱歌、體操トシ隨意科目トシテ臺灣語ヲ加フ

外國語ハ英語、獨語又ハ佛語トス

實業ハ隨意科目ト爲シ又ハ當分ノ內之ヲ關クコトヲ得

土地ノ情況ニ依リ臺灣語ハ之ヲ關クコトヲ得

第十條 中學校ニ於テハ中學校令第一條ノ旨趣ニ依リ生徒ヲ教育シ殊ニ國民道德ノ養成ニ關聯セル事項ハ何レノ學科目ニ於テモ常ニ留意シテ教授セムコトヲ要ス

各學科目ノ教授ハ其ノ目的及方法ヲ誤ルコトナク互ニ相聯絡シテ補益セムコトヲ要ス

第十一條 修身ハ教育ニ關スル勅語ノ旨趣ニ基キ道德上ノ思想及情操ヲ養成シ中等以上ノ社會ニ於ケル男子ニ必要ナル品格ヲ具ヘシメムコトヲ期シ實踐躬行ヲ勸奨スルヲ以テ要旨トス

修身ハ道德ノ要領ヲ授ケ國家、社會及家族ニ對スル責務並人格修養ニ關シ必要ナル事項ヲ知ラシメ特ニ我國道德

ノ特質ヲ悟ラシムヘシ

第十二條 國語及漢文ハ普通ノ言語文章ヲ了解シ正確且自由ニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ得シメ文學上ノ趣味ヲ養ヒ兼テ智徳ノ啓發ニ資スルヲ以テ要旨トス

國語及漢文ハ現時ノ國文ヲ主トシテ講讀セシメ進ミテハ近古ノ國文ニ及ホシ又平易ナル漢文ヲ講讀セシメ簡易ニシテ實用ニ適スル國文ヲ作ラシメ國語文法ノ大要及習字ヲ授クヘシ

第十三條 外國語ハ普通ノ英語、獨語又ハ佛語ヲ了解シ且之ヲ運用スルノ能ヲ得シメ兼テ智徳ノ増進ニ資スルヲ以テ要旨トス

外國語ハ發音、綴字ヨリ始メ近易ナル文章ノ讀方、譯解、話方、作文、書取ヲ授ケ進ミテハ普通ノ文章ニ及ホシ又文法ノ大要及習字ヲ授クヘシ

第十四條 歴史ハ歷史上重要ナル事蹟ヲ知ラシメ社會ノ變遷、邦國盛衰ノ由ル所ヲ理會セシメ特ニ我國ノ發達ヲ詳ニシテ國體ノ特異ナル所以ヲ明ニシ兼テ國民性格ノ養成ニ資スルヲ以テ要旨トス

歴史ハ日本歴史及外國歴史トシ日本歴史ニ於テハ國初ヨリ現時ニ至ルマテノ重要ナル事歴ヲ授ケ外國歴史ニ於テハ世界大勢ノ變遷ニ關スル事蹟ヲ主トシ著名ナル諸國ノ興亡、人文ノ發達及我國ノ文化ニ關係アル事蹟ノ大要ヲ知ラシムヘシ

第十五條 地理ハ地球ノ形狀、運動、地球表面及人類生活ノ狀態ヲ理會セシメ我國及諸外國ノ國勢ヲ知ラシムルヲ以テ要旨トス

地理ハ日本地理及我國ト重要ノ關係アル諸外國ノ地理ノ大要ヲ知ラシメ又地文ノ一斑ヲ授クヘシ

第十六條 數學ハ數量ニ關スル知識ヲ與ヘ計算ニ習熟セシメ應用ヲ自在ナラシメ兼テ思考ヲ精確ナラシムルヲ以テ要旨トス

數學ハ算術、代數、幾何、三角法ヲ授クヘシ

第十七條 博物ハ天然物ニ關スル知識ヲ與ヘ其ノ相互及人生ニ對スル關係ヲ理會セシメ兼テ觀察力ヲ發達セシムルヲ以テ要旨トス

博物ハ重要ナル植物、動物、礦物ニ關スル一般ノ知識並人體ノ構造、生理及衛生ノ大要ヲ授ケ又便宜實驗ヲ課スヘシ

第十八條 物理及化學ハ自然ノ現象ニ關スル知識ヲ與ヘ其ノ法則及人生ニ對スル關係ヲ理會セシメ兼テ觀察及思考ヲ精確ナラシムルヲ以テ要旨トス

物理及化學ハ重要ナル物理上及化學上ノ現象及定律、器械ノ構造及作用並元素及其ノ化合物ニ關スル知識ヲ授ケ又實驗ヲ課スヘシ

第十九條 法制及經濟ハ法制及經濟ニ關スル事項ニ付國民ノ生活ニ必要ナル知識ヲ得シムルヲ以テ要旨トス

法制及經濟ハ帝國憲法ノ大要及日常ノ生活ニ適切ナル法制上及經濟財政上ノ事項ヲ授クヘシ

第二十條 實業ハ實業ニ關スル知識技能ヲ得シメ兼テ實業ニ對スル趣味ト勤勞ヲ重ンスルノ習慣トヲ養フヲ以テ要旨トス

實業ハ農業、工業、商業等ノ中ニ就キ土地ノ情況ニ應シ適切ナル事項ヲ選擇シテ之ヲ授ケ又成ルヘク實習ヲ課スヘシ

第二十一條 圖畫ハ物體ヲ精密ニ觀察シ正確且自由ニ之ヲ畫クノ能ヲ得シメ意匠ヲ練リ美感ヲ養フヲ以テ要旨ト

ス

圖畫ハ自在畫及用器畫トシ自在畫ニ於テハ寫生畫ヲ主トシ臨畫ヲ加ヘ授ケ又時々自己ノ考案ヲ以テ畫カシメ用器畫ニ於テハ幾何畫ヲ授クヘシ

第二十二條 唱歌ハ歌曲ヲ唱フコトヲ得シメ美感ヲ養ヒ心情ヲ高潔ニシ兼テ徳性ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス  
唱歌ハ單音唱歌ヲ授ケ又便宜複音唱歌ヲ授クヘシ

第二十三條 體操ハ身體ノ各部ヲ均齊ニ發育セシメ身體ヲ強健ナラシメ動作ヲ機敏ナラシメ快活剛毅堅忍持久ノ精神ト規律ヲ守リ協同ヲ尙フノ習慣トヲ養フヲ以テ要旨トス  
體操ハ教練及體操ヲ授ケ又便宜運動生理ノ大要ヲ知ラシムヘシ又擊劍及柔術ヲ加フルコトヲ得

第二十四條 臺灣語ハ普通ノ言語又ハ文章ヲ了解シ日常ノ用務ヲ辨スルノ能ヲ得シムルヲ以テ要旨トス  
臺灣語ハ平易ニシテ實用ニ適スル會話ヲ授ケ又ハ文章ノ講讀及作文ヲ授クヘシ

第二十五條 各學年ニ於ケル各學科目ノ每週教授時數ハ別表ニ依ルヘシ  
臺灣語ノ每週教授時數ハ各學年二時内ニ於テ之ヲ定ムヘシ

實業ノ實習ハ第一項ノ教授時數外ニ於テ之ヲ課スルコトヲ得

第四學年及第五學年ニ於テハ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ生徒ノ全部又ハ一部ニ對シ修身及體操ヲ除キ第一項ノ教授時數ヲ彼此増減スルコトヲ得但シ一學科目ノ每週教授時數ハ二時以上ヲ増加スルコトヲ得ス

實業ヲ關キタル學校ニ於テハ其ノ每週教授時數ハ他ノ學科目ニ配當スヘシ  
體操ハ第一項ノ教授時數ヲ三時内増加スルコトヲ得

第二十六條 補習科ノ修業年限ハ一年内トシ其ノ學科目ハ第九條ノ學科目中ニ就キ之ヲ定ムヘシ

補習科ノ各學科目ハ隨意科目ト爲スコトヲ得

第二十七條 生徒身體ノ情況ニ依リ學習スルコト能ハサル學科目ハ之ヲ其ノ生徒ニ課セサルコトヲ得

第二十八條 學校長ニ於テ必要アリト認めタル生徒ニ對シテハ國語及漢文ノ每週教授時數第三學年以下ニ於テ各學年三時内ヲ増加シテ國語ノ補充教授ヲ爲スコトヲ得

第二十九條 夏季休業前後各四週内ハ學校長ニ於テ每週教授時數中九時内ヲ減スルコトヲ得

第三十條 中學校ノ教科書ハ臺灣總督府ニ於テ著作權ヲ有スルモノ又ハ文部大臣ノ檢定ヲ經タルモノニ就キ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ州知事之ヲ定ム

特別ノ必要アルトキハ州知事ハ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ前項以外ノ教科書ヲ使用セシムルコトヲ得

#### 第四章 學年、休業日及式日

第三十一條 學年ハ四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

學年ヲ分テテ左ノ三學期トス

第一學期 四月一日ヨリ八月二十日迄

第二學期 八月二十一日ヨリ十二月三十一日迄

第三學期 翌年一月一日ヨリ三月三十一日迄

補習科ニ關シテハ前二項ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

第三十二條 毎日ノ教授始終ノ時限ハ學校長之ヲ定ム

第三十三條 休業日ハ左ノ如シ

一 祭日、祝日

二 臺灣神社例祭日、始政記念日

三 日曜日

四 夏季休業 七月一日ヨリ八月二十日迄

五 年末年始休業 十二月二十九日ヨリ翌年一月五日迄

六 學年末休業 三月二十六日ヨリ同月三十一日迄

學校長ニ於テ必要ト認ムルトキハ前項第三號乃至第六號ノ休業日中適宜教授ヲ爲スコトヲ得

第三十四條 前條第一項ノ外臨時休業ヲ要スルトキハ學校長ニ於テ其ノ事由ヲ具シ州知事ノ認可ヲ受クヘシ  
非常變災其ノ他急迫ノ場合ニ際シ前項ノ認可ヲ受クル暇ナキトキハ學校長ニ於テ臨時休業ヲ爲スコトヲ得

第三十五條 傳染病豫防ノ爲必要アルトキ其ノ他非常變災アルトキハ州知事ニ於テ臨時休業ヲ命スルコトヲ得

第三十六條 教授日數ハ第一學年乃至第三學年ニ在リテハ每學年二百二十日以上トシ第四學年及第五學年ニ在リテハ二百日以上トス但シ特別ノ事情ニ依リ設立者ニ於テ臺灣總督ノ認可ヲ受ケタル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラス  
試験及修學旅行ニ充ツル日數ハ前項ノ日數ニ算入セス

第三十七條 紀元節、天長節祝日、一月一日及始政記念日ニハ職員及生徒學校ニ參集シテ祝賀ノ式ヲ行フヘシ

臺灣神社例祭日ニハ職員及生徒學校ニ參集シ學校長ハ臺灣神社ニ關スル誨告ヲ爲シ一同北白川宮能久親王ヲ奉祀セル神社ニ參拜又ハ遙拜ヲ爲スヘシ

### 第五章 編制、職員及設備

第三十八條 中學校ノ生徒數ハ八百人内トス但シ特別ノ事情アルトキハ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ之ヲ増スコトヲ得  
分校ノ生徒數ハ三百人内トス

第三十九條 學級ハ同學年ノ生徒ヲ以テ之ヲ編制スヘシ

一 學級ノ生徒數ハ五十人内トス

第二學年以上ニ於ケル各學年ノ學級數ハ第一學年ノ學級數ニ超過スルコトヲ得ス但シ特別ノ事情ニ依リ臺灣總督ノ認可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ場合ニ於テ分校ノ學級數ハ本校ノ學級數ニ算入ス

第四十條 修身、實業、唱歌、體操、臺灣語ハ學年又ハ學級ノ異ナル生徒ヲ合シテ同時ニ之ヲ教授スルコトヲ得

第四十一條 分校ニハ第四學年以上ノ生徒ヲ置クコトヲ得ス

第四十二條 中學校令第十三條ノ適用ニ付テハ同條第一項但書ノ文部大臣ノ職務ニ限り臺灣總督之ヲ行フ

第四十三條 中學校ノ職員ノ職務ニ關スル規程ハ州知事之ヲ定ム

第四十四條 中學校ニ於テハ其ノ規模ニ適應スル校地、校舍、體操場、校具、寄宿舎及職員宿舍ヲ備フヘシ

農業ヲ課スル學校ニ在リテハ實習地ヲ備フヘシ

第四十五條 校地ハ衛生ニ適シ道徳上及教授上ニ害ナク且危險ナル場所ニ接近セサルコトヲ要ス

校舍ハ教授上、管理上及衛生上適當ニシテ質朴堅牢ナルコトヲ要ス

第四十六條 校具ハ圖書、器械、器具、標本、模型及表簿等トス

第四十七條 中學校又ハ其ノ分校ニ於テ備フヘキ表簿ノ種類左ノ如シ

- 一 中學校ニ關係アル法令
- 二 學則、日課表、教科用圖書配當表及學校醫視察簿
- 三 職員ノ名簿、履歷書、出勤簿、擔任學科目及時間表
- 四 生徒ノ學籍簿、出席簿、身體檢查ニ關スル表及徴兵猶豫ニ關スル書類
- 五 入學試験及學年試験ノ問題、答案並成績表
- 六 圖書、器械、器具、標本、模型ノ目錄
- 七 往復書類

生徒學籍簿ニハ生徒ノ氏名、族籍、居所、生年月日、入學前ノ學歷、入學、轉學又ハ退學ノ年月日及其ノ學年、卒業ノ年月日、轉學又ハ退學ノ事由、徴兵事故並保證人ノ氏名及居所等ヲ記載スヘシ

第一項ノ表簿中生徒學籍簿ハ十五年以上之ヲ保存シ其ノ他ノ表簿ハ五年以上之ヲ保存スヘシ

第六章 入學、休學、退學及懲戒

第四十八條 生徒ヲ入學セシムヘキ時期ハ學年ノ始ヨリ三十日內トス但シ關員アルトキハ第二學期ノ始ヨリ十日內

ニ臨時入學セシムルコトヲ得

前項ノ規定ハ補習科ノ生徒入學ニ關シテハ之ヲ適用セス

第五學年ニハ轉學又ハ當該學年ニ於テ退學シタル者ノ再入學ヲ除クノ外新ニ生徒ノ入學ヲ許スコトヲ得ス

第四十九條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ第一學年入學ニ關シ尋常小學校卒業者ト同等以上ノ學力アル者ト認ム

一 他ノ中學校又ハ高等學校ノ豫科ヲ修了シタル者

二 國語、算術、日本歴史、地理、理科ニ就キ尋常小學校卒業ノ程度ニ依ル試験ニ合格シタル者

前項ノ試験ヲ受クルコトヲ得ル者ハ年齡十二年以上ノ者タルヘシ但シ尋常小學校第五學年ノ課程ヲ修了シ學業優秀且身體ノ發育十分ニシテ中學校ノ課程ヲ修ムルニ足ルコトヲ當該學校長ニ於テ證明シタル者ハ此ノ限ニ在ラス

第五十條 中學校ニ於テ第一學年入學志願者ノ數入學セシムヘキ人員ヲ超過スルトキハ試験ニ依リテ入學者ヲ選抜スヘシ

第五十一條 第二學年以上ニ入學ヲ許スヘキ者ハ相當ノ年齡ニ達シ前各學年ノ課程ヲ卒リタル者ト同等以上ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

前項入學者ノ學力ハ前各學年ノ程度ニ於テ其ノ各學科目ニ就キ試験ニ依リテ檢定スヘシ

第五十二條 中學校生徒ニシテ退學シタル者退學シタルトキヨリ一年內ニ於テ中學校ニ入學ヲ志願シタルトキハ同一學年以下ノ學年ニ限り入學ヲ許可スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ其ノ退學シタル中學校ニ再入學ヲ志願シタル者ニ限り試験ニ依ラサルコトヲ得

第五十三條 他ノ中學校ニ轉學ヲ志望スル生徒アルトキハ學校長ハ正當ノ事由アリト認メタル場合ニ限り其ノ生徒ノ在學證明書及成績表ヲ移轉先學校ニ送付スヘシ

移轉先學校ニ於テハ關員アル場合ニ限り前項生徒ノ轉學ヲ許可スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ轉學ヲ許可スル生徒ハ試験ヲ行ハスシテ同一學年ニ編入スルコトヲ得

第五十四條 各學年ノ課程ノ修了又ハ全學科ノ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ學業及試験ノ成績ヲ考查シテ之ヲ定ムヘシ

但シ正當ノ事由アリテ試験ニ闕席シタル者ニ對シテハ平素ノ學業ノ成績ノミヲ考查シテ之ヲ定ムルコトヲ得  
試験ハ學校長ノ見込ニ依リ之ヲ行ハサルコトヲ得

第五十五條 學校長ハ一學年ノ課程ヲ修了セサル生徒ノ學年ヲ進ムルコトヲ得ス

第五十六條 學校長ハ中學校ヲ卒業セリト認メタル者ニハ卒業證書ヲ授與スヘシ

第五十七條 補習科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ中學校ヲ卒業シタル者タルヘシ

補習科生徒ノ在學期間ハ中學校ヲ卒業シタル日ヨリ起算シ二年ヲ超ユルコトヲ得ス但シ徵兵令第二十三條ノ關係  
ヲ有セサル者ハ此ノ限ニ在ラス

補習科ヲ修了シ又ハ退學シタル者補習科ニ再入學スルトキハ其ノ終了又ハ退學前ニ於ケル補習科在學ノ期間ハ之  
ヲ前項ノ期間ニ算入ス

學校長ハ補習科ヲ修了セリト認メタル者ニハ修業證書ヲ授與スルコトヲ得

第五十八條 學校長ハ兵役ニ服スル生徒ニ對シテハ其ノ期間休學ヲ許可スヘシ

第五十九條 學校長ハ生徒疾病三月以上ニ亙ルトキハ一年內休學ヲ許スコトヲ得

第六十條 學校長ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ニハ退學ヲ命スヘシ

- 一 性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者
- 二 學力劣等ニシテ成業ノ見込ナシト認メタル者
- 三 引續キ一年以上闕席シタル者
- 四 正當ノ事由ナクシテ引續キ一月以上闕席シタル者

五 出席常ナラサル者

第六十一條 生徒退學セムトスルトキハ學校長ノ許可ヲ受クヘシ

第六十二條 學校長ハ教育上必要ト認メタルトキハ生徒ニ懲戒ヲ加フルコトヲ得

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十年府令第八十七號臺灣公立中學校規則及大正八年府令第四十六號臺灣公立高等普通學校規則ハ之ヲ廢止ス  
大正十一年勅令第二十號臺灣教育令第二十五條ノ規定ニ依ル中學校ニ付テハ本令第四條第一項第五號ノ事項ニ付、  
同臺灣教育令第二十六條ノ規定ニ依ル中學校ニ付テハ本令第四條第一項第一號及同項第三號乃至第七號ノ事項ニ付  
設立者ニ於テ本令施行ノ日ヨリ二十日內ニ臺灣總督ニ認可ヲ申請スヘシ  
本令施行ノ際現ニ臺灣公立中學校ニ在學スル生徒ニ課スヘキ臺灣語及其ノ程度ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依リ又ハ之  
ヲ斟酌スルコトヲ得

本令施行ノ際現ニ臺灣公立高等普通學校ニ在學スル生徒ニ付テハ其ノ在學ノ間仍從前ノ規定ニ依ル但シ休業日ニ關  
シテハ此ノ限ニ在ラス

(別表)

中學校各學科目每週教授時數表

學 科 目	學 年	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
	學 科 目					

計	體操	唱歌	國畫	實業	法制及經濟	物理及化學	博物學	數學	地理	歷史	外國語	國語及漢文	修身
二九	三	一	一				二	四	三		六	八	一
三〇	三	一	一				二	四	三		七	八	一
三〇	三		一			二	二	五	三		七	六	一
三〇	三		一	二		四	二	四	三		五	五	一
三〇	三		一	二		四	四		三		五	五	一

改正臺灣教育令第十一條に依れば男子高等普通教育は原則として中學校令に依るのであるが、臺灣特殊の事情に依り特例を設くる必要あるものに就ては臺灣總督に於て別段の定を爲し得ることとなつて居る。故に右の公立中學校規則に定むる所は必ずしも中學校令の規定と同一ではなす。

私立中學校に關しては別に大正十一年六月臺灣總督府令第三百三十八號私立中學校規則中に規定があり、大體右の公立中學校規則が準用せらるるのである。又私立中學校の設立に際しては其學校を維持するに足るべき收入を生ずる資産及設備又は之に要する資金を備へ、財團法人を設立すべきこととなつて居る。(私立學校に對する監督の項参照)

大正十一年の改正臺灣教育令に於ては男子最高等普通教育機關として新に高等學校を認め、高等學校に關しては高等學校令に依ることを本則とするのであるが、高等學校の設立及教員の資格に關しては必ずしも高等學校令の規定に依らず臺灣總督の定むる所に依ることとなつて居る。(改正臺灣教育令第十一條第三項) 而して大正十一年度より臺北市に官立の高等學校が設立せらるることとなり、大正十一年四月一日臺灣總督府令第八十四號を以て左の如く臺灣總督府高等學校規則が定められた。

臺灣總督府高等學校規則左ノ通相定ム  
臺灣總督府高等學校規則

第一章 總則

第一條 臺灣總督府高等學校ニ高等科及尋常科ヲ置ク

第二條 本令及特ニ規定スルモノノ外必要ナル事項ハ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ學校長之ヲ定ム

第二章 學科課程、編制及教科書

第一節 尋常科

第三條 尋常科ノ學科目ハ修身、國語及漢文、外國語、歴史、地理、數學、博物、物理及化學、圖畫、唱歌、體操

トス

外國語ハ英語、獨語又ハ佛語トス

第一項ノ學科目ノ外隨意科目トシテ臺灣語ヲ加フルコトヲ得

第四條 各學年ニ於ケル各學科目ノ每週教授時數ハ別記第一號表ニ依ルヘシ

臺灣語ノ每週教授時數ハ各學年二時内トシ前項ノ教授時數外ニ於テ之ヲ定ムヘシ

體操ノ每週教授時數ハ三時内増加スルコトヲ得

第五條 夏季休業前後各四週内ハ學校長ニ於テ每週教授時數中十時内ヲ減スルコトヲ得

第六條 尋常科ノ學科目ノ程度ニ關シテハ臺灣公立中學校規則ノ規定ヲ準用ス

第二節 高等科

第七條 高等科文科ノ學科目ハ修身、國語及漢文、第一外國語、第二外國語、歷史、地理、哲學概說、心理及論理、法制及經濟、數學、自然科學、體操トス

高等科理科ノ學科目ハ修身、國語及漢文、第一外國語、第二外國語、數學、物理、化學、植物及動物、礦物及地質、心理、法制及經濟、圖畫、體操トス

外國語ハ英語、獨語又ハ佛語トス

第二外國語ハ隨意科目トス

第八條 修身ハ教育ニ關スル勅語ノ旨趣ニ基キ道德上ノ思想及情操ヲ養成シ實踐躬行ヲ勸奨スルヲ以テ要旨トス  
修身ハ道德ノ要領ヲ授ケ國家、社會及家族ニ對スル責務並人格修養ニ關シ必要ナル事項ヲ知ラシメ特ニ我國民道

德ヲ會得シ其ノ實行ニ努メシムヘシ

第九條 國語及漢文ハ言語文章ヲ了解シ正確且自由ニ思想ヲ表ハスノ能力ヲ得シメ智德ヲ啓發シ文學上ノ趣味ヲ養フヲ以テ要旨トス

國語及漢文ハ文科ニ在リテハ近世、近古及中古ノ國文ヲ授ケ進ミテ上古文ノ一般ニ及ホシ又普通ノ漢文ヲ講讀セシメ國語文法及國文學史ノ大要ヲ授ケ作文ニ習熟セシムヘシ

理科ニ在リテハ近世及近古ノ國文並普通ノ漢文ヲ授ケ作文ニ習熟セシムヘシ

第十條 外國語ハ英語、獨語又ハ佛語ヲ了解シ且之ニ依リテ思想ヲ表ハスノ能力ヲ得シメ兼テ智德ノ増進ニ資スルヲ以テ要旨トス

外國語ハ發音、綴字、讀方、譯解、話方、作文、書取及文法ヲ授クヘシ

第十一條 歷史ハ重要ナル古今ノ事蹟ヲ知ラシメ邦國ノ盛衰、文化ノ發達ヲ理會セシメ特ニ我國運發展ノ由來、國體ノ特異ナル所以ヲ明ニシ國民性格ノ養成ニ資スルヲ以テ要旨トス

歷史ハ日本歷史、東洋歷史及西洋歷史ヲ授クヘシ

第十二條 地理ハ我國及重ナル世界各國ノ現狀ヲ知ラシムルヲ以テ要旨トス

地理ハ我國及諸外國ノ政治、經濟等ニ關スル地理上ノ知識ヲ授クヘシ

第十三條 哲學概說ハ思想界ニ關スル知識ヲ與ヘ哲學ノ概念ヲ會得セシムルヲ以テ要旨トス

哲學概說ハ東洋及西洋ノ哲學、宗教等ニ就キテ其ノ大要ヲ授クヘシ

第十四條 心理及論理ハ心意ニ關スル知識ヲ得シメ思考ヲ鍛練セシムルヲ以テ要旨トス



心理及論理ハ各種ノ精神作用、思考ノ原則及其ノ方法ノ概要ヲ授クヘシ

第十五條 數學ハ數理ヲ會得セシメ計算應用ニ熟セシメ思考ヲ精確ナラシムルヲ以テ要旨トス  
數學ハ文科ニ在リテハ數學諸論ノ大要ヲ授ケ理科ニ在リテハ代數、立體幾何、三角法、初等解析幾何、初等微分積分及初等力學ヲ授クヘシ

第十六條 自然科學ハ天然物及自然ノ現象ニ關スル知識ヲ與ヘ其ノ法則ヲ理會セシムルヲ以テ要旨トス

自然科學ハ生物、地質、物理、化學等ニ關スル主要ナル事項ヲ授クヘシ

第十七條 物理、化學ハ自然ノ現象ニ關スル知識ヲ與ヘ其ノ法則ヲ理會セシメ之カ應用ヲ示シ兼テ觀察工夫ノ力ヲ養フヲ以テ要旨トス

物理ハ力學、物性、音響、熱、光、磁氣、電氣ヲ授ケ又主要ナル實驗ヲ課スヘシ

化學ハ無機化學及有機化學ヲ授ケ又主要ナル實驗ヲ課スヘシ

第十八條 植物及動物、礦物及地質ハ天然物ニ關スル知識ヲ與ヘ之カ應用ヲ示シ兼テ觀察ヲ精確ナラシムルヲ以テ要旨トス

植物及動物ハ生物ノ形態、生理、分類、進化ニ關スル知識ヲ授ケ又主要ナル實驗ヲ課スヘシ

礦物及地質ハ礦物ノ產狀、性質、用途、地球ノ構成及其ノ變遷ニ關スル知識ヲ授ケ又便宜主要ナル實驗ヲ課スヘシ

第十九條 法制及經濟ハ法制及經濟ニ關スル事項ニ就キ國民生活ニ必要ナル知識ヲ得シムルヲ以テ要旨トス  
法制及經濟ハ帝國憲法ノ大要及日常ノ生活ニ適切ナル法制上及經濟財政上ノ事項ヲ授クヘシ

第二十條 圖畫ハ形體ヲ正確且自由ニ畫クノ能力ヲ得シメ意匠ヲ練リ思考ヲ精確ナラシムルヲ以テ要旨トス  
圖畫ハ自在畫、平面幾何畫、立體幾何畫ヲ授クヘシ

第二十一條 體操ハ身體ヲ健全ニシ動作ヲ敏活ナラシメ剛健ノ精神ト規律ヲ守リ協同ヲ尙フノ習慣トヲ養フヲ以テ要旨トス

體操ハ教練及體操ヲ授クヘシ又劍道及柔道ヲ加フルコトヲ得

第二十二條 文科ノ各學年ニ於ケル各學科目ノ每週教授時數ハ別記第二號表ニ依ルヘシ

第二十三條 理科ノ各學年ニ於ケル各學科目ノ每週教授時數ハ別記第三號表ニ依ルヘシ

第二十四條 夏季休業前後各四週内ハ學校長ニ於テ每週教授時數中十時内ヲ減スルコトヲ得

### 第三節 教授上ノ注意、編制及教科書

第二十五條 高等學校ニ於テハ高等學校令第一條ノ旨趣ニ依リ生徒ヲ教育シ殊ニ國民道德ノ充實ニ關聯セル事項ハ何レノ學科目ニ於テモ常ニ留意シテ教授セムコトヲ要ス

各學科目ノ教授ハ其ノ目的及方法ヲ誤ルコトナク互ニ相聯絡シテ補益セムコトヲ要ス

第二十六條 尋常科ニ於テ學級ノ異ナル生徒ヲ合シテ同時ニ之ヲ教授スルコトヲ得ル場合ニ關シテハ臺灣公立中學校規則ノ規定ヲ準用ス

高等科ニ於テハ國語及漢文、外國語、數學ヲ教授スル場合ヲ除クノ外學校長ニ於テ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ學級ノ異ナル生徒ヲ合シテ同時ニ之ヲ教授スルコトヲ得

第二十七條 臺灣總督府高等學校ノ教科書ハ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ學校長之ヲ定ム

第三章 學年、休業日及式日

第二十八條 學年ハ四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

第二十九條 毎日ノ教授始終ノ時限ハ學校長之ヲ定ム

第三十條 休業日ハ左ノ如シ

一 祭日、祝日

二 臺灣神社例祭日、始政記念日

三 日曜日

四 夏季休業 七月一日ヨリ八月二十日迄

五 年末年始休業 十二月二十九日ヨリ翌年一月五日迄

六 學年末休業 三月二十六日ヨリ同月三十一日迄

學校長ニ於テ必要ト認ムルトキハ前項第三號乃至第六號ノ休業日中適宜教授ヲ爲スコトヲ得

第三十一條 前條第一項ノ外臨時休業ヲ要スルトキハ學校長ニ於テ其ノ事由ヲ具シ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

非常變災其ノ他急迫ノ場合ニ際シ前項ノ認可ヲ受クル暇ナキトキハ學校長ニ於テ臨時休業ヲ爲スコトヲ得

第三十二條 紀元節、天長節祝日、一月一日及始政記念日ニハ職員及生徒學校ニ參集シテ祝賀ノ式ヲ行フヘシ

臺灣神社例祭日ニハ職員及生徒學校ニ參集シ學校長ハ臺灣神社ニ關スル誨告ヲ爲シ一同北白川宮能久親王ヲ奉祀

セル神社ニ參拜又ハ遙拜ヲ爲スヘシ

第四章 入學、休學、退學及懲戒

第三十三條 生徒ヲ入學セシムヘキ時期ハ學年ノ始ヨリ三十日内トス

第三十四條 入學志願者ニ對シテハ體格検査ヲ行ヒ之ニ合格シタル者ニ限り入學セシムヘシ但シ尋常科ヨリ高等科

ニ進入スル者ニ關シテハ此ノ限ニ在ラス

第三十五條 他ノ高等學校又ハ中學校ノ豫科ヲ修了シタル者及高等學校ニ於テ國語、算術、日本歴史、地理、理科

ニ就キ尋常小學校卒業ノ程度ニ依リ行フ試験ニ合格シタル者ハ尋常科ノ入學ニ關シ尋常小學校ヲ卒業シタル者ト

同等以上ノ學力アリト認ム

第三十六條 尋常科第一學年入學志願者ノ數入學ヲ許スヘキ人員ヲ超過スルトキハ尋常小學校卒業ノ程度ニ依リ試

驗ヲ行ヒ入學者ヲ選抜スヘシ

第三十七條 尋常科第二學年以上ニ入學ヲ許スヘキ者ハ第一學年ニ入學スル資格ヲ有シ且前各學年ノ課程ヲ修了シ

タル者ト同等以上ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

前項入學者ノ學力ハ前各學年ノ程度ニ於テ其ノ各學科目ニ就キ試験ニ依リテ之ヲ檢定スヘシ

第三十八條 臺灣總督府高等學校尋常科ヲ修了シタル者ハ其ノ他ノ志願者ニ先チ之ヲ高等科ニ入學セシムヘシ

第三十九條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ高等科ノ入學ニ關シ中學校第四學年ヲ修了シタル者ト同等以上ノ學力ア

リト認ム

一 他ノ高等學校ノ尋常科ヲ修了シタル者

二 大正八年文部省令第九號高等學校入學資格試験規程又ハ第四十條ノ規定ニ依ル高等學校高等科入學資格試験

ニ合格シタル者

三 明治三十六年文部省令第十四號專門學校入學者檢定期程又ハ大正十年府令第九十五號專門學校入學者檢定ニ關スル規程ニ依ル試驗檢定ニ合格シタル者

四 前號ノ規程ニ依リ一般ノ專門學校ノ入學ニ關シ無試驗檢定ノ指定ヲ受ケタル者

五 文部大臣又ハ臺灣總督ニ於テ高等學校高等科ノ入學ニ關シ指定シタル者

第四十條 臺灣總督府高等學校高等科ノ入學資格試驗ニ關シテハ大正八年文部省令第九號高等學校高等科入學資格試驗規程ノ規定ヲ準用ス但シ同令第二條ニ依リ高等科入學資格試驗ヲ行フ中學校ハ大正十年府令第九十五號專門學校入學者檢定ニ關スル規程ニ依リ試驗檢定ヲ行フコトヲ得ル中學校トス

第四十一條 臺灣總督府高等學校尋常科ヲ修了シタル者以外ノ入學志願者ノ數高等科各科ニ入學セシムヘキ人員ニ超過スルトキハ中學校第四學年修了ノ程度ニ依ル試驗ヲ行ヒ入學者ヲ選拔スヘシ但シ無試驗檢定ヲ行ヒテ入學者ヲ定ムルコトヲ得

學校長ハ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ前項入學者ノ選定ニ關スル規程ヲ定ムヘシ

第四十二條 高等科第二學年以上ニ入學ヲ許スヘキ者ハ第一學年ニ入學スル資格ヲ有シ且前各學年ノ課程ヲ修了シタル者ト同等以上ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

前項入學者ノ學力ハ前各學年ノ程度ニ於テ其ノ各學科目ニ付試驗ニ依リ之ヲ檢定スヘシ

第四十三條 生徒ニシテ退學シタル者一年內ニ再入學ヲ志願シタルトキハ試驗ニ依ラスシテ原學年以下ノ學年ニ入學ヲ許可スルコトヲ得

他ノ高等學校ノ生徒ニシテ退學シタル者一年內ニ入學ヲ志願シタルトキハ試驗ヲ行ヒ原學年以下ノ學年ニ入學ヲ

許可スルコトヲ得

第四十四條 生徒ニシテ他ノ高等學校ニ又ハ他ノ高等學校ヨリ轉學ヲ志望スル者アルトキハ關係學校長ノ協議ニ依リ之ヲ許可スルコトヲ得

第四十五條 尋常科ト中學校トノ相當學年相互ノ間ニ於テハ前條ノ規定ニ準シ轉學ヲ許可スルコトヲ得

第四十六條 各學年ノ課程ヲ修了又ハ全學科ノ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ學業及試驗ノ成績ヲ考查シテ之ヲ定ムヘシ但シ正當ノ事由アリテ試驗ニ缺席シタル者ニ對シテハ平素ノ成績ノミヲ考查シテ之ヲ定ムルコトヲ得

試驗ハ學校長ノ見込ニ依リ之ヲ行ハサルコトヲ得

第四十七條 學校長ハ一學年ノ課程ヲ修了セサル生徒ノ學年ヲ進ムルコトヲ得ス

第四十八條 學校長ハ高等科ヲ卒業シタル者ニハ卒業證書、尋常科ヲ修了シタル者ニハ修了證書ヲ授與スヘシ

第四十九條 學校長ハ正當ノ事由アリト認メタルトキハ生徒ノ休學ヲ許可スヘシ

第五十條 學校長ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ニハ退學ヲ命スヘシ

- 一 性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者
- 二 學力劣等ニシテ成業ノ見込ナシト認メタル者
- 三 引續キ一年以上闕席シタル者
- 四 正當ノ事由ナクシテ引續キ一月以上闕席シタル者
- 五 出席常ナラサル者

第五十一條 生徒退學セムトスルトキハ學校長ノ許可ヲ受クヘシ

第五十二條 學校長ハ教育上必要ト認メタルトキハ生徒ニ懲戒ヲ加フルコトヲ得

第五章 授業料及入學檢定料

第五十三條 授業料ハ每學年尋常科ニ在リテハ三十圓高等科ニ在リテハ四十圓トシ左ノ三期ニ分チ之ヲ徵收ス

第一期 (四月一日ヨリ八月二十日迄)

尋常科十圓 高等科十五圓

第二期 (八月二十一日ヨリ十二月三十一日迄)

尋常科十圓 高等科十五圓

第三期 (翌年一月一日ヨリ三月三十一日迄)

尋常科十圓 高等科十圓

第五十四條 授業料ハ生徒ノ學籍ニ入リタル期ノ分ヨリ之ヲ除キタル期ノ分迄徵收ス

生徒休學全期ニ互ルトキハ其ノ期分ノ授業料ハ之ヲ徵收セス

第五十五條 入學檢定料ハ尋常科ニ在リテハ二圓、高等科ニ在リテハ三圓トシ入學出願ノ際ニ之ヲ徵收ス

第五十六條 入學檢定料ハ一旦納付シタルトキハ何等ノ事由アルモ返付セス

第五十七條 尋常科ヨリ高等科ニ進ム者及他 高等學校ヨリ轉學スル者ニハ入學檢定料ヲ徵收セス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

(別記)

第一號表

尋常科各學年學科目及每週教授時數表

學科目	學年			
	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
修身	一	一	一	一
國語及漢文	八	八	六	六
外國語	六	七	七	七
歷史	三	三	三	三
地理	三	三	三	三
數學	四	四	五	四
博物學	二	二	二	二
物理及化學			二	四
圖畫	一	一	一	一
唱歌	一	一		
體操	三	三	三	三
計	二九	三〇	三〇	三一

第二號表

高等科文科各學年學科目及每週教授時數表

學科目	第一學年			第二學年			第三學年						
	身	國語及漢文	第一外國語	第二外國語	歷史	地理	哲學概說	心理及論理	法制及經濟	數學	自然科學	體操	計
第一外國語	一	六	九										(三)九
第二外國語				(四)									(三)九
國語及漢文	一	五	八										(三)九
歷史				(四)	五								(三)九
地理						二							(三)九
哲學概說							二						(三)九
心理及論理							二						(三)九
法制及經濟							二						(三)九
數學							三						(三)九
自然科學							三						(三)九
體操							三						(三)九
計													(三)八

第一外國語ハ尋常科又ハ中學校ニ於テ生徒ノ履修シタル外國語トス但シ生徒ノ志望ニ依リ第一外國語ノ種類ヲ轉換

スルコトヲ得シム此ノ場合ニ於テハ各學年ニ於ケル第一外國語及第二外國語ノ每週教授時數ハ左表ニ依ルヘシ

學科目	第一學年			第二學年			第三學年		
	身	第一外國語	第二外國語	身	第一外國語	第二外國語	身	第一外國語	第二外國語
第一外國語	一	二	(三)						
第二外國語			(三)						
國語及漢文	一	一	(三)						
計			(三)四						(三)四

第二外國語ヲ修メサル者ニ對シテハ其ノ教授時數ヲ便宜他ノ學科目ニ配當スルコトヲ得

第三號表

高等科理科各學年學科目及每週教授時數表

學科目	第一學年			第二學年			第三學年		
	身	國語及漢文	第一外國語	第二外國語	數學	自然科學	體操	計	
第一外國語	一	四	八					(三)四	
第二外國語				(四)				(三)四	
國語及漢文	一	二	六					(三)四	
計								(三)四	



公立ノ中學校及高等女學校ニ於ケル教員免許狀ヲ有セサル教員採用規則

第一條 中學校又ハ高等女學校ニ於テ相當ノ教員免許狀ヲ有スル者ヲ得難キトキハ本令ニ依リ教員免許狀ヲ有セサル者ヲ教員ニ採用スルコトヲ得

本令ニ於テ教員ト稱スルハ教諭及生徒ノ教育ヲ擔任スル者ヲ謂フ

第二條 中學校ノ擊劍又ハ柔術ノ教授ヲ擔任セシムル爲當分ノ内左ノ各號ノ一ニ該當スル者ヲ教員ニ採用スルコトヲ得

一 文部大臣ニ於テ明治三十三年文部省令第十五號第一條ノ二第一號ニ依リ指定シタル專門學校ノ卒業者

二 明治四十一年文部省令第三十二號教員檢定ニ關スル規程第五條第一號又ハ第三號乃至第六號ノ一ニ該當スル者ニシテ主トシテ擊劍又ハ柔術ヲ教授スル學校ニ於テ三年以上修業シ臺灣總督ニ於テ特ニ其ノ成績優良ナリト認定シタル者

第三條 高等女學校ニハ第二學年以下ノ教授ヲ擔任セシムル爲臺灣教員免許令ニ依リ授與セラレタル小學校本科正教員免許狀若ハ公學校甲種本科正教員免許狀ヲ有スル者又ハ小學校令ニ依リ授與セラレタル小學校本科正教員免許狀ヲ有スル者ヲ採用スルコトヲ得

第四條 中學校又ハ高等女學ニ於テ相當ノ教員免許狀ヲ有スル者又ハ前二條ニ該當スル者ヲ得難キトキハ其ノ他ノ者ヲ教員ニ採用スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ教員ヲ採用セムトスルトキハ知事ニ於テ本人ノ履歷書並擔任ノ學科目及毎週教授時數ヲ具シ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ但シ教務囑託ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

前項ニ依リ採用シタル教員ノ擔任學科目ヲ變更セムトスルトキハ其ノ事由ヲ具シ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

第五條 中學校又ハ高等女學校ニ於テ前三條ニ依リ採用シタル專任教諭ノ數ハ臺灣公立學校官制第十三條第一項ニ依リ規定シタル專任教諭定員ノ三分ノ一ヲ超過スルコトヲ得ス

第六條 中學校又ハ高等女學校ニ於テ新ニ採用セムトスル者ヲ加算シ第二條乃至第四條ニ依リ採用シタル者ノ數ハ相當ノ教員免許狀ヲ有スル者ノ二分ノ一ヲ超過スルコトヲ得ス

特別ノ事情ニ因リ前項ノ規定ニ依リ難キトキハ知事ニ於テ新ニ採用セムトスル者及現在教員ノ官職氏名、學科目擔任時數、學歴及免許資格表ヲ添附シ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際現ニ中學校又ハ高等女學校ノ教諭ノ職ニ在ル者ニシテ相當ノ教員免許狀ヲ有セサル者ハ其ノ學校在職中ニ限り第四條第二項ノ規定ニ依リ認可ヲ受ケタルモノト看做ス

本令施行ノ際現ニ第五條又ハ第六條第一項ノ規定ニ牴觸スル中學校又ハ高等女學校ニ付テハ本令施行ノ日ヨリ三十日內ニ知事ニ於テ臺灣總督ノ認可ヲ受ケ當分ノ内其ノ制限ニ依ラサルコトヲ得

大正十三年一月八日臺灣總督府令第一號を以て左の如く臺灣公立中學校規則中に改正が行はれた。

大正十一年府令第六十六號臺灣公立中學校規則第三十條中「臺灣總督ノ認可ヲ受ケ州知事之ヲ定ム」ヲ「州知事ノ認可ヲ受ケ學校長之ヲ定ム」ニ、「前項以外ノ教科書ヲ使用セシムルコトヲ得」ヲ「前項以外ノ教科書ノ使用ヲ認

可スルコトヲ得」ニ改ム

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十三年七月二十日臺灣總督府令第六十一號を以て左の如く臺灣公立中學校規則中に改正が行はれた。

大正十一年府令第六十六號臺灣公立中學校規則中左ノ通改正ス

第四條第一項第五號中「、學科課程及毎週教授時數」ヲ削リ第八號中「寄宿舎及職員宿舎」ヲ「及寄宿舎」ニ改メ但書ヲ削ル

同條第二項中「第一號乃至第九號ノ事項」ヲ「第一號乃至第七號若ハ第九號ノ事項又ハ第八號中ノ校地」ニ改メ左ノ一項ヲ加フ

第一項第八號中ノ校舎又ハ寄宿舎ヲ變更スルトキハ設立者ニ於テ配置圖ヲ添ヘ臺灣總督ニ之ヲ報告スヘシ

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十四年三月五日臺灣總督府令第七號を以て左の如く臺灣公立中學校規則中に改正が行はれた。

大正十一年府令第六十六號臺灣公立中學校規則中左ノ通改正ス

第三十一條中「八月二十日」ヲ「八月三十一日」ニ、「八月二十一日」ヲ「九月一日」ニ改ム

第三十三條中「七月一日ヨリ八月二十日」ヲ「七月十一日ヨリ八月三十一日」ニ改ム

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日又臺灣總督府令第十二號を以て左の如く臺灣總督府高等學校規則中に改正が行はれた。

大正十一年府令第八十四號臺灣總督府高等學校規則中左ノ通改正ス

第三十條中「七月一日ヨリ八月二十日」ヲ「七月十一日ヨリ八月三十一日」ニ改ム

第三十九條中第三號ヲ左ノ如ク改ム

三 專門學校入學者檢定ニ關スル規程ニ依ル試験檢定ニ合格シタル者

第四十條中但書ヲ左ノ如ク改ム

但シ試験ハ公立ノ中學校ニ於テ之ヲ施行ス

第五十三條中「八月二十日」ヲ「八月三十一日」ニ、「八月二十一日」ヲ「九月一日」ニ改ム

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十四年八月二十五日臺灣總督府令第五十三號を以て左の如く臺灣公立中學校規則中に改正が行はれた。

大正十一年府令第六十六號臺灣公立中學校規則中左ノ通改正ス



第三編 新領土其他に於ける教育

第九條第三項ヲ左ノ如ク改ム

法制及經濟、實業、唱歌ハ當分ノ内之ヲ關クコトヲ得  
實業ハ隨意科目ト爲スコトヲ得

大正十五年三月二十八日臺灣總督府令第二十五號を以て左の如く臺灣總督府高等學校規則中に改正が行はれた。

大正十一年府令第八十四號臺灣總督府高等學校規則中左ノ通改正ス

第四條第三項ヲ左ノ如ク改ム

體操ノ毎週教授時數ハ適宜増加スルコトヲ得

體操中ノ教練ノ爲行フ野外演習ハ第一項ノ毎週教授時數外トス

第二十三條ノ二 體操中ノ教練ノ爲行フ野外演習ハ前二條ノ毎週教授時數外トス

別記第一號表中體操及計ノ項ヲ左ノ如ク改ム

體操	五	五	五	五	五
計	三一	三二	三二	三二	三三

附則

本令ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

同日又臺灣總督府令第二十七號を以て左の如く臺灣公立中學校規則中に改正が行はれた。

大正十一年府令第六十六號臺灣公立中學校規則中左ノ通改正ス

第二十五條第五項中「實業」ヲ「法制及經濟、實業又ハ唱歌」ニ、同條第六項ヲ左ノ如ク改ム

體操ハ第一項ノ教授時數ヲ適宜増加スルコトヲ得

體操中ノ教練ノ爲行フ野外演習ハ第一項ノ毎週教授時數外トス

別表中體操及計ノ項ヲ左ノ如ク改ム

體操	五	五	五	五	五
計	三一	三二	三二	三二	三二

附則

本令ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

昭和二年四月二十四日臺灣總督府令第二十六號を以て左の如く「公立ノ中學校及高等女學校ニ於ケル教員免許狀ヲ有セサル教員採用規則」中に改正が行はれた。

大正十二年府令第六十六號公立ノ中學校及高等女學校ニ於ケル教員免許狀ヲ有セサル教員採用規則中「知事」ヲ「州知事又ハ廳長」ニ改ム

昭和三年四月二十八日臺灣總督府令第十八號を以て左の如く臺灣總督府高等學校規則中に改正が行はれた。

大正十一年府令第八十四號臺灣總督府高等學校規則中左ノ通改正ス

第三章 臺灣の教育

第三十二條中「天長節祝日」ヲ「天長節、明治節」ニ改ム

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

同日又臺灣總督府令第二十一號を以て左の如く臺灣公立中學校規則中に改正が行はれた。

大正十一年府令第六十六號臺灣公立中學校規則中左ノ通改正ス

第三十七條中「天長節祝日」ヲ「天長節、明治節」ニ改ム

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

昭和六年二月二十一日臺灣總督府令第十號を以て左の如く臺灣總督府高等學校規則中に改正が行はれた。

大正十一年府令第八十四號臺灣總督府高等學校規則中左ノ通改正ス

第五十三條 授業料ハ一學年尋常科ニ在リテハ四十圓高等科ニ在リテハ六十圓トシ左ノ三期ニ分チ之ヲ徴收ス

第一學期(四月一日ヨリ八月三十一日迄)

尋常科 十五圓 高等科 二十圓

第二學期(九月一日ヨリ十二月三十一日迄)

尋常科 十五圓 高等科 二十圓

第三學期(翌年一月一日ヨリ三月三十一日迄)

尋常科 十圓 高等科 二十圓

附則

本令ハ昭和六年度以降ノ入學者ニ對シテ之ヲ適用ス

昭和六年七月一日臺灣總督府令第四十號を以て左の如く臺灣公立中學校規則中に改正が行はれた。

大正十一年府令第六十六號臺灣公立中學校規則中左ノ通改正ス

第二十三條第二項中「教練及體操ヲ授ケ又」トアルヲ「體操、教練、遊戲及競技ヲ授ケ」ニ、「擊劍及柔術」トアルヲ「劍道、柔道及水泳」ニ改ム

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

昭和七年四月一日臺灣總督府令第二十三號を以て左の如く臺灣總督府高等學校規則中に改正が行はれた。

大正十一年府令第八十四號臺灣總督府高等學校規則中左ノ通改正ス

第三十條 休業日ハ左ノ如シ

一 祭日、祝日

二 臺灣神社例祭日、始政記念日

第三章 臺灣の教育

三日曜日

四 夏季休業日 七月十一日より八月三十一日迄

五 冬季休業日 十二月二十九日より翌年一月五日迄

六 春季休業日 三月二十六日より同月三十一日迄

七 開校記念日

學校長ニ於テ必要ト認ムルトキハ前項第三號乃至第七號ノ休業日中適宜教授ヲ爲スコトヲ得

第五十三條 授業料ハ一學年尋常科ニ在リテハ四十圓高等科ニ在リテハ六十圓トシ左ノ二期ニ分チテ之ヲ徵收ス

第一學期 (四月一日ヨリ十月三十一日迄)

尋常科 二十圓 高等科 三十圓

第二學期 (十一月一日ヨリ翌年三月三十一日迄)

尋常科 二十圓 高等科 三十圓

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

昭和七年十一月二十五日臺灣總督府令第五十八號を以て左の如く臺灣總督府高等學校規則中に改正が行はれた。

大正十一年府令第八十四號臺灣總督府高等學校規則中左ノ通改正ス

第五十五條 入學檢定料ハ尋常科ニ在リテハ三圓、高等科ニ在リテハ五圓トシ入學出願ノ際之ヲ徵收ス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第五項 女子高等普通教育

大正十一年二月勅令第二十號臺灣教育令附則の規定に依り、從來の高等女學校及女子高等普通學校は同令に依り設立せられたる高等女學校と看做された。而して女子高等普通學校に現に在學する生徒に就ては其在學の間仍舊令に依ることを得るものとした。

大正十一年四月一日臺灣總督府令第六十七號を以て左の如く臺灣公立高等女學校規則が定められた。

臺灣公立高等女學校規則左ノ通相定ム

臺灣公立高等女學校規則

第一章 總則

第一條 高等女學校令第二條、第三條、第四條、第八條、第十一條ノ四、第十三條及第十七條第二項ハ之ヲ適用セス

第二條 高等女學校ニ於テハ入學受驗料又ハ寄宿舍費ヲ徵收スルコトヲ得

第三條 高等女學校ニ附置スル師範學校ノ演習科及講習科ニ關スル規程ハ別ニ之ヲ定ム

演習科又ハ講習科ヲ置キタル學校ノ附屬小學校及附屬公學校ニ關スル規程ハ別ニ之ヲ定ム

第二章 設置及廢止

第四條 高等女學校ハ州立トス

臺灣總督ハ土地ノ情況ニ應シ必要ナル高等女學校ノ設置ヲ州ニ命スルコトアルヘシ

第五條 高等女學校ノ設置ニ付認可ヲ受ケムトスルトキハ設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ臺灣總督ニ申請スヘシ

一 學校ノ名稱

二 位置

郡市街庄大字字地番ヲ記スヘシ

三 學級數

四 各科ノ生徒定員

五 學科、修業年限、學科課程及教授時數ニ關スル事項

六 授業料額並入學受驗料及寄宿舍費ヲ徵收スルトキハ其ノ額

七 授業開始期日

八 校地、校舎、寄宿舍及職員宿舍ニ關スル事項

校地ニ付テハ地番申數ヲ記シタル圖面、建物ニ付テハ配置圖ヲ添附スヘシ但シ建物ヲ新築、増築又ハ改築

スル場合ハ矩計圖及設計仕様書ヲ添附スヘシ

九 農業實習地ヲ備フルトキハ其ノ位置ニ關スル事項

十 一年ノ收支概算

前項第一號乃至第九號ノ事項ヲ變更セムトスルトキハ設立者ニ於テ事由ヲ具シ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

第六條 高等女學校設置ノ認可ヲ受ケタルトキハ三十日內ニ設立者ニ於テ其ノ學則ヲ定メ臺灣總督ニ報告スヘシ之

ヲ變更シタルトキ亦同シ

高等女學校ノ學則ニハ左ノ事項ヲ規定スヘシ

一 學科、修業年限、學科課程及教授時數ニ關スル事項

二 課程ノ修了及卒業ノ認定ニ關スル事項

三 入學、退學及賞罰ニ關スル事項

四 授業料及入學受驗料ニ關スル事項

五 寄宿舍及寄宿舍費ニ關スル事項

第七條 高等女學校ノ廢止ニ付認可ヲ受ケムトスルトキハ設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ臺灣總督ニ申請スヘシ

一 事由

二 廢止期日

三 生徒處分方法

第八條 高等女學校ヲ廢止シタルトキハ第五十四條ノ規定ニ依リ備付セル生徒學籍簿ヲ州知事ニ於テ十五年以上之

ヲ保存スヘシ

第三章 學科目、其ノ程度及教科書

第九條 高等女學校ノ學科目ハ修身、國語、外國語、歷史、地理、數學、理科、圖畫、家事、裁縫、音樂、體操ト

シ隨意科目トシテ臺灣語ヲ加フ